（公財）岐阜市教育文化振興事業団報告書第 21 集

鷺山市場遺跡

－岐阜市都市計画事業鷺山・下土居土地区画整理事業における区画道路建設に伴う緊急発掘調査－

2012 年

岐阜市鷺山・下土居土地区画整理組合
（公財）岐阜市教育文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所

１　鷺山市場遺跡H2区（北西から）

２　鷺山市場遺跡H2（西から）

１　鷺山市場遺跡I2区（北西から金華山をのぞむ）

２　各時代の出土遺物

例言

1. 本書は、岐阜市鷺山・下土居土地区画整理事業範囲内に所在する鷺山市場遺跡の報告書である。
2. 調査は、岐阜市都市計画事業鷺山・下土居土地区画整理事業における区画道路建設に伴う緊急発掘調査として、業務委託契約に基づき、委託者　岐阜市鷺山・下土居土地区画整理組合の調査経費負担により、受託者　（公財）岐阜市教育文化振興事業団が実施した。
3. 調査期間は、平成23年6月13日から平成24年3月9日までである。
4. 調査組織は次の通りである。

   調査主体者

   （公財）岐阜市教育文化振興事業団理事長

   　　飯沼　隆司

   （公財）岐阜市教育文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所所長

   　　後藤　敏朗

   調査担当者　梅村大輔、高見哲士

   調査参加者

   調査補助員　青木小夜、川橋靖子、高木優子、村瀬清則

   作業員　安藤久子、上田たかえ、大洞勝巳、神谷保行、木村久美雄、河野靖夫
   　　小澤和夫、鈴木真由美、田中真美、辻　晴美、土川　裕、長井和美
   　　平井典子、廣瀬孝一、向井康子、安田浩美、柳原正木、山田正一
5. 本書の執筆は調査担当者、梅村・高見が行い、自然科学分析の報告文は（株）パレオ・ラボに依頼した。全体の編集は梅村が行った。
6. 調査の進行及び本書の作成は、岐阜市教育委員会社会教育課の指導のもと行った。
7. 調査区の写真測量は、（株）イビソクに委託した。
8. 遺構・遺物の自然科学分析は、（株）パレオ・ラボに委託した。
9. 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託し行った。
10. 出土遺物については各氏にご教示を賜った（敬称略）。記して謝意を表したい。

    尾野善裕（京都国立博物館）

    藤澤良祐（愛知学院大学文学部）
11. 調査記録及び出土遺物は、（公財）岐阜市教育文化振興事業団が管理している。

凡例

1. 本報告書に用いた図中の方位は座標北を示し、座標は国土座標第Ⅶ座標系に準拠した。
2. 本報告書で示した高度値はＴ．Ｐである。
3. 本報告書での遺構略号は以下の通り用いた。

   竪穴住居、掘立柱建物：ＳＢ　　溝：ＳＤ　　土坑：ＳＫ　　柱穴：Ｐｉｔ

   不明遺構：ＳＸ
4. 各遺構番号は鷺山市場遺跡の過去の調査番号から連続して用いた。
5. 本報告書の遺構配置図・実測図、遺物実測図の縮尺率は図示あるいは明記している。基本は次の通りである。

   遺構　　ＳＢ＝１／50　　ＳＤ＝１／30　　ＳＫ＝１／30　　ＳＸ＝１／40

   出土状況図＝１／20

   遺物　　Ｓ＝１／４
6. 遺構断面図の土色は、小山正忠・竹原秀雄「新版　標準土色帖」農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修を基準としている。
7. 本報告書で図示した遺物断面の塗りつぶしの差異は、種類の違いを表すものである。

   須恵器、灰釉陶器　　瀬戸美濃産陶器

   山茶碗　　土師器
8. 遺物実測図での一点鎖線は施釉範囲を示す。
9. 土師器皿における口縁部および内面の黒色はタール痕を示す。
10. 遺物の分類については、朝田「鷺山蝉・鷺山仙道遺跡　第３章第３節遺物の分類と時期区分」2007 年を基にした。

目次

巻頭図版

例言

凡例

第1章　調査の経過

　第1節　調査に至る経緯 …… 1

　第2節　調査の経過と方法 …… 2

第2章　遺跡の位置と環境 …… 3

第3章　鷺山市場遺跡の概要

　第1節　層序 …… 7

　第2節　時期区分 …… 8

第4章　H2区、I2区の遺構と遺物

　第1節　H2区の遺構と遺物

　　1.　概要 …… 11

　　2.　Ⅳ層上面検出遺構 …… 11

　　3.　Ⅵ層（基盤層）上面検出遺構 …… 23

　第2節　I2調査区の遺構と遺物

　　1.　概要 …… 31

　　2.　弥生時代後期～古墳時代前期（鷺山時代区分Ⅰ～Ⅱ1期）…… 32

　　3.　古代（鷺山編年Ⅲ、Ⅳ期）…… 38

　　4.　中世～戦国時代（鷺山時代区分Ⅴ、Ⅵ期　13 世紀前葉～ 16 世紀前葉）…… 42

　　5.　包含層およびサブトレンチ出土遺物 …… 53

第5章　自然科学分析

　第1節　鷺山市場遺跡の花粉分析、プラント・オパール分析 …… 55

　第2節　鷺山市場遺跡出土土器付着赤色顔料の蛍光X線分析 …… 58

　第3節　土器付着炭化物の炭素・窒素安定同位体分析 …… 60

第6章　総括

　第1節　時期毎の変遷について …… 63

　第2節　区画の規模と連続性 …… 64

遺構一覧表(1)～(3)　　遺物観察表　　遺物集計表(1)～(3)

図版

報告書抄録

挿図目次

第１図　調査区配置図（１／2,000）
第２図　周辺遺跡分布図（１／25,000）
第３図　鷲山市場遺跡土層柱状図
第４図　ＳＤ 215 断面図（１／30）・出土遺物（１／４）
第５図　Ｈ２区Ⅳ層上面遺構配置図（１／100）
第６図　ＳＤ 216 断面図（１／30）
第７図　ＳＤ 218 断面図（１／30）
第８図　ＳＤ 220・221 断面図（１／30）
第９図　ＳＤ 222 断面図（１／30）出土遺物（１／４）
第 10 図　ＳＫ 420 実測図（１／30）出土遺物（１／４）
第 11 図　ＳＫ 421・422・423，424・425 実測図（１／30）
第 12 図　ＳＫ 426 実測図（１／30）
第 13 図　ＳＫ 427､428 実測図（１／30）出土遺物（１／４）
第 14 図　ＳＫ 429 実測図（１／30）
第 15 図　ＳＫ 436 実測図（１／30）
第 16 図　ＳＫ 437 実測図（１／30）
第 17 図　ＳＫ 438 実測図（１／30）
第 18 図　ＳＫ 439 実測図（１／30）
第 19 図　ＳＫ 440 実測図（１／30）
第 20 図　Ｐ 1791 出土遺物（１／４）
第 21 図　Ｈ２区Ⅵ層上面遺構配置図（１／150）
第 22 図　ＳＢ 153 実測図（１／50）
第 23 図　ＳＢ 214 実測図（１／50）出土遺物（１／４）
第 24 図　ＳＢ 215 実測図（１／50）
第 25 図　Ｐｉｔ列実測図（１／50）
第 26 図　ＳＤ 219 実測図（１／30）
第 27 図　ＳＫ 431 実測図（１／30）
第 28 図　ＳＫ 432 実測図（１／30）出土遺物（１／４）
第 29 図　ＳＫ 433、434 実測図（１／30）
第 30 図　ＳＫ 435 実測図（１／30）
第 31 図　ＳＫ 441 実測図（１／30）
第 32 図　Ｐ 1881 出土遺物（１／４）
第 33 図　自然流路あるいは落ち込み（１／50）
第 34 図　出土状況図（１／20）
第 35 図　自然流路あるいは落ち込み出土遺物（１／４）
第 36 図　Ｉ２区遺構配置図（１／100）
第 37 図　ＳＤ 226 断面図（１／30）
第 38 図　ＳＤ 227 断面図（１／30）
第 39 図　ＳＤ 227 出土遺物（１／４）
第 40 図　ＳＫ 443、457、460 実測図（１／30）
第 41 図　ＳＫ 461、464 実測図（１／30）
第 42 図　Ｐ 1886 出土遺物（１／４）
第 43 図　Ｉ２区古代（Ⅲ、Ⅳ期）遺構配置図（１／200）
第 44 図　ＳＢ 216 実測図（１／50）
第 45 図　ＳＢ 216 出土遺物（１／４）
第 46 図　ＳＫ 451 実測図（１／30）出土遺物（１／４）
第 47 図　ＳＫ 458､462 実測図（１／30）出土遺物（１／４）
第 48 図　ＳＫ 456 実測図（１／30）
第 49 図　Ｐ 1842、1843 実測図（１／20）
第 50 図　Ｐ 1844 実測図（１／20）
第 51 図　Ｐ 1842、1843、1844 出土遺物（１／４）
第 52 図　Ｉ２区中世～戦国時代（Ⅴ、Ⅵ期）遺構配置図（１／200）
第 53 図　ＳＤ 223 断面図（１／30）出土遺物（１／４）
第 54 図　ＳＤ 224・228 実測図（１／30）
第 55 図　ＳＤ 224 出土遺物（１／４）
第 56 図　ＳＤ 228 出土遺物（１／４）
第 57 図　ＳＤ 225 断面図（１／30）
第 58 図　ＳＤ 225 出土状況図（１／20）
第 59 図　ＳＤ 225 出土遺物（１／４）
第 60 図　ＳＤ 225 出土遺物（１／４）
第 61 図　ＳＫ 444、446 実測図（１／30）
第 62 図　ＳＫ 447､448 実測図（１／30）出土遺物（１／４）
第 63 図　ＳＫ 450、451 実測図（１／30）
第 64 図　ＳＫ 452 実測図（１／30）
第 65 図　ＳＫ 465 実測図（１／30）
第 66 図　ＳＫ 455・ＳＸ 35 実測図（１／40）
第 67 図　ＳＫ 455・ＳＸ 35 出土遺物（１／４）
第 68 図　包含層およびサブトレンチ出土遺物（１／４）
第 69 図　鷲山市場遺跡におけるプラント・オパール分布図
第 70 図　炭素・窒素安定同位体比
第 71 図　炭素安定同位体比とＣ／Ｎ比の関係
第 72 図　Ｖ１期主要遺構分布図（１／2,000）
第 73 図　Ｖ２期主要遺構分布図（１／2,000）
第 74 図　Ｖ３期主要遺構分布図（１／2,000）
第 75 図　Ⅵ期主要遺構分布図（１／2,000）

図版目次

図版１～図版２　Ｈ２区検出遺構
図版３～図版７　Ｉ２区検出遺構
図版８～図版 10　出土遺物
図版 11　鷲山市場遺跡から産出した植物珪酸体
図版 12　鷲山市場遺跡のＳＤ 224 から産出した花粉・胞子
図版 13　赤色顔料の蛍光Ｘ線分析
図版 14　分析対象

表目次

表１　時期区分と編年対応表
表２　Ｈ２区遺構別数
表３　Ｉ２区遺構別数
表４　産出花粉化石一覧表
表５　試料１ｇ当たりのプラント・オパール個数
表６　分析対象
表７　分析対象
表８　測定結果

グラフ

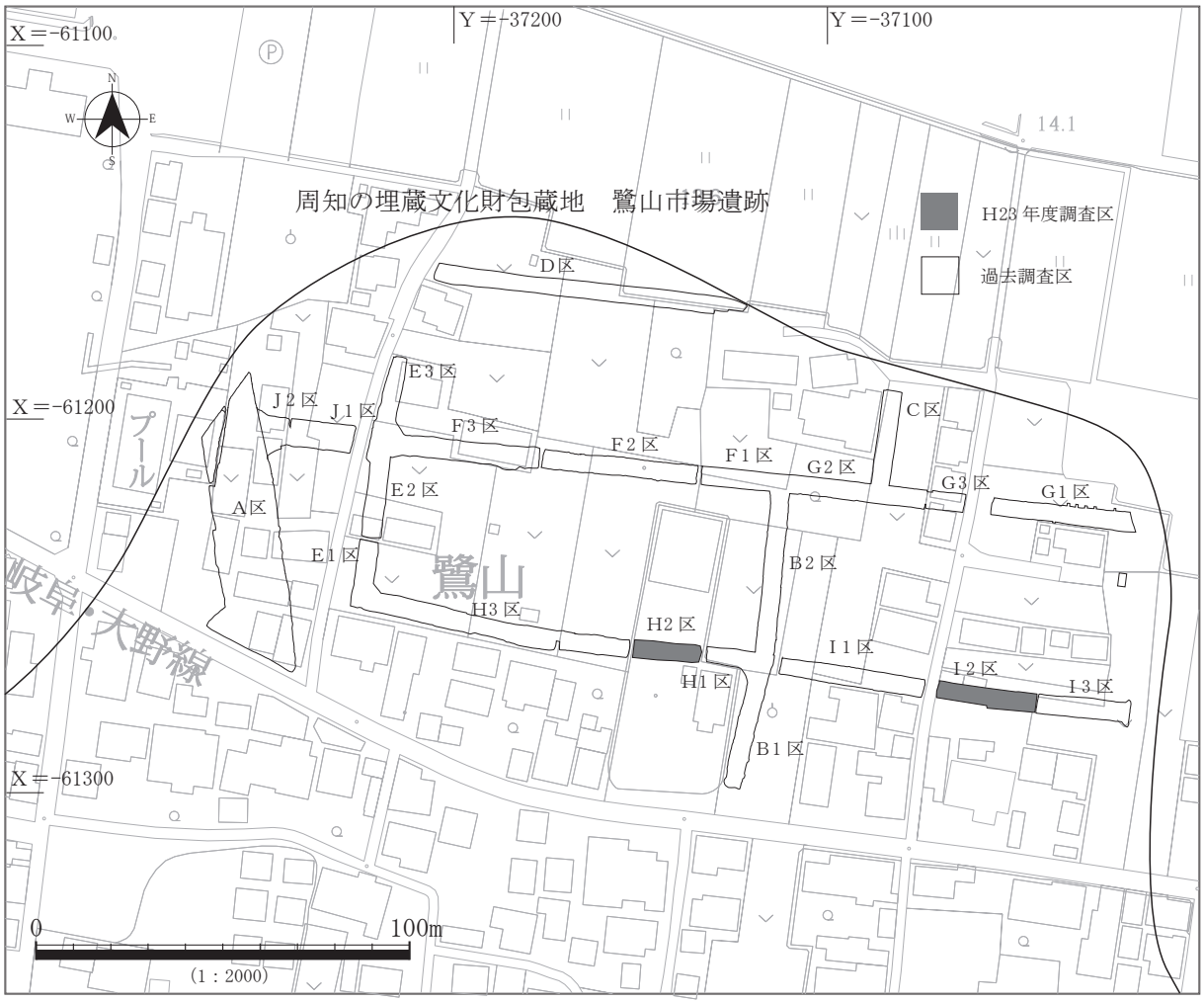
グラフ１　遺構数の推移

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

平成７年度、岐阜市都市計画部（当時）から岐阜市教育委員会文化課（当時）に、岐阜市鷺山・下土居土地区画整理事業に関連する埋蔵文化財の取り扱いについて照会があった。市教育委員会は、当事業予定地が鷺山遺跡群の範囲内に及ぶことから、文化財保護法上の手続きと本調査前の試掘調査等について説明を行った。平成 12 年度に行った試掘調査をうけて、記録保存の措置を講ずることとなり、本発掘調査（調査主体は（財）岐阜市教育文化振興事業団）を実施することとなった。

今年度の調査は、平成 23 年５月 12 日付けで（公財）岐阜市教育文化振興事業団理事長から県教育委員会教育長あてに文化財保護法第 92 条の規定による発掘調査の届出がなされた。平成 23 年５月 25 日付けで県教育委員会教育長から（公財）岐阜市教育文化振興事業団理事長あてに、慎重に発掘調査を実施する旨の指示があり行った。



平成 22 年 10 月 29 日　承認番号岐阜市第 109 号

第１図　調査区配置図（１/2,000）

第２節　調査の経過と方法

１．発掘作業

調査は準備を含め平成 23 年６月１日から平成 24 年８月 12 日まで実施した。調査面積は 243.1 ㎡である。現地調査は平成 23 年 6 月 13 日に掘削作業を開始し、８月 12 日に完了、８月 31 日に撤収して室内整理に入った。各調査終了時の７月 22 日と８月 10 日には岐阜市鷺山・下土居土地区画整理組合の既履行検査を受け、合格が認められた後に各調査区を引き渡した。

各調査区について過去調査では、土地区画整備事業の進捗状況に応じて発掘調査を行ったため、便宜上、調査区をＡ～Ｊのブロックに分けている。本報告の調査区はＨ２区とＩ２区に該当する。

各調査区、排土置場、休憩所はフェンスで囲って倒壊しないよう杭等で固定した。夜間の事故を防ぐため、チューブライトを設置して安全に留意した。

表土掘削に先立ち、土層確認のためのトレンチ掘削を行った。トレンチは重機により幅約１ｍを調査区の長軸に即して掘削した。Ｉ２区では遺物を一定量含んだ包含層があること、遺構検出面は１面であることが確認できた。Ｈ２区は駐車場として扱われていたためか、現代と推定される削平が深くまで達していたが、遺構検出面は２面存在することが判明した。両調査区の掘削方針について、トレンチ掘削で得られた情報と過去調査成果を基に検討した。表土掘削は重機で行い、包含層以下は人力による掘削作業とした。人力掘削では、まず、調査区の東西軸に平行するトレンチを入れて、排水対策とともに詳細な土層観察を行った。Ｉ２区の包含層遺物については、調査区を西・中央・東に三等分して取り上げた。図化作業に際しては、過去調査との統一性を考慮し、区画整理地内に配された日本測地系第Ⅶ系の座標で行った。平面図の作成はラジコンヘリコプターによる写真測量を行った。断面図、出土状況図は進捗状況に合わせて手実測によって行った。

Ｉ２区の古墳時代初頭頃の低地利用の考察と、中世～戦国期にかけての古環境復元が課題となったため、自然科学分析を実施した。

２．整理作業

発掘調査によって得られた遺物は、現地で洗浄作業を行った後に、接合と注記作業を随時進めた。平成 23 年９月１日より室内整理作業に入り、平成 24 年３月８日まで行った。遺物は接合、注記作業が終わったのち、実測に向けての選別作業を行った。遺構毎の出土遺物数は集計して、一覧表にし巻末に付した。遺物実測作業は手作業で行った。実測した遺物・遺構の製図は、Adobe イラストレータ（CS4）でデジタル製図した。

灰釉陶器皿に赤色顔料が付着しており、種類の特定をするため蛍光Ｘ線分析を行った。また、戦国期の土師器皿にみられる炭化物の表面観察から、肉眼でも相異が確認できる製品があったことから、燃焼物に差異がある可能性を考え、炭素・窒素安定同位体比分析を行った。各分析は（株）パレオ・ラボに委託し分析した。

第２章　遺跡の位置と環境

地理的環境

鷺山市場遺跡は岐阜県岐阜市の北中部に位置している。まず、岐阜市の地理を概観したい。木曽三川の一つである長良川が美濃山地を貫流し､岐阜市を横断して濃尾平野を南流、やがて揖斐川と合流して伊勢湾へと注ぎこむ。長良川が運んできた土砂は岐阜市中川原を扇央とする半径６㎞程度の範囲に堆積して、緩やかな扇状地を形成している。現在の岐阜市街地はほぼこの上に立地する。さらに北部は美濃山地の南縁となるが、峰々が長々と連なる様相はなく、所々に谷底平野が広がり山地を分断している。

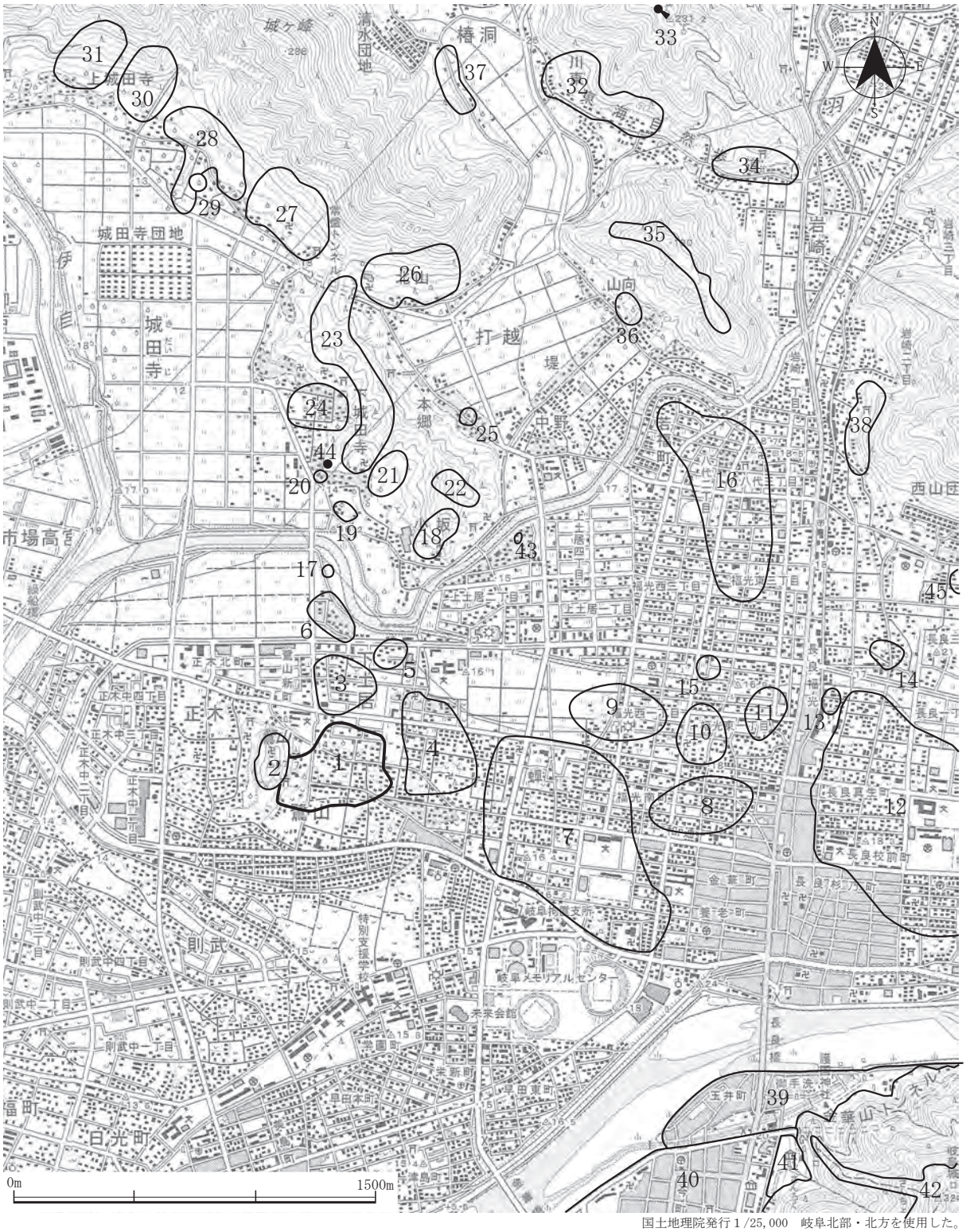
当遺跡は長良川扇状地北限の扇端部に立地し、周辺の現地表高は 13 m～ 14 mを測る。西方には独立丘陵の鷺山が存在するが、1960 年代に山の南部分を大きく削平されている。鷺山市場遺跡より北側には、城ヶ峰から派生する下城田寺丘陵が舌状に南へ張り出す。山県市の平井坂峠付近に源流をもつ鳥羽川は、この丘陵により流れを大きく蛇行させて、長良川支流の伊自良川と合流する。当遺跡の周辺には鳥羽川を氾濫源とした自然堤防上の微高地と、南に位置する長良川扇状地との空間には後背湿地状の低湿な土地状態が広がっていたと考える。

歴史的環境

次に、鷺山市場遺跡周辺の遺跡についてみていく。

当遺跡北に流れる鳥羽川をさらに上流へたどり、眉山の西山間にある狭い台地上に立地した椿洞遺跡では、発掘調査により後期旧石器のナイフ形石器が出土している(1)。同じく椿洞遺跡では縄文時代早期の撚糸文土器、前期の押型文土器、中期の貝殻条痕文土器が出土し、中期後半頃の住居跡も確認された。長良川扇央北側の西野々遺跡、龍門寺遺跡で縄文時代中期頃の土器が表採されている(2)。この頃の資料は少量ではあるが長良川扇状地上に立地する遺跡でも確認できる。城之内遺跡では発掘調査により､縄文時代中期～後期の土器、打製石斧等が出土した(3)。当遺跡周辺では下土居若宮遺跡において土坑が検出され、比熱した礫と共に縄文時代中期後葉頃の土器が確認された(4)。鷺山蝉遺跡では土坑から晩期中葉の深鉢が出土した(5)。また、下土居北門遺跡では鉢と壺が組み合うように出土しており、縄文時代晩期の土器棺の可能性が指摘されている(4)。

弥生時代になると鷺山蝉遺跡で遠賀川系甕の口縁部が出土している(5)が、周辺遺跡も含めて集落の様相を示す資料は少ない。中期には城之内遺跡で貝田町期に比定される竪穴住居跡が検出され集落の存在が判明している(6)。後期になると集落数は増加する。鷺山市場遺跡(7)、鷺山仙道遺跡(8)、正明寺城之前遺跡(9)でも竪穴住居跡が検出され、本格的に集落が営まれだしたようである。鎌磨遺跡では集中豪雨時の山崩れによって、赤彩された壺の口縁部が出土し表採された。鎌磨遺跡の立地条件から住居とは考えにくいこと等から、弥生時代の墳墓あるいは祭祀遺跡といった場所であった可能性が指摘されている(10)。



国土地理院発行１/25,000　岐阜北部・北方を使用した。

1 鷺山市場遺跡　2 鷺山古墳群　3 正明寺城之前遺跡　4 鷺山仙道遺跡　5 下土居北門遺跡　6 下土居若宮遺跡
7 鷺山蝉遺跡　8 福光花ノ木遺跡　9 鷺山治郎丸遺跡　10 太田遺跡　11 福光東Ａ遺跡　12 城之内遺跡　13 長良天神遺跡
14 西野々遺跡　15 福光東Ｂ遺跡　16 八代遺跡　17 下土居遺跡　18 西屋敷古墳群　19 下城田寺遺跡　20 鎌磨遺跡
21 鎌磨古墳群　22 中野古墳群　23 坂尻古墳群　24 城田寺葭原遺跡　25 打越遺跡　26 打越北山古墳群　27 上城田寺第１古墳群
28 上城田寺第２古墳群　29 上城田寺遺跡　30 上城田寺第３古墳群　31 上城田寺第４古墳群　32 椿洞打越古墳群　33 鎧塚古墳
34 岩崎第一古墳群　35 鶴山古墳群　36 山向古墳群　37 椿洞第２古墳群　38 岩崎第２古墳群　39 中河原遺跡
40 岐阜城下町遺跡　41 岐阜千畳敷遺跡　42 岐阜城跡　43 富塚古墳　44 下城田寺中世墓　45 長良福泉遺跡

第２図　周辺遺跡分布図（１/25,000）

古墳時代にはいると、当遺跡北に位置する眉山頂上には鎧塚古墳が築かれる[2]。二段築成の前方後円墳であり、全長約82ｍ、高さ約5ｍを測る。幕末に盗掘されており、短甲の出土が知られる。表採資料などから埴輪を伴っていたと判断でき、時期は4世紀後半頃と推定されている。下城田寺丘陵南端にある中野1号墳は、大正4年に発掘調査が行われ、墳形は円墳で豊富な遺物が出土した[2]。変形神獣鏡、石製模造品の刀子、碧玉製管玉、勾玉、硝子製の小玉、小型丸底壺が出土しており、4世紀末頃と推定されている。上土居富塚の微高地上に立地した富塚古墳は、全長60ｍ、高さ6ｍの前方後円墳であり、仿製四獣鏡の出土が知られ[2]、時期は5世紀後半～6世紀前半頃と推定されている。古墳時代後期になると調査地周辺の山間部にも、群集墳が多数形成される。

鷺山周辺の古墳時代集落の動向として、正明寺城之前遺跡[9]の低地からは3～4世紀頃の土器が多数出土しており、完形品が多いことや、ミニチュア製品が含まれることなどから、水辺付近で何らかの祭祀行為があったと思われる。鷺山市場遺跡の過去調査では古墳時代前期の住居跡は多数確認されたものの、5世紀代になると住居跡数は著しく減少し、土器類も僅かしか出土しない。同様の状況が正明寺城之前、鷺山仙道、鷺山蝉遺跡でもいえるが、やや離れた城之内遺跡、下西郷一本松遺跡[11]では当該期の住居跡が確認されている。鷺山周辺遺跡ではその後、6世紀後半頃には再び集落が営まれ住居も増加するようである。

やがて、律令体制が整備され中央集権化と地方行政組織が確立されると、当遺跡周辺は大宝二年御野国戸籍から当遺跡周辺は肩縣郡肩々里とされ、その後の『倭名類聚抄』にみえる方県郡方縣郷に推定される。城之内遺跡の発掘調査[2]で大量の古代瓦が出土し、類例の少ない鬼面瓦が知られる。以前から瓦などの遺物が表採されていたことなどから、長良廃寺の存在が指摘された。伽藍配置など詳細は不明であるが、出土した瓦から7世紀後葉頃に建立され、8世紀中頃には衰退していたと思われる。方県郡衙の所在地は不明であるが、鷺山蝉遺跡の試掘調査[12]において、二彩陶器や緑釉陶器が出土したことや、前述の長良廃寺の存在などから、福光・長良地区に存在していた可能性が高い。また、正明寺城之前遺跡では発掘調査[10]により大量の焼塩土器が出土し、「方」「群」と墨書された須恵器も出土した。いわゆる一般的な集落内にも一定の役割を果たした集団が存在したと考える。

物資の運搬、情報の伝達には、都から諸国に通じる官道「七道」が整備され、美濃国は陸奥へ至る東山道が通ったとされる。「延喜式」兵部省式には、各地の駅名と駅馬および伝馬の数が記されている。近江から不破駅、大野駅、方県駅、各務駅、可児駅、土岐駅、大井駅、坂本駅へ至り信濃へ至る。岐阜市内では、大野駅から方県駅間、方県駅から各務駅区間が通る。方県駅に至り東進するには調査地近辺を通る経路が復元され、推定経路上には古代に比定される多数の遺跡が立地し注目できる。

保元・平治の乱から大きく権力を握った平氏政権も、治承・寿永の乱を経て倒され、鎌倉幕府が成立する。かねてからの鎌倉幕府と朝廷との軋轢は、承久の乱として全国の武士を巻き込んで勃発する。幕府方の勝利は朝廷方についた地頭の解任となり、その跡には新

補地頭が入ることによって、美濃にも大きく影響が及んだ。当遺跡では13世紀前葉頃から溝の方位に統一性がみられ、中世の土地区画方向が顕在化してくるようである。また、土坑から蒔絵を施した鏡箱に納められた瑞花鴛鴦五花鏡が出土し、全国的にみても貴重な資料といえる。15世紀後葉頃になると溝の方向は、当遺跡、鷺山仙道遺跡、鷺山蝉遺跡を含め、同一方向になっていく。下土居北門遺跡でも発掘調査[4]により、15世紀後葉頃の遺構、遺物が確認された。区画溝の方向は先述の方向とは異なっており、独自の方向で掘削されたと考える。

史料[13]によると、岐阜市の革手・加納に存在した守護所は、16世紀初頭頃福光に移動していたことが示唆される。調査地周辺では当該期の遺構が増加し、前述の区画化も進行する。鷺山仙道遺跡[8]の土坑からは多数の土師器皿と共に、銅滓や坩堝が出土し銅鋳造工房の存在が指摘されている。鷺山蝉遺跡[5]の蝉土手館や周辺の発掘調査では、将棋の駒や大量の土師器皿など豊富な遺物が出土した。正明寺城之前遺跡[9]では陶製狛犬や漆器椀、墨書された土師器皿など特徴的な遺物が出土していることから、当遺跡周辺の各遺跡では活発な土地活用がなされたと推測される。その後、守護所「福光御構」も1532年に「枝広館」へ移り、当遺跡および周辺の遺跡では遺構が希薄になる。

註

（1）岐阜市教育委員会「椿洞遺跡―岐阜市民公園整備関連事業―」1989（平成元）年

（2）岐阜市「第二部　考古　第二節弥生時代、第三節古墳時代」
『岐阜市史　史料編　考古・文化財』1979（昭和54）年

（3）岐阜市教育委員会「城之内遺跡」1990（平成２）年

（4）（財）岐阜市教育文化振興事業団　岐阜市鷺山・下土居土地区画整理組合
「鷺山遺跡群　第１分冊 下土居若宮遺跡・下土居北門遺跡」2011（平成23）年

（5）（財）岐阜市教育文化振興事業団　岐阜市鷺山第二土地区画整理組合
「鷺山蝉・鷺山仙道遺跡」2007（平成19）年

（6）岐阜市教育委員会「城之内遺跡（第１分冊）」1999（平成11）年

（7）（公財）岐阜市教育文化振興事業団　岐阜市鷺山・下土居土地区画整理組合
「鷺山遺跡群　第４分冊鷺山市場遺跡」2011（平成23）年

（8）（公財）岐阜市教育文化振興事業団　岐阜市鷺山・下土居土地区画整理組合
「鷺山遺跡群　第３分冊鷺山仙道遺跡」2011（平成23）年

（9）（財）岐阜市教育文化振興事業団　岐阜市鷺山・下土居土地区画整理組合
「鷺山遺跡群　第２分冊正明寺城之前遺跡」2011（平成23）年

(10) 岐阜市「第四章　弥生時代」『岐阜市史　通史編　原始・古代・中世』1979（昭和54）年

(11)（財）岐阜市教育文化振興事業団「下西郷一本松遺跡」2000（平成12）年

(12) 岐阜市教育委員会「平成９・10年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書」1999（平成11）年

(13) 宝幢坊文書　斎藤利綱書状

第３章　鷺山市場遺跡の概要

第１節　層序（第３図）

鷺山市場遺跡は長良川扇状地の扇端部に位置する。さらに北側の自然堤防上には正明寺城之前遺跡が存在するが、その間は低湿地が広がっていたものと推定される。東側には鷺山仙道遺跡が隣接するが、その間も相対的な低地となっていたとみられ、現在の標高も若干低いことが確認できる。

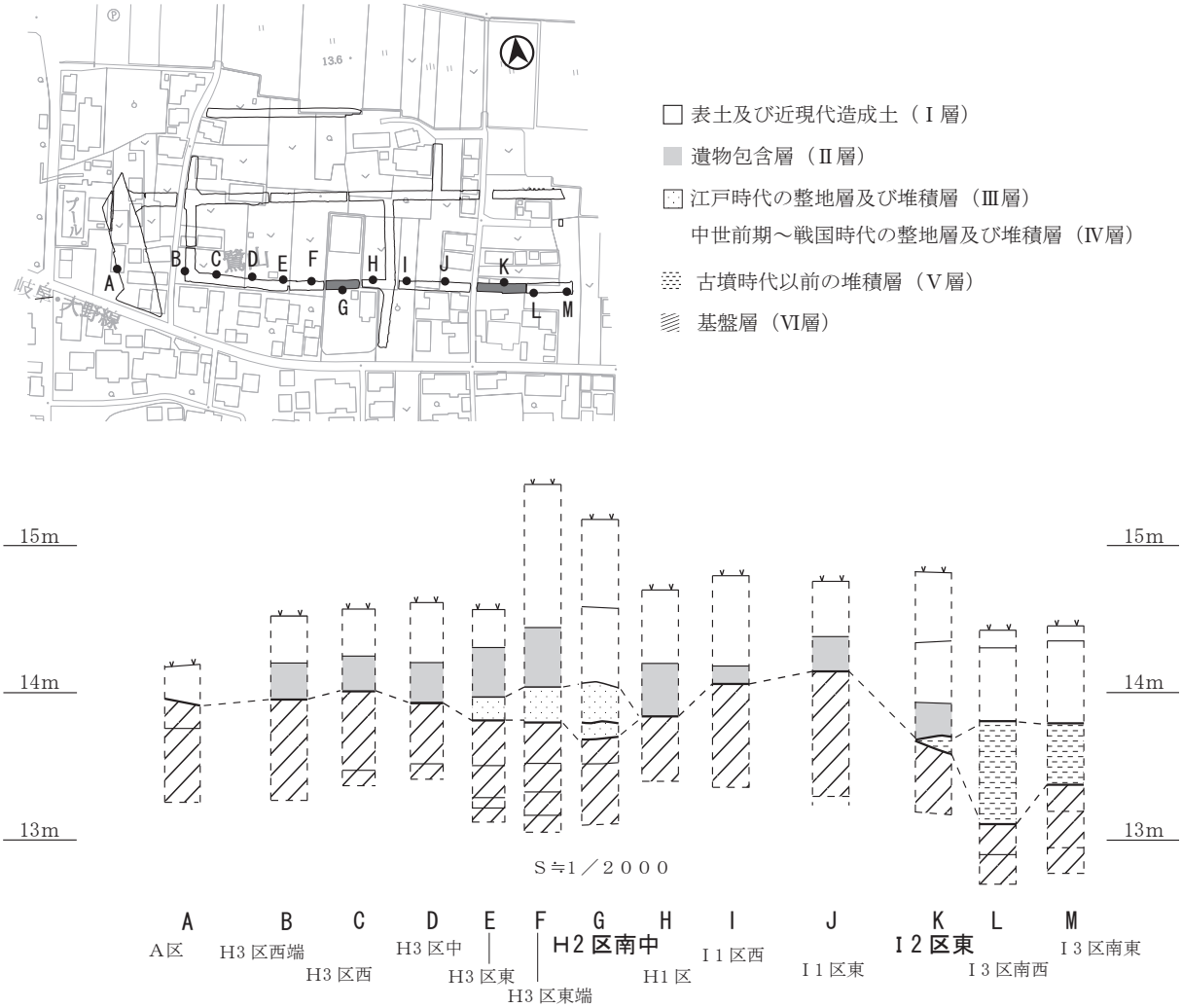
第３図は鷺山市場遺跡過去調査区壁面と今報告の調査区壁面を基に柱状図を作成した。縮尺は横が約2000分１で高さは50分１で表した。柱状図は北側断面を基本に作成したが、調査の進行中に壁面が崩落した等の状況により、Ｈ２区、Ｉ３区は南側壁面を使用した。

基本土層は既刊報告書に基づいて大きくⅠ～Ⅵ層に分ける。

・Ⅰ層　家屋建築に伴う造成土、耕作土等の近現代とみられる造成土である。

・Ⅱ層　遺物を含んだ層である。土質は砂層～細砂であり、比較的締まりのある層である。

・Ⅲ層　江戸時代以降の堆積層及び整地層。土質は細砂から微細砂である。



第３図　鷺山市場遺跡土層柱状図

・Ⅳ層　中世前期～戦国時代にかけての堆積層及び整地層。

Ｅ～Ｇ地点でⅢ、Ⅳ層が確認されているものの、明確な分層はできず、堆積時期もよく分からない。

・Ｖ層　古墳時代以前の堆積層。Ｉ２区の東からＩ３区にかけて堆積しており、Ｉ３区では本層を基盤として遺構が確認された。土質は砂層から粗砂である。

・Ⅵ層　基盤層

Ⅵ層（基盤層）に注目すると、扇端部であっても旧地形には高低差が存在しており、Ｉ1区を境に東西に傾斜していることがわかる。Ｋ地点のＩ２調査区東端からは自然流路あるいは落ち込みになっており、出土遺物から古墳時代の初頭頃には周囲とほぼ同じ標高まで埋没したと考える。Ｉ３区ではＶ層上面で多数の遺構が確認できており、中世前期頃には積極的に土地利用されていることがわかる。西側はＧ地点のＨ２区を最深部として、Ａ地点へとゆるやかに上昇している。

第２節　時期区分

１．時期区分

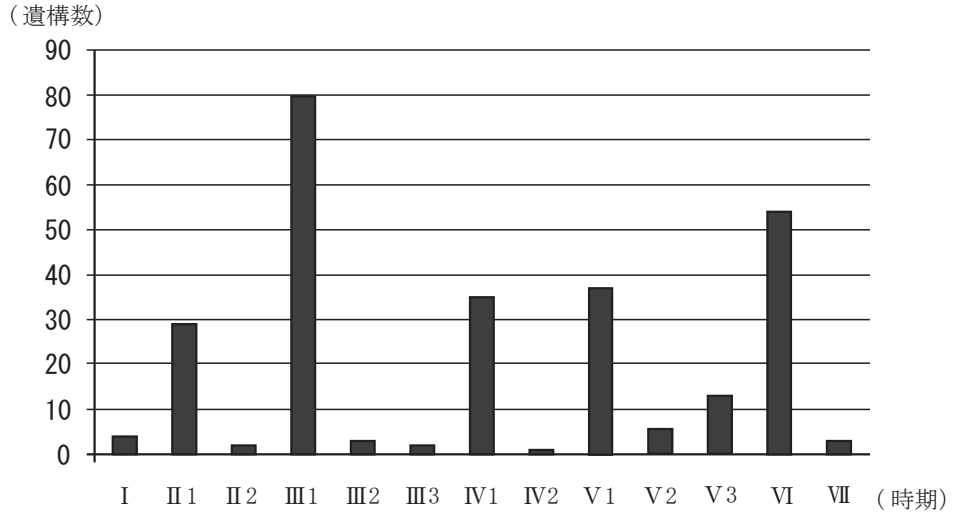
鷺山市場遺跡は既刊報告書によりＩ～Ⅶ期に時期区分されている。本書では過去調査との統一性から同じくＩ～Ⅶ期に大区分し、小期については鷺山遺跡群第５分冊を参考にＩ～Ⅶ期をさらに15小期区分し、Ⅱ１期、Ⅱ２期のように表記した（表１参照）。

２．過去調査成果と遺構数推移

過去に行った鷺山市場遺跡発掘調査で確認された遺構を時期毎にグラフ化し、各時期の遺構推移についてみていきたい（グラフ１参照）。

Ｉ期　　遺構数は少ない。

Ⅱ１期　竪穴式住居や土坑等の遺構が増加し、本格的に集落が形成される。中でも住居跡は微高地上に営まれている。Ⅱ２期になると遺構数が急激に減少する。この時期では周辺の正明寺城之前遺跡、鷺山仙道遺跡でも同様に遺構が減少傾向にある。



グラフ１　遺構数の推移

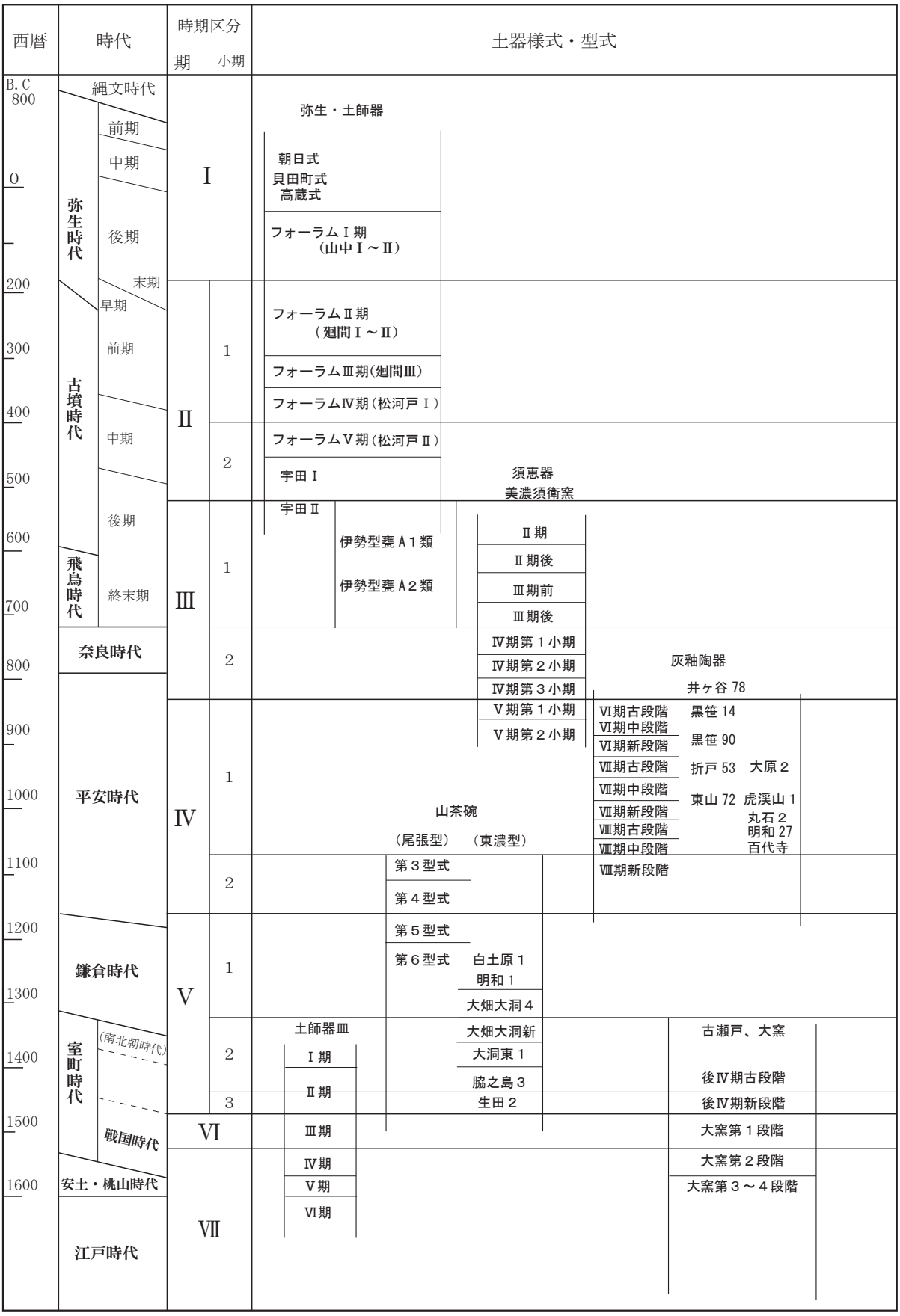


表1　時期区分と編年対応表

Ⅲ１期は竪穴住居を主に再び遺構数が増加する。竪穴住居はⅡ１期より微高地上で分布範囲を広げている。Ⅲ２期は遺構数が減少に転じている。このような状況は引き続きⅢ３期でも同様で遺構数は少なく、活発な土地利用があったとはみなせない。

Ⅳ１期になると遺構数は増加するが、遺構はＣ区に集中して確認される他は、散在的である。Ⅳ２期はほぼ遺構が確認できなくなり、周辺の正明寺城之前、鷺山仙道遺跡でも同様である。

Ｖ１期では遺構数が増加し、その後にも踏襲されるような区画溝が確認され、Ｖ２期、Ｖ３期と顕在化してくる。

Ⅵ期はⅤ期を基礎とし、鷺山市場遺跡の北側を中心に区画化が進行する。遺構数の増加からも活発な土地活用が行われたと推定される。当該期には守護所が福光付近に移転したことが指摘されており、当該期の遺構数増加との関連が注目される。

Ⅶ期はⅥ期の状況とは変わって遺構数が激減する。背景として守護所が「枝広館」に移っており、このことに起因してと推測される。

表１の参考文献

内堀信雄・横幕大祐「山中～宇田式併行期の美濃西部地域土器編年」『土器・墓が語る
美濃の独自性～弥生から古墳へ～』東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会　1998 年
内堀信雄・井川祥子「美濃における古代土師器煮炊具の様相」『鍋と釜そのデザイン』
東海考古学フォーラム尾張実行委員会 1996 年
渡辺博人「美濃須衛古窯跡群における須恵器編年」『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』
各務原市教育委員会　1984 年
尾野善裕「古代土器の編年と暦年代観－ 10 ～ 11 世紀を中心に－」『第 14 回京都府埋蔵
文化財研究会資料集』京都府埋蔵文化財研究会　2006 年
藤澤良祐「第１部編年研究　第２章東濃型山茶碗の型式編年研究」『中世瀬戸窯の研究』
高志書院　2008 年
藤澤良祐「第１部編年研究　第３章古瀬戸前期様式の型式編年、
第４章古瀬戸中期様式の型式編年、
第５章古瀬戸後期様式の型式編年」『中世瀬戸窯の研究』
高志書院　2008 年
藤澤良祐「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』
第 10 輯　2002 年
井川祥子「15 世紀から 16 世紀前葉の土師器皿－中濃地域を中心にして－」『美濃の考古学』
第２号　1997 年
井川祥子「美濃中世後期土師器皿の分類と編年」『守護所と城下町』高志書院　2006 年

第４章　Ｈ２区、Ｉ２区の遺構と遺物

第１節　Ｈ２区の遺構と遺物

1. 概要

標高約 15.30 ～ 13.50 ｍまでは、駐車場の造成土と撹乱を含む現代整地層である。調査区中央に大きな撹乱（2・3 層）を受け、最深部は標高約 13.50 ｍで部分的に深くなる箇所が見られた。９層からは肥前産磁器が出土したことから、近世以降の整地層と考えた。18 層中からは土師器皿、山茶碗等が出土しており、戦国時代までに撹拌を受けながら形成された層で基本土層のⅣ層と判断した。断面の精査によりⅣ層上面からの掘り込みが確認されたため、遺構を検出、掘削して記録保存を行った。19、20 層上面からも掘り込みが確認できⅥ層と判断し、遺構の検出、掘削、記録作業を行った。

したがって、Ｈ２区の報告はⅣ層上面からⅥ層上面で検出した遺構、遺物の順で記載する。

検出した遺構については表２の通りである。

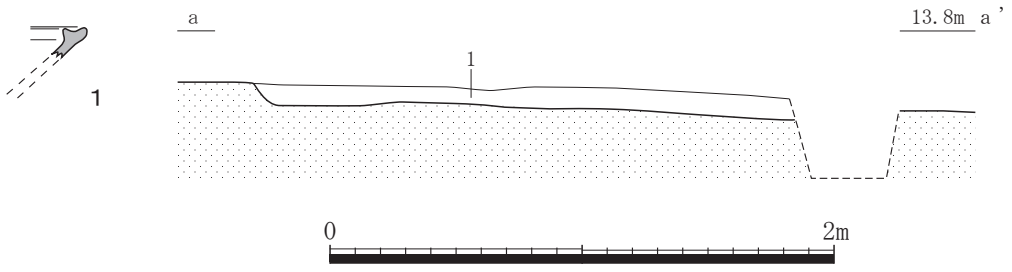
	SB	SD	SK	Pit	SX
Ⅳ層上面	0	4	16	25	0
Ⅵ層上面	2	4	6	21	0

表２　Ｈ２区遺構別数

２．Ⅳ層上面検出遺構

溝（ＳＤ）

ＳＤ 215（第４、５図）



〈ＳＤ 215 土層名〉

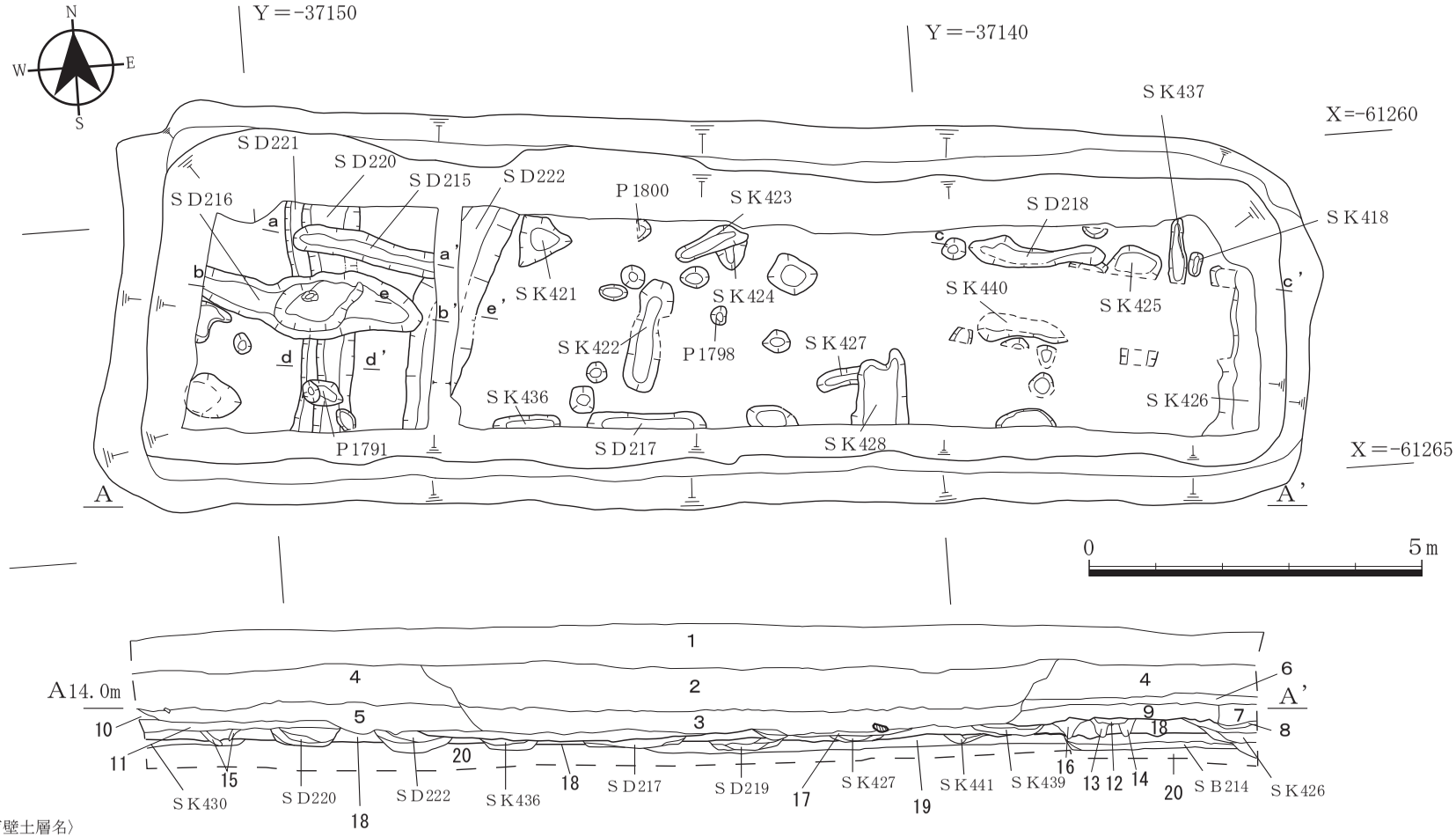
1．にぶい黄橙色 10ＹＲ 6/4 細砂混じり微砂

第４図　ＳＤ 215 断面図（１/30）出土遺物（１/４）

Ｈ２区西側北寄りに位置する。包含層上面で東西方向の溝を検出した。遺構東端はトレンチで失っている。

東西方向に延びる溝で主軸方位は北から西へ 73° である。溝の幅は 0.4 ｍ、深さは検出面から 0.10 ｍである。断面形は逆台形で、周壁から底面まで緩やかに立ち上がる。遺構埋土はにぶい黄橙色細砂混じり微砂の単層で、自然堆積層と判断した。

遺物は土師器皿、瀬戸美濃陶器が１層から各１点出土した。１は古瀬戸後Ⅳ期新段階の擂鉢である。出土遺物から、本遺構は戦国時代から近世初頭頃までに埋没したと考える。

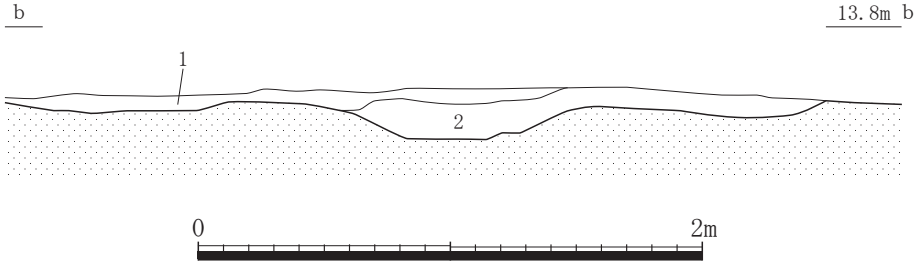


〈Ｈ２区南壁土層名〉

1．砕石（現代造成土）
2．緑灰色５Ｇ 5/1 細砂混じり微砂（現代造成土）
3．オリーブ灰色 2.5ＧＹ 6/1 細砂混じり微砂（現代造成土）
4．砕石（現代造成土）
5．褐灰色 10ＹＲ 5/1 シルト混じり細砂（現代造成土）
6．褐灰色 10ＹＲ 6/1 細砂混じり微砂
7．にぶい黄色 2.5Ｙ 6/4 微砂混じり細砂
8．暗褐色 10ＹＲ 6/1 細砂混じり微砂
9．褐灰色 10ＹＲ 5/1 細砂混じり微砂
10. 褐灰色 10ＹＲ 5/1 細砂混じり微砂
11. 暗灰黄褐色シルト混じり微砂
12. にぶい黄褐色 10ＹＲ 4/3 微砂　（撹乱）
13. にぶい黄褐色 10ＹＲ 4/3 微砂　（撹乱）
14. にぶい黄褐色 10ＹＲ 4/3 微砂　（撹乱）
15. にぶい黄色 2.5Ｙ細砂混じり微砂（撹乱）
16. にぶい黄褐色 10ＹＲ 4/3 微砂　（撹乱）
17. 灰白色 2.5Ｙ 7/1 微砂　しまり弱い
18. にぶい黄褐色 10ＹＲ 5/3 微砂Ｆｅ，Ｍｎ強く沈着　（包含層）Ⅳ層
19. 暗黄灰色 2.5Ｙ 4/2 微砂　（基盤層）Ⅵ層
20. にぶい黄色 2.5Ｙ 6/4 細砂　（基盤層）Ⅵ層

第５図　Ｈ２区Ⅳ層上面遺構配置図（１/100）

ＳＤ 216（第５、６図）



〈ＳＤ 216 土層名〉

１．青灰色５Ｂ 6/1 シルト混じり微砂（しまり強い）

２．青灰色５Ｂ 5/1 シルト混じり微砂（しまり弱い）　第６図　ＳＤ 216 断面図（１/30）

Ｈ２区西側に位置する。Ⅳ層上面で東西方向の溝を検出した。遺構東端をトレンチで失っている。主軸方位は北から西へ 77° である。溝の幅は 1.20 ｍ、検出面からの深さは最大 0.2 ｍだが、浅い箇所は 0.04 ｍ程度である。平面形は不整形で、底面には凹凸が見られる。底面から周壁までは緩やかに立ち上がる。遺構埋土は還元土色の青灰色で、シルト混じり微砂である。締まりの強弱で上下２層に分けた。平面形と底面の状況から、風倒木痕の可能性が残る。

１層から山茶碗が１点出土したが、小片で図示できなかった。

遺構と時期の異なる遺物が混入した可能性も有り、本遺構の詳細な時期は不明であるが、近世以前には埋没していたと考える。

ＳＤ 217（第５図）

Ｈ２区中央南端に位置する。Ⅳ層上面で検出した。トレンチで遺構南側を失うが、調査区南壁断面でも確認でき、南側調査区外へ続くと推定できる。

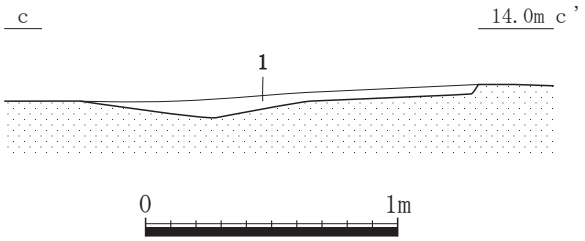
主軸方位は北から西へ 83° である。残存部の短軸は 0.20 ｍである。検出面からの深さは約 0.07 ｍである。平面形は東西に長い楕円形で、底面は平坦で、周壁は緩やかに立ち上がる。遺構埋土は、にぶい黄褐色微砂で、レンズ状に堆積しており自然堆積層と判断した。

出土遺物は無く、本遺構の詳細な時期について不明であるが、近世以前には埋没していたと考える。

ＳＤ 218（第５、７図）

Ｈ２区東側北寄りに位置する。Ⅳ層上面で検出した。撹乱で遺構北側半分を失っている。SK429 と重複しており、本遺構が新しい。

主軸方位は北から西へ 79° である。溝の幅は 0.45 ｍ、検出面からの深さは 0.07 ｍと浅い。平面形は東西に長い不整な楕円形で、底面は西側へ緩やかに窪む。周壁は緩やかに立ち上



〈ＳＤ 218 土層名〉

１．にぶい黄色 2.5 Ｙ 6/4 細砂混じり微砂

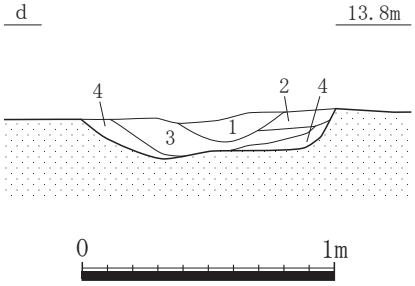
第７図　ＳＤ 218 断面図（１/30）

がる。遺構埋土は、にぶい黄色細砂混じり微砂の単層で、自然堆積層と判断した。

尾張型の山茶碗が１点出土したが、小片で図示し得なかった。本遺構は中世までに埋没したと考える。

ＳＤ 220・221（第５、８図）

Ｈ２区西部に位置する。Ⅵ層上面で南北方向の溝を検出した。SB215 と重複し、本遺構が新しい。断面を精査したところ、Ⅳ層上面から掘り込まれた遺構であった。遺構埋土は全４層で、上層からシルト混じり微砂、微砂、細砂混じり微砂で、細砂混じり微砂の層は締まりによって上下２層に分ける事ができた。土質と堆積状況から、シルト混じり微砂（１層）と微砂層（２層）、細砂混じり微砂層（3・4 層）の少なくとも２段階の埋没過程を確認でき、２条の溝が重複した遺構で、上層を SD220、下層を SD221 と考えた。溝の方向が重複していることから、SD221 が埋没中あるいは埋没後に SD220 を掘り直した可能性が考えられる。



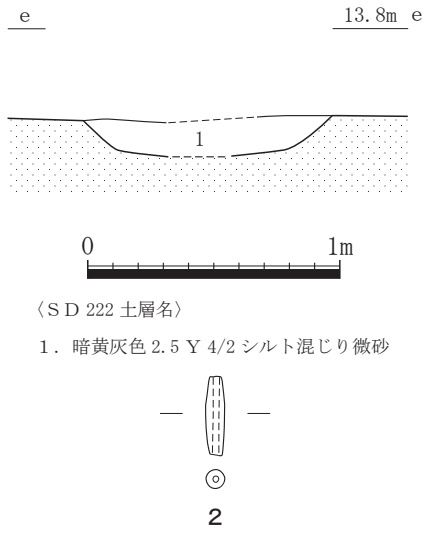
〈ＳＤ 220・221 土層名〉
１．褐灰色 10ＹＲ 5/1 砂質土
２．灰黄褐色 10ＹＲ 5/2 砂質土
３．灰黄褐色 10ＹＲ 4/2 砂質土
４．褐灰色 10ＹＲ 4/1 砂質土

第８図　ＳＤ 220・221 断面図（１/30）

SD221 の主軸方向は北から東へ 7° 傾く。残存幅約 0.95 ｍで、検出面からの深さは 0.23 ｍである。断面形は逆台形で、底面は平坦である。SD220 の方向は SD221 と同じで、残存幅約 1.00 ｍ、包含層上面からの深さは約 0.28 ｍである。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。

SD221 からは、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、土師器小片が出土した。出土遺物から、SD221 の埋没以後、SD220 は中世後半頃（Ⅵ期頃）までに埋没が始まったと考える。

ＳＤ 222（第５、９図）



〈ＳＤ 222 土層名〉
１．暗黄灰色 2.5Ｙ 4/2 シルト混じり微砂

第９図　ＳＤ 222 断面図（１/30）
出土遺物（１/４）

Ｈ２区西側に位置する。SB215 と重複し、本遺構が新しい。検出前には本遺構とほぼ同位置に水が湧く状況を確認しており、排水のため南北方向にトレンチを掘削した。また、Ⅳ層上面の遺構検出時には、同トレンチの南北端に遺構があると認識し再度精査すると、南北方向に溝状に延びる遺構がある事に気付いた。溝状遺構はトレンチと南北端の遺構を繋ぐ平面形であった。南北端の遺構はⅣ層上面から掘り込まれた南北方向の溝状遺構の一部と判断した。

遺構北半分はやや東側へ曲がっており、北から東へ 19° 傾く。残存最大幅は 1.18 ｍ、包含層上面からの深さは 0.36 ｍである。断面形は逆台形で、底面は緩やかに窪む。

遺構埋土は単層であると判断したが、調査区壁面の精査により全３層に分層できた。このため、遺構中央に設定した畔では、最下層のみと理解できる。上層からにぶい黄褐色微砂、締まりが強いにぶい黄褐色微砂、暗黄褐色シルト混じり微砂である。レンズ状に堆積することから、自然堆積層と判断した。

遺物は土師器が７点、土師器皿１点、土錘１点が出土した。**２**は土錘である。

出土遺物から本遺構は戦国時代（Ⅵ期）までに埋没したと推定した。

SD220・221 のすぐ東隣に位置し、埋没時期は本遺構がやや新しいことから、本遺構と SD220・221 は連続する時期の溝である可能性がある。

土坑（ＳＫ）

ＳＫ 420（第 10 図）

Ｈ２区西端に位置する。Ⅳ層上面で検出した。西側調査区壁面は崩落のため未確認だが、形状から西側調査区外へ続くと推定できる。

平面形は不整形で、底面は西側へ窪んでおり、周壁は緩やかに立ち上がる。残存長軸 0.63 ｍ、短軸 0.50 ｍ、検出面からの深さは 0.11 ｍである。遺構埋土は、黄灰色と暗黄灰色のシルト混じり細砂で、レンズ状に堆積しており、自然堆積層と判断した。

３は土錘で１層から出土した。他に土師器が１点出土したが、小片で図示出来なかった。

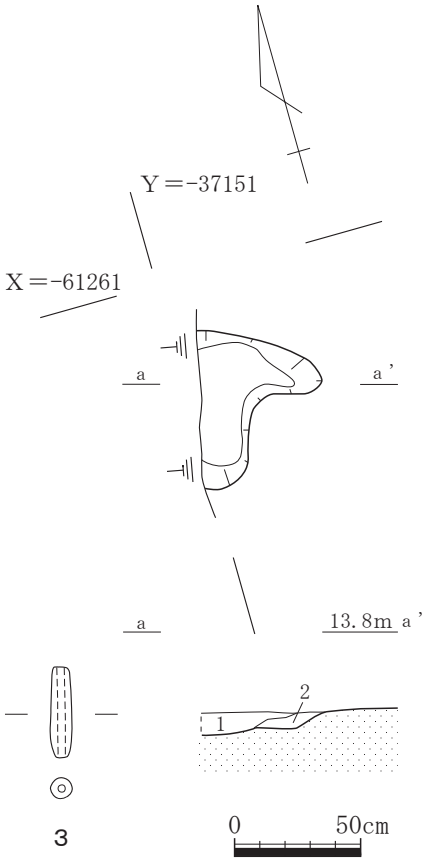
遺構の詳細な時期は不明であるが、出土遺物に土師器皿が含まれることから、戦国時代（Ⅵ期）には埋没していたと考える。

ＳＫ 421（第 11 図）

Ｈ２区西側北寄りに位置する。Ⅳ層上面で検出した。トレンチで遺構北端を失っている。西側には SD222 が隣接する。

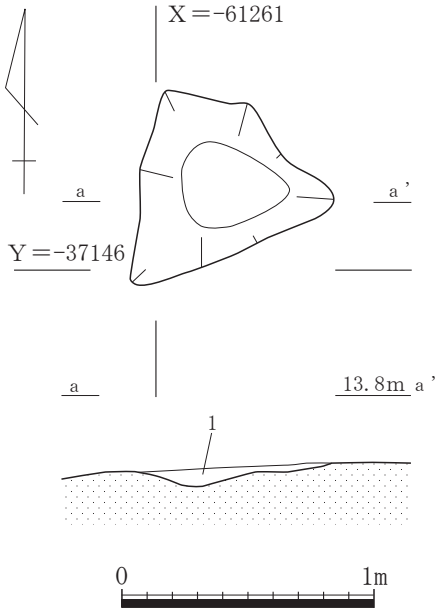
平面形は不整形で、底面は西側へ窪む。周壁は緩やかに立ち上がる。残存長軸 0.79 ｍ、短軸 0.78 ｍ、検出面からの深さは 0.08 ｍと浅い。遺構埋土は、にぶい黄褐色極細砂の単層で、自然堆積層と判断した。

出土遺物は無く本遺構の時期は不明であるが、近世以前には埋没していたと考える。



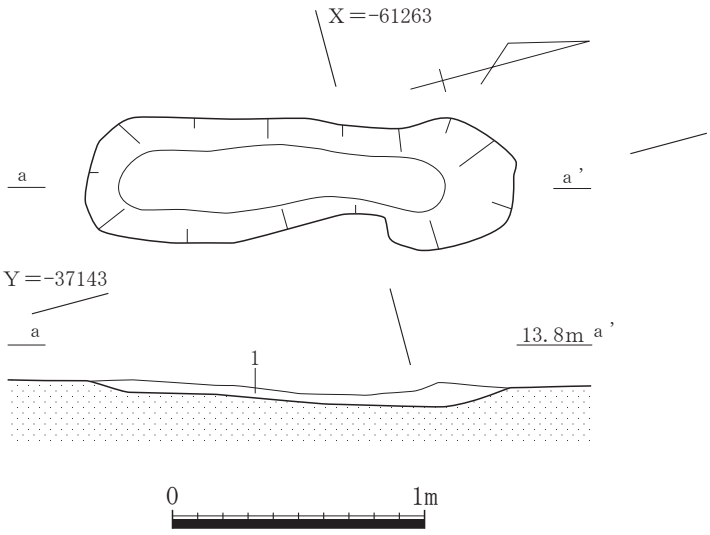
〈ＳＫ 420〉
１．黄灰色 2.5 Ｙ 6/1 シルト混じり細砂
２．暗黄灰色 2.5 Ｙ 6/2 シルト混じり細砂

第 10 図　ＳＫ 420 実測図（１/30）
出土遺物（１/４）



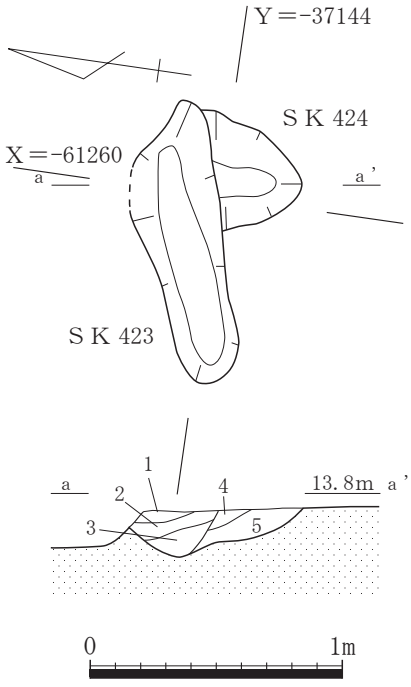
〈ＳＫ 421 土層名〉

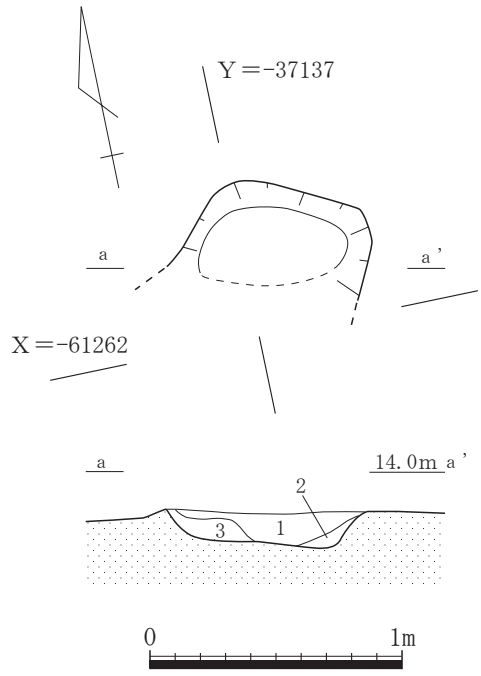
1．にぶい黄褐色 10ＹＲ 5/3 極細砂



〈ＳＫ 422 土層名〉

1．にぶい黄褐色 10ＹＲ 5/2 微砂（黄褐色微砂ブロック含む）





〈ＳＫ 423，424 土層名〉

1．暗黄褐色 2.5Ｙ 5/2 微砂（Ｍｎ斑がやや多い）（ＳＫ 423 埋土）

2．黄褐色 2.5Ｙ 5/3 細砂混じり微砂　（ＳＫ 423 埋土）

3．にぶい黄褐色 10ＹＲ 4/3 微砂　（ＳＫ 423 埋土）

4．にぶい黄褐色 10ＹＲ 4/3 微砂　（ＳＫ 424 埋土）

5．暗黄灰色 2.5Ｙ 3/2 微砂　（ＳＫ 424 埋土）

〈ＳＫ 425〉

1．灰黄褐色 10ＹＲ 4/2 細砂混じり微砂

2．にぶい黄褐色 10ＹＲ 5/3 混じり微砂

3．にぶい黄褐色 10ＹＲ 5/4 細砂混じり微砂

第 11 図　ＳＫ 421・422・423，424・425 実測図（1/30）

ＳＫ 422（第 11 図）

Ｈ２区中央に位置する。Ⅳ層上面で検出した。遺構中央上部は撹乱で削平される。

平面形は南北に長い楕円形で、底面はほぼ平坦で北側へ緩やかに深くなる。残存長軸 1.72 ｍ、短軸 0.52 ｍ、検出面からの深さは 0.06 ｍと浅い。周壁は緩やかに立ち上がる。遺構埋土は、にぶい黄褐色微砂の単層で、自然堆積層と判断した。

土師器と山茶碗が各２点出土したが、いずれも小片で図示し得なかった。

出土遺物から、本遺構は鎌倉～室町時代（Ｖ期）頃までに埋没したと考える。

ＳＫ 423（第 11 図）

Ｈ２区中央北端に位置する。Ⅳ層上面で検出した。トレンチで遺構北端を失っている。南側の SD424 と重複しており、本遺構が新しい。

平面形は東西に長い楕円形で、底面から周壁は急激に立ち上がる。残存長軸 1.2 ｍ、短軸 0.35 ｍ、検出面からの深さは 0.18 ｍである。遺構埋土は３層で、上層から暗黄褐色微砂、黄褐色細砂混じり微砂、にぶい黄褐色微砂で、いずれも自然堆積層と判断した。

出土遺物は無く、本遺構の時期は不明であるが、近世整地層以前の掘り込みであることから、近世以前に埋没したと推定される。

SK 424（第 11 図）

Ｈ２区中央北端に位置する。Ⅳ層上面で検出した。遺構の北側は SK423 と重複しており、本遺構が古い。

平面形は不明で、底面から周壁は緩やかに立ち上がる。残存径が 0.35 ｍ、検出面からの深さは 0.14 ｍである。遺構埋土は、にぶい黄褐色微砂と暗黄灰色微砂である。堆積状況から、いずれも自然堆積層と判断した。

出土遺物は無く、本遺構の詳細な時期については不明であるが、近世整地層以前の掘り込みであることから、近世以前には埋没していたと考える。

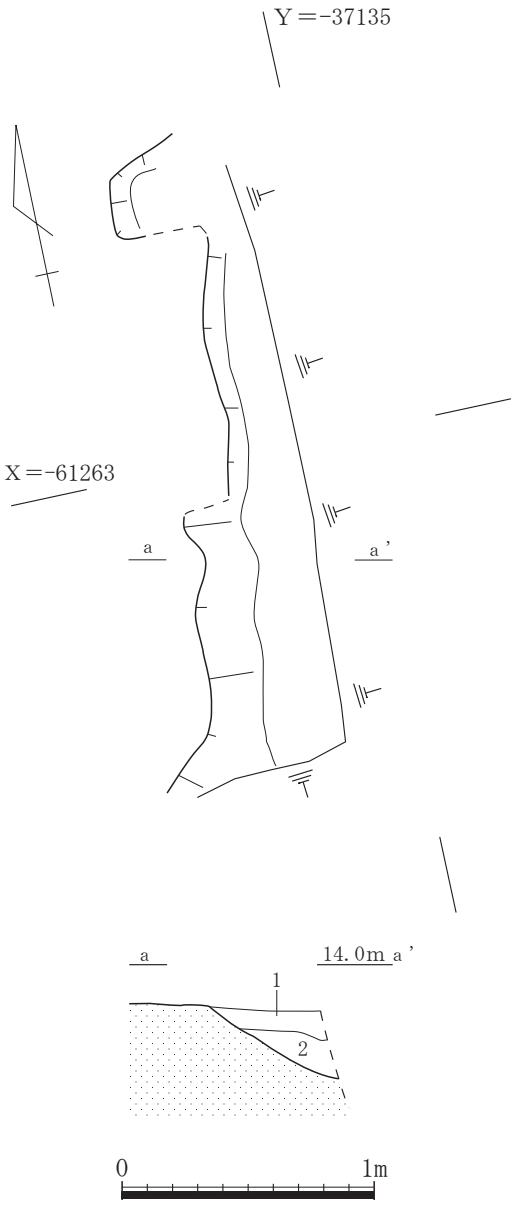
ＳＫ 425（第 11 図）

Ｈ２区東側北寄りに位置する。Ⅳ層上面で検出した。遺構の南側は撹乱で失っている。西側は SK429 と重複しており、本遺構が新しい。

平面形は不明で、底面はほぼ平坦である。底面から周壁は緩やかに立ち上がる。残存長軸 0.68 ｍ、短軸 0.4 ｍ、検出面からの深さは 0.14 ｍである。遺構埋土は全３層で、上層から灰黄褐色細砂混じり微砂、にぶい黄褐色シルト混じり微砂とにぶい黄褐色微砂である。堆積状況から、いずれも自然堆積層と判断した。

遺物は土師器が１点出土したが、小片で図示し得なかった。

遺物は小片であり、かつ遺構と時期の異なる遺物が混入した可能性も有る。よって、本遺構の詳細な時期比定は不明であるものの、近世整地層以前の掘り込みであることから、近世以前には埋没していたと考える。



〈ＳＫ 426 土層名〉

1．黒褐色 10ＹＲ 3/2 細砂混じり微砂

2．黒褐色 10ＹＲ 3/2 細砂混じり微砂（ややしまり弱い）

第 12 図　ＳＫ 426 実測図（１/30）

ＳＫ 426（第 12 図）

Ｈ２区東端に位置する。Ⅳ層上面で検出した。撹乱で遺構の上部が壊されており、遺構北端と中央の一部に本来の形状が残存している。遺構は調査区東・南壁でも確認でき、北・南・東側の調査区外へ続く。南側で SK466 と重複しており、本遺構が新しい。

撹乱を受けているため規模についての詳細は不明である。検出した平面形は南北に長い形状を呈する。土坑底面は緩やかに凹凸しており、南側へ深くなる。深さは検出面から 0.30ｍを測った。周壁は緩やかに立ち上がる。遺構埋土は、黒褐色細砂混じり微砂で、締まりの強弱で上下層に分層した。両層とも黄褐色・灰色微砂を多く含んでおり、土質の差異が少ないことから、人為的に短期間で遺構が埋め戻された可能性がある。

遺構全体は確認できていないが、位置と方向が一致しており、本遺構が区画溝である可能性も考えられる。

遺物は１層から土師器が３点、中世の土師器皿が１点、２層から土師器が３点出土した。

出土遺物から本遺構は戦国時代（Ⅵ期）までに埋没したと考える。

ＳＫ 427（第 13 図）

Ｈ２区中央西寄り南端に位置する。Ⅳ層上面で検出した。遺構の南端はトレンチで失っているが、調査区南壁面でも確認しており、南側調査区外へ続く。遺構南側は上部が削平される。遺構西側は SK428 と重複しており、本遺構が新しい。

平面形は南北に長い不整形で、底面はほぼ平坦である。底面から周壁は緩やかに立ち上がる。残存長軸 1.14 ｍ、短軸 0.74 ｍ、検出面からの深さは 0.1 ｍである。底面から周壁は緩やかに立ち上がる。遺構埋土は単層で、自然堆積層と判断した。

４は須恵器の杯底部とみられる。他には土師器、山茶碗各１点出土した。４は古い時期の遺物が混入した可能性があるため、本遺構の時期は鎌倉～戦国期（Ⅴ～Ⅵ期）までに埋没したと考える。

ＳＫ 428（第 13 図）

Ｈ２区中央西寄り南端に位置する。Ⅳ層上面で検出した。遺構西側はSK427 と重複しており、本遺構が古い。

遺構西側の平面形は不明であるが、全体形は東西に長い楕円形と考える。底面から周壁は緩やかに立ち上がる。残存長軸 0.6 ｍ、短軸 0.25 ｍ、検出面からの深さは 0.08 ｍである。遺構埋土は、にぶい黄色微砂の単層で、自然堆積層と判断した。

出土遺物は無いが、遺構の重複関係から本遺構の時期は、SK427 以前と考える。

ＳＫ 429（第 14 図）

Ｈ２区東側北寄りに位置する。Ⅳ層上面で検出した。遺構南側は撹乱で失われる。遺構東側はSK425、西側はSD218 と重複しており、両遺構より本遺構が古い。

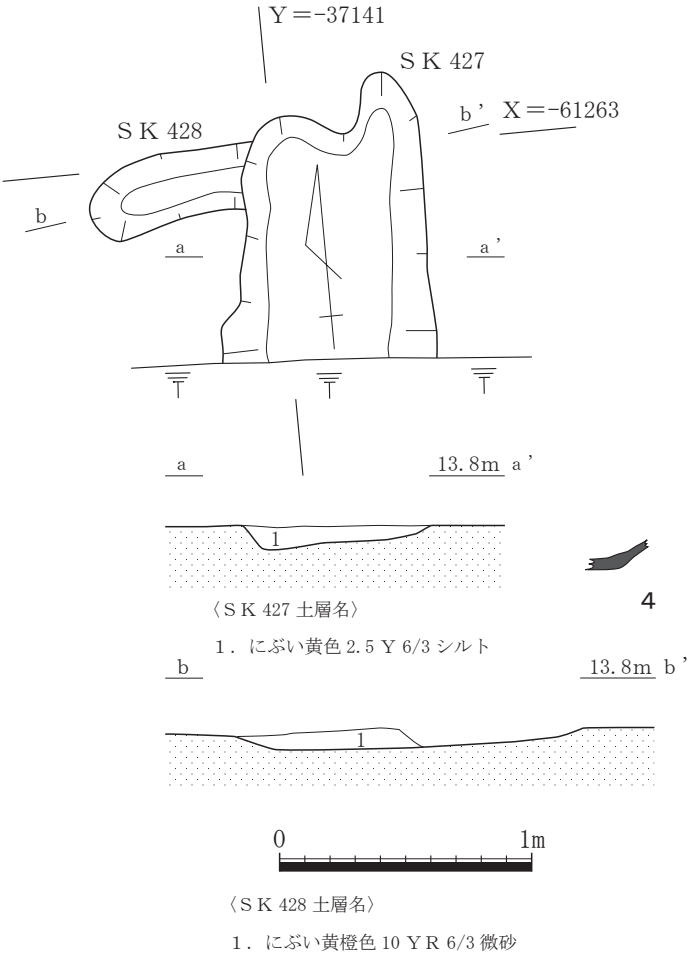
平面形は不明であるが、残存する様相から楕円形を呈したと思われる。底面は東へ緩やかに窪み、西側の周壁は緩やかに立ち上がる。

残存長軸 0.54 ｍ、短軸 0.24 ｍ、検出面からの深さは 0.17 ｍである。遺構埋土は２層である。上層からにぶい黄褐色細砂混じり微砂と灰黄褐色微砂で、レンズ状に堆積しており、自然堆積層と判断した。

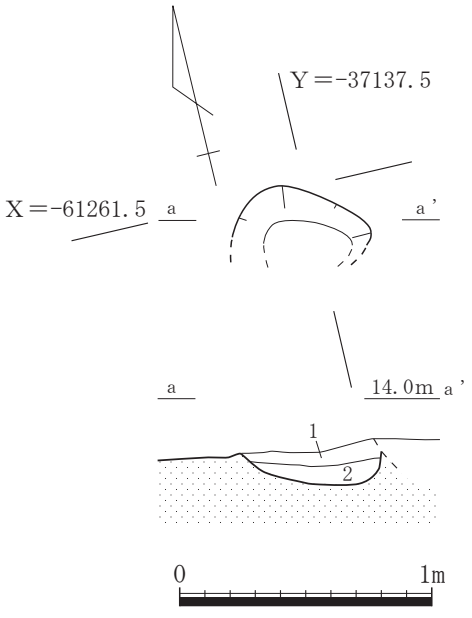
出土遺物は無く、詳細な時期は不明だが、遺構の重複関係から近世以前と考える。

ＳＫ 436（第 15 図）

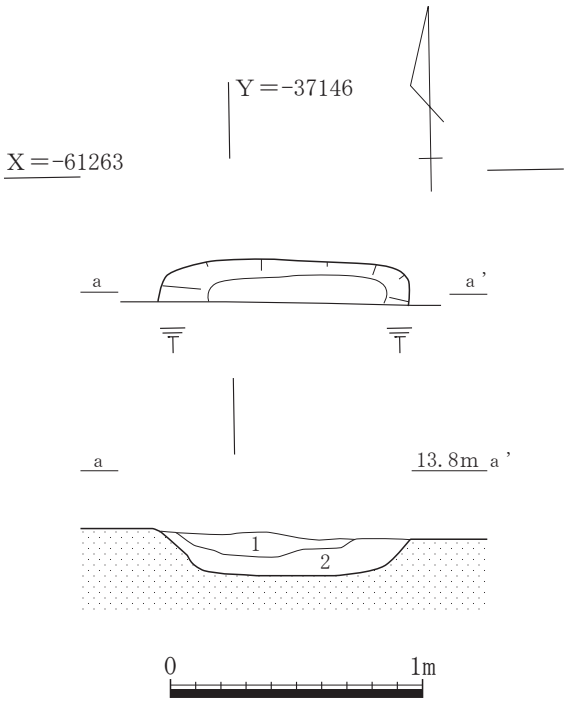
Ｈ２区西側南寄りに位置する。Ⅳ層上面で検出した。トレンチで遺構南半分を失っており、全体形は不明である。調査区南壁でも確認でき、南側調査区外へ続く。残存長軸 1.00 ｍ、短軸 0.17 ｍ、



第 13 図　ＳＫ 427、428 実測図（１/30）出土遺物（１/４）



第 14 図　ＳＫ 429 実測図（１/30）

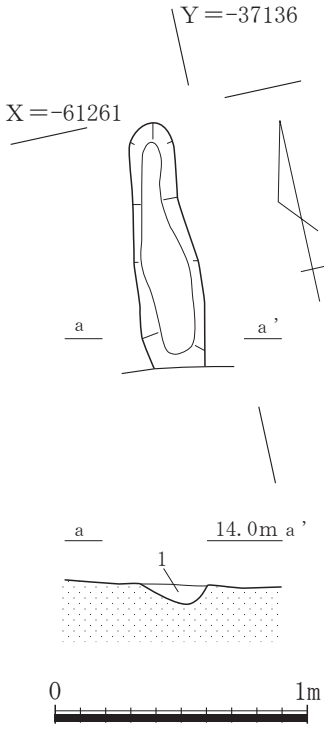


〈ＳＫ 436 土層名〉

1．にぶい褐色 7.5 ＹＲ 5/3 微砂（しまりが強い、Ｍｎ多い）

2．灰褐色 7.5 ＹＲ 5/2 微砂（しまりやや弱く、Ｍｎ多い）

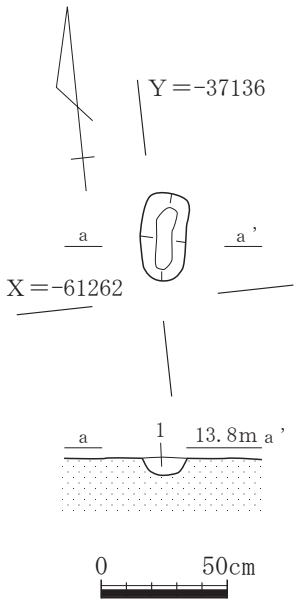
第 15 図　ＳＫ 436 実測図（１/30）



〈ＳＫ 437 土層名〉

1．灰黄褐色 10 ＹＲ 4/2 細砂混じり微砂

第 16 図　ＳＫ 437 実測図（１/30）



〈ＳＫ 438 土層名〉

1．にぶい黄褐色 10 ＹＲ 5/3 微砂

第 17 図　ＳＫ 438 実測図（１/30）

Ⅳ層上面からの深さは 0.17 ｍである。底面は平坦で、東側の周壁は急激に、西側の周壁は緩やかに立ち上がる。遺構埋土は、にぶい褐色と灰褐色微砂で、レンズ状に堆積しており、自然堆積層と判断した。

出土遺物は無く本遺構の時期は不明であるが、近世以前に埋没したと考える。

ＳＫ 437（第 16 図）

Ｈ２区東端北寄りに位置する。Ⅳ層上面で検出した。北側の遺構上部は削平され、南側は撹乱で失われる。

平面形は不明であるが、全体形は南北に長い楕円形と考える。底面から周壁は緩やかに立ち上がる。残存長軸 1.00 ｍ、短軸 0.25 ｍ、検出面からの深さは 0.07 ｍと浅い。遺構埋土は、灰黄褐色細砂混じり微砂の単層で自然堆積層と考えた。

出土遺物は無く、本遺構の時期は不明であるが、近世整地層以前の掘り込みであることから、近世以前には埋没していたと考える。

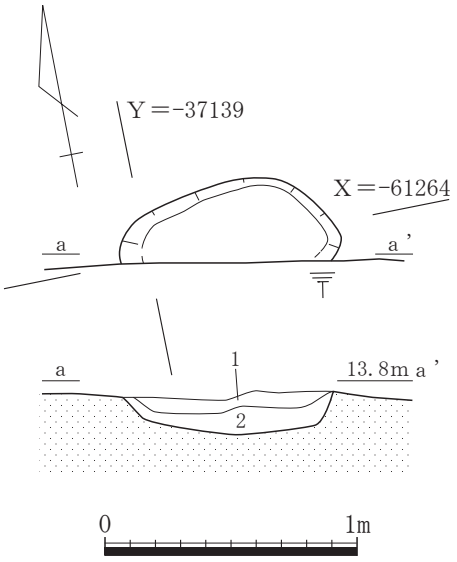
ＳＫ 438（第 17 図）

Ｈ２区東端北寄りに位置する。Ⅳ層上面で検出した。残存長軸0.35ｍ、短軸0.18ｍ、検出面からの深さは0.07ｍと浅い。平面形は南北に長い楕円形で、底面から周壁は緩やかに立ち上がる。遺構埋土は、にぶい黄褐色微砂の単層で、自然堆積層と考えた。出土遺物は無く、本遺構の時期は不明である。

ＳＫ 439（第 18 図）

Ｈ２区東側南端に位置する。Ⅳ層上面で検出した。調査区南壁でも確認でき、南側調査区へ続く。平面形は不明で、底面から周壁は緩やかに立ち上がる。残存長軸 0.89 ｍ、短軸 0.45 ｍ、検出面からの深さは 0.07 ｍと浅い。遺構埋土は、灰黄褐色微砂で、レンズ状に堆積することから自然堆積層と考えた。

遺物は土師器３点、土師器皿１点が出土した。出土遺物から本遺構の時期は戦国時代（Ⅵ期）までに埋没したと考える。



〈ＳＫ 439 土層名〉
1．灰黄褐色 2.5 Ｙ 6/2 微砂（Ｆｅ、Ｍｎ多い）
2．灰黄褐色 10 ＹＲ 5/2 微砂（粘性やや強い Ｆｅ、Ｍｎ多い）

第 18 図　ＳＫ 439 実測図（１/30）

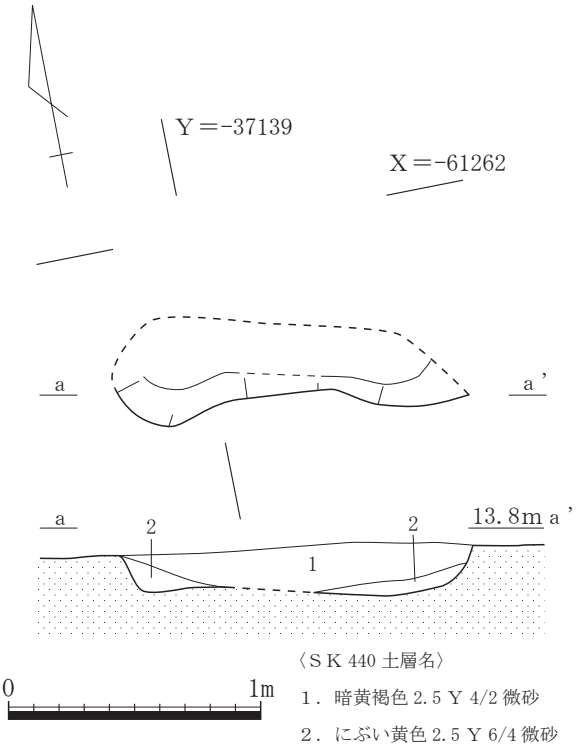
ＳＫ 440（第 19 図）

Ｈ２区東側中央に位置する。Ⅳ層上面で検出した。北側半分は撹乱で失われる。

平面形は東西に長い楕円形と考えられる。底面はほぼ平坦で、周壁は急激に立ち上がる。残存長軸 1.42 ｍ、短軸 0.25 ｍ、検出面からの深さは0.22ｍである。遺構埋土は全２層で、１層は暗黄灰色微砂、２層はにぶい黄色微砂である。レンズ状に堆積することから、自然堆積層と考えた。

遺物は土師器が１点出土した。小片で時期は判別できなかった。

遺構と時期の異なる遺物が混入した可能性も有り、本遺構の詳細な時期は不明である。



〈ＳＫ 440 土層名〉
1．暗黄褐色 2.5 Ｙ 4/2 微砂
2．にぶい黄色 2.5 Ｙ 6/4 微砂

第 19 図　ＳＫ 440 実測図（１/30）

ＳＫ 442

Ｈ２区東側北端に位置する。調査区北壁断面でⅣ層上面から掘り込む遺構を検出した。トレンチで南側は失われている。

平面形、断面形ともに不明である。検出面からの深さは 0.21 ｍであった。遺構埋土は

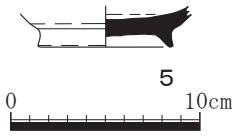
２層である。両層とも灰黄褐色微砂で、締まりの強弱で上下層に分層した。土質から両層とも自然堆積層と考えた。出土遺物は無く、本遺構の時期は不明である。

柱穴、その他（Ｐｉｔ）

Ｐｉｔ 1791（第５、20 図）

Ｈ２区西側南寄りに位置する。Ⅳ層上面で検出した。南側には Pit1792 が隣接する。

径 0.64 ｍ、検出面からの深さは 0.14 ｍである。平面形は東西に膨らむ楕円形で、底面は西側へ窪む。西側周壁は急激に立ち上がり、東側周壁は緩やかに立ち上がる。遺構埋土は、灰色シルト混じり微砂と、灰オリーブ色微砂である。堆積状況から、柱抜取穴埋土と柱掘方埋土の可能性もある。



第 20 図　Ｐ 1791
出土遺物（1/4）

遺物は、１層から**５**が出土した。**５**は灰釉陶器の椀Ｂで Ⅶ期新～Ⅷ期古段階である。

Ｓ字甕の小破片が出土したが、時期の古い遺物が埋没過程で混入した可能性も有り、本遺構は平安時代中期以降（Ⅳ１期）までに埋没したと考える。

Ｐｉｔ 1798（第５図）

Ｈ２区中央北寄りに位置する。Ⅳ層上面で検出した。本遺構から西へ約 0.90 ｍには Pit1796 が位置する。遺構北側には SK423 が隣接する。

径 0.43 ｍ、検出面からの深さは 0.12 ｍである。平面形は東西に膨らむ楕円形で、底面から周壁へ急激に立ち上がる。遺構埋土は、暗黄褐色微砂と黄褐色微砂である。堆積状況から、柱抜取穴埋土と柱掘方埋土と判断した。位置関係から後述する Pit1796 と東西方向に並ぶ可能性もある。

出土遺物は無く、本遺構の時期は不明である。

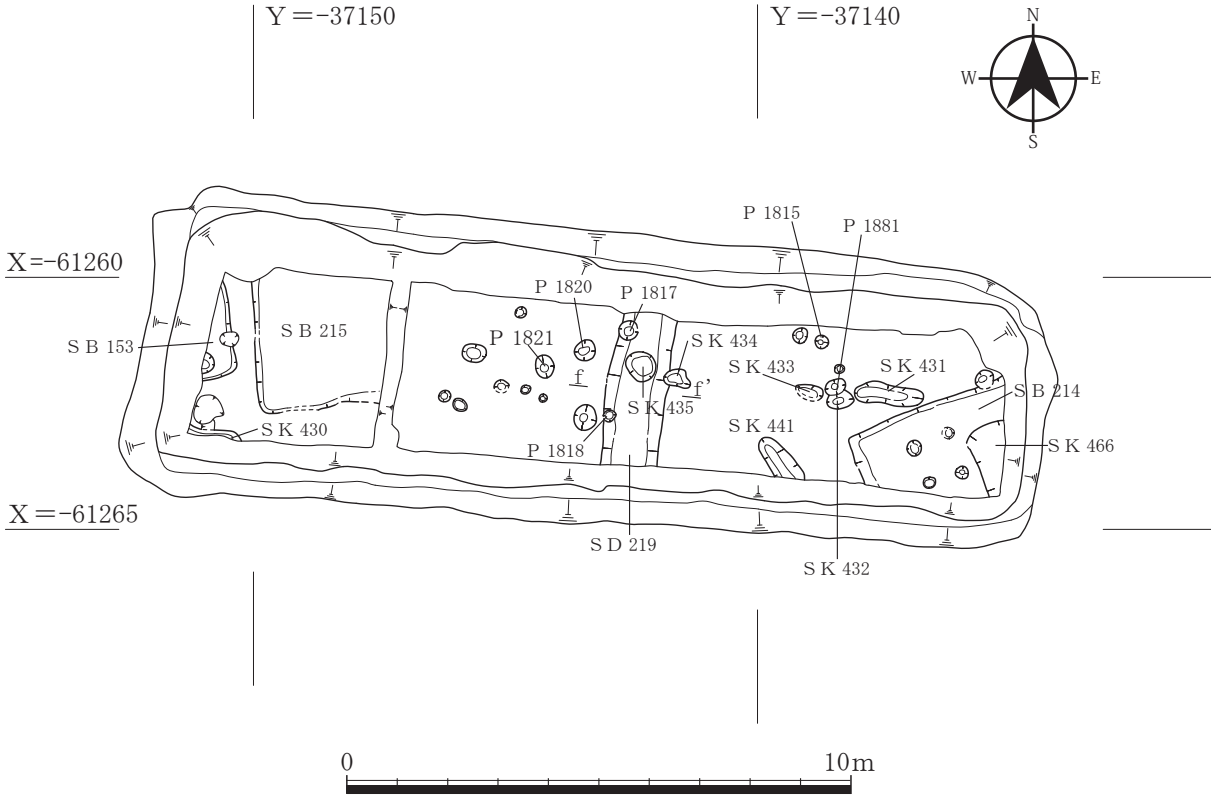
Ｐｉｔ 1800（第５図）

Ｈ２区中央北端に位置する。Ⅳ層上面で検出した。遺構東半分は断ち割りで失った。

径 0.32 ｍ、検出面からの深さは 0.43 ｍである。平面形は不整な円形である。断面はＶ字形を呈すが、周壁の途中で南側へ枝状に伸びる。遺構埋土は、黒褐色シルト混じり微砂である。埋土中に腐食有機物は無かったが、断面形状と土質から、木痕の可能性が考えられる。遺物は土師器が１点出土した。

遺構と時期の異なる遺物が混入した可能性も有り、本遺構の詳細な時期は不明であるが、中世後期頃の埋没と推定した。

3．Ⅵ層（基盤層）上面検出遺構



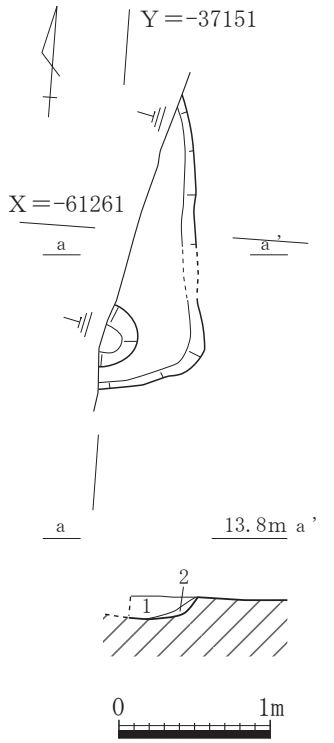
第 21 図　Ｈ２区Ⅵ層上面遺構配置図（１/150）

ＳＢ 153（Pit1805）（第 22 図）

Ｈ２区北西端に位置する。Ⅵ層上面で遺構の南西隅を検出した。調査区西壁では台風による壁面崩落で掘り込まれる面は直接確認できなかったが、調査区北西側へ続くと推定できる。

残存長軸 1.80 ｍ、短軸 0.80 ｍである。検出面からの深さは 0.18 ｍである。床面はほぼ平坦で、壁面は急激に立ち上がる。遺構埋土は全２層で、にぶい黄褐色シルト混じり微砂とにぶい黄色微砂である。焼土・炭化物は含まれておらず、竈・炉の痕跡は確認できなかった。

遺構埋土掘削後床面に精査を行い、遺構南東端に Pit1805 を検出した。遺構の西半分はトレンチで掘削しているが、平面形はほぼ円形と推定でき、幅 0.50 ｍである。底面は緩やかに窪んでおり、床面からの深さは 0.13 ｍである。SB153 遺構埋土下で検出できたことから、同遺構に伴う柱穴痕跡と判断した。



〈ＳＢ 153 土層名〉
1．にぶい黄褐色 10ＹＲ 5/3 シルト混じり微砂
（灰色シルトブロック含む）
2．にぶい黄色 2.5Ｙ 6/3 微砂（しまり弱い）

第 22 図　ＳＢ 153 実測図（１/50）

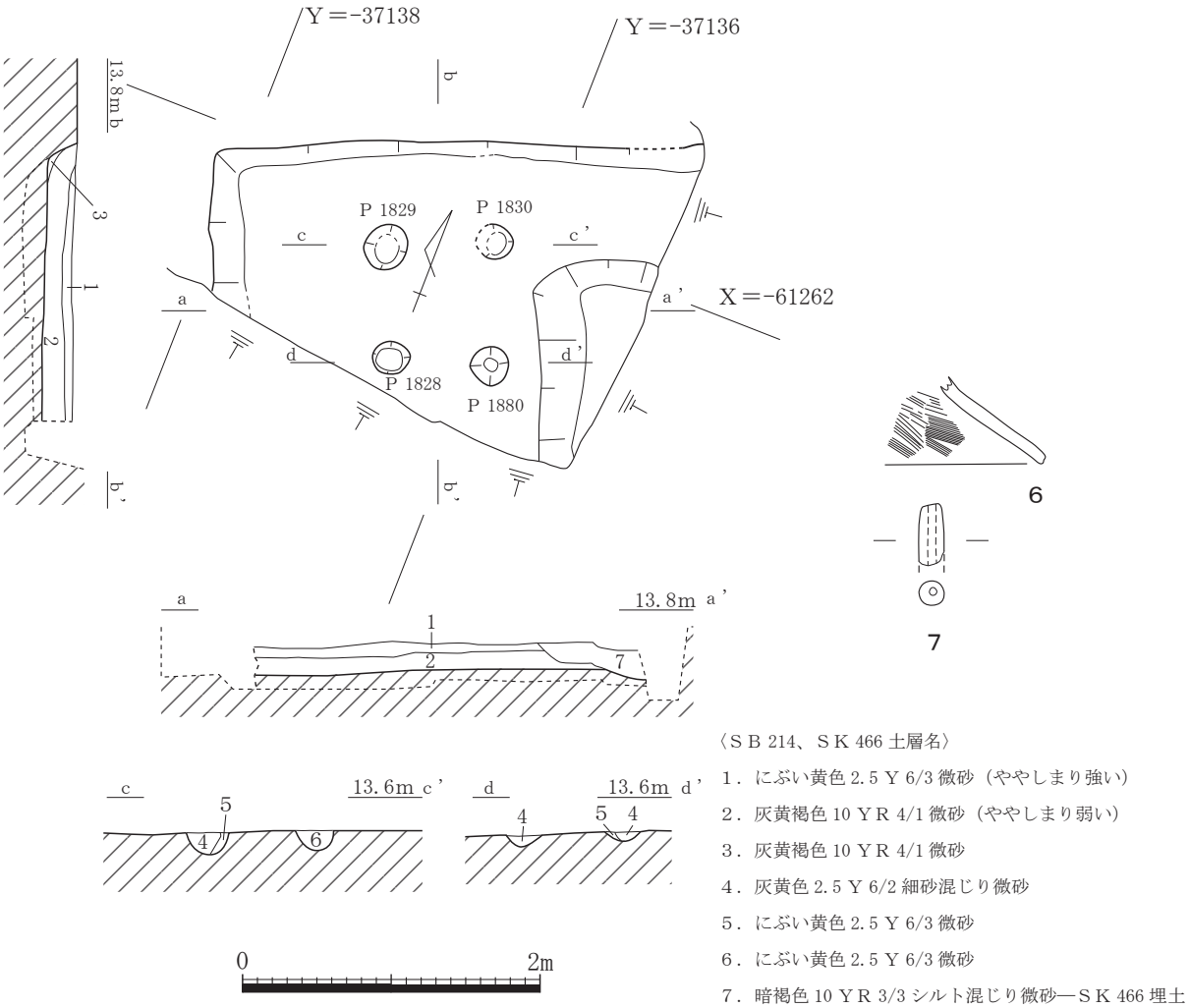
既調査Ｈ３区では、調査区北東端にSB153の北西隅を確認している。南東へ続くと推定でき、基盤層上面から掘り込まれることから、本遺構がＨ３区のSB153と同一遺構と推定した。SB153の推定規模は、長軸3.60～3.8ｍ、短軸2.8～3.40ｍで、平面形は北東－南西方向へやや長い隅丸長方形と推測した。

遺物は土師器が２点ほど出土しているが、小片で時期は判別し得なかった。

ＳＢ214（Pit1828、1829、1830、1880）（第23図）

Ｈ２区南東端に位置する。Ⅵ層上面で遺構の北西部を検出した。遺構北辺はPit1831、西辺はPit1813、遺構南東側はSK466と重複しており、本遺構が古い。調査区壁面でも確認でき、東・南側調査区外へ続くと推定できる。

全体の規模は不明で、残存長軸3.30ｍ、短軸2.17ｍである。主軸方位は不明である。検出面からの深さは0.23ｍを測る。平面形は隅丸方形、床面はほぼ平坦で、壁面は急激



〈ＳＢ214、ＳＫ466土層名〉

1．にぶい黄色2.5Ｙ6/3微砂（ややしまり強い）
2．灰黄褐色10ＹＲ4/1微砂（ややしまり弱い）
3．灰黄褐色10ＹＲ4/1微砂
4．灰黄色2.5Ｙ6/2細砂混じり微砂
5．にぶい黄色2.5Ｙ6/3微砂
6．にぶい黄色2.5Ｙ6/3微砂
7．暗褐色10ＹＲ3/3シルト混じり微砂―ＳＫ466埋土

第23図　ＳＢ214実測図（1/50）
出土遺物（1/4）

に立ち上がる。遺構埋土は全3層で、にぶい黄色～灰黄褐色微砂である。いずれも自然堆積層と判断した。焼土や炭化物は含まれておらず、竈・炉の痕跡は確認できなかった。

ベルトを除去後、床面の精査を行い、遺構ほぼ中央にPit1828、1829、1830、1880の4基のPitを検出した。いずれの平面形もほぼ円形で、幅約0.22～0.27ｍである。底面はゆるやかに窪んでおり、床面からの深さは約0.10～0.12ｍである。SB214遺構埋土下で検出できたことから、本遺構に伴う柱穴痕跡と判断した。

遺構埋土を掘削後、再度底面を精査し、断ち割りを行なったが、硬化面・貼り床・壁溝等の付属施設はいずれも確認できなかった。

遺構埋土中と床面から土師器の小片数点が出土した。時期の判別できる遺物は**6**のみで、古墳時代前半頃の高坏脚部で、遺構埋土中から出土した。**7**は土錘である。

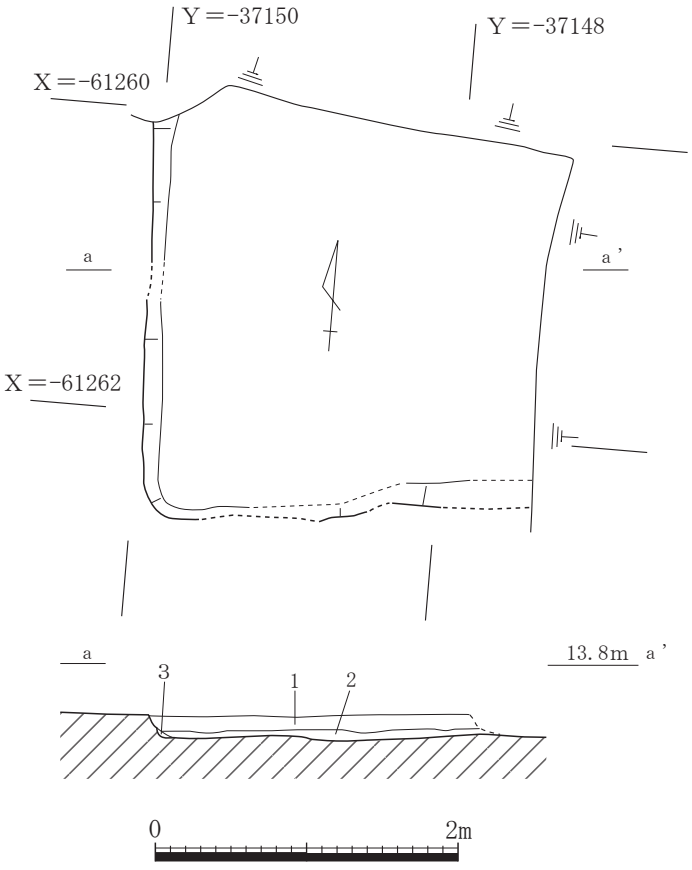
よって本遺構の時期はおよそ古墳時代前半（Ⅱ1期の範疇）と判断した。

ＳＢ215（第24図）

Ｈ2区西部に位置する。Ⅵ層上面で検出した。遺構中央部はSD220・221に、東側はSD222と重複しており、本遺構が古い。遺構の北側は調査区外へ続く。

残存長軸2.80ｍ、残存短軸2.5ｍ、主軸方位は北から3°東へ傾く。検出面からの深さは0.15ｍを測る。平面形は隅丸方形、底面はほぼ平坦で、周壁は急激に立ち上がる。遺構埋土は全3層で、にぶい黄色細砂混じり微砂である。いずれも自然堆積層と判断した。焼土や炭化物は含まれておらず、竈・炉の痕跡は確認できなかった。

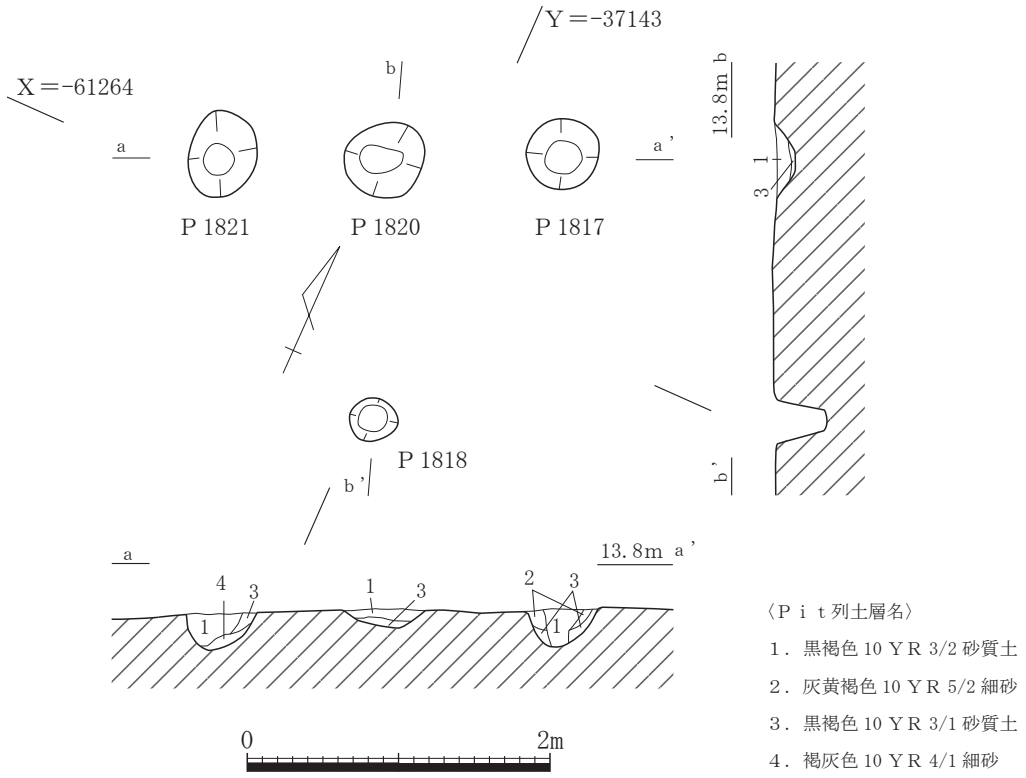
遺構埋土掘削後に、床面の精査と断ち割りを行ったが、硬化面・貼り床・壁溝等の付属施設、柱穴の痕跡はいずれも確認できなかった。



〈ＳＢ215土層名〉
1．にぶい黄色2.5Ｙ6/4細砂混じり微砂（Ｆｅ，Ｍｎやや強く、しまる）
2．にぶい黄色2.5Ｙ6/3細砂混じり微砂（Ｆｅ，Ｍｎやや弱く、しまり弱い）
3．にぶい黄色2.5Ｙ6/3細砂混じり微砂（Ｆｅ，Ｍｎ弱く、しまり弱い）

第24図　ＳＢ215実測図（1/50）

遺構の時期が判別できる遺物は無く、遺構の時期に関しては不明である。過去調査の成果では、同様の平面形を持つⅡ～Ⅳ期の住居が数多く見つかっていることから、およそ古墳時代前期頃～平安時代の竪穴住居とも考えられる。



第 25 図　Ｐｉｔ列実測図（1/50）

ピット列（Pit1817、1818、1820、1821）（第 25 図）

Ｈ 2 区中央西寄りに位置する。Ⅵ層上面で検出した。Pit1817、1818 が SD219 と重複しており、両遺構が共に新しい。東西方向に Pit1817、1820、1821 が並び、南北方向に Pit1818、1820 が並ぶ。

東西方向の列は東から北へ 24° 傾いている。南北方向の列は、東西方向の列から南へ 87 ～ 94° である。Pit1817、1818、1821 は、遺構埋土の堆積状況から柱抜き取り穴と考えた。Pit1820 は、1821 から東へ 0.80 ～ 01.10 ｍ、1817 から西へ 0.80 ～ 1.10 ｍで、ほぼ同距離である。Pit1818 は 1820 から 1.20 ～ 1.50 ｍとやや離れる。底面の標高は、Pit1817 が 13.38 ｍ、1818 が 13.35 ｍ、1821 が 13.35 ｍ、1820 が 13.45 ｍで、1820 以外ほぼ同標高である。

周囲にある他のピットは、Pit1825 が 1824 から 0.80 ～ 1.15 ｍで上記とほぼ同距離だが、柱の存在を示す堆積状況でないため、関連しないと考えた。また、Pit1819 は底面の標高が 13.37 ｍで堆積状況からも柱穴と考えられるが、1817・1820・1821 の軸からは南へ 73 ～ 78° の位置にあり、東西方向から大きく傾くため、関連しないと考えた。

本遺構群は、関連する遺構が少ないものの、遺構の位置と堆積状況から掘立柱建物跡の可能性も考えられる。出土遺物は無く、時期は不明である。

溝（ＳＤ）

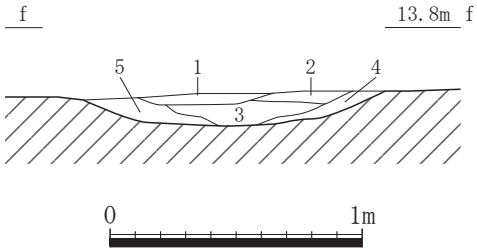
ＳＤ 219（第 21、26 図）

Ｈ２区中央に位置する。南北方向へ伸びる溝で、Ⅵ層上面で検出した。Pit1817・1818、SK434・435 と重複しており、いずれの遺構よりも本遺構が古い。

溝の方向は北から東へ9°傾く。残存幅は1.23ｍ、検出面からの深さは0.20ｍである。断面形は半円形、底面はほぼ平坦で、周壁は緩やかに立ち上がる。

遺構埋土は、全５層で1･2層は灰黄褐色微砂、3･4層は暗黄灰色微砂～シルト混じり微砂、5層は黄褐色シルト混じり微砂である。レンズ状に堆積することから自然堆積土と判断した。

遺物は土師器が１点出土したが小片で時期の判別ができない。本遺構の時期も不明である。



〈ＳＤ 219 土層名〉
1．灰黄褐色 10ＹＲ 4/2 微砂（しまりやや強い）
2．灰黄褐色 10ＹＲ 4/2 微砂（しまりやや強い、暗褐色のブロック混じる）
3．暗黄灰色 2.5Ｙ 4/2 微砂
4．暗黄灰色 2.5Ｙ 4/2 シルト混じり微砂
5．黄褐色 2.5Ｙ 5/3 シルト混じり微砂

第 26 図　ＳＤ 219 実測図（1/30）

土坑（ＳＫ）

ＳＫ 430

Ｈ２区南西端に位置する。Ⅵ層上面で検出した。トレンチで遺構南半分を壊しており、全体形は不明である。調査区南壁にも確認でき、調査区外の南西側へ続く。

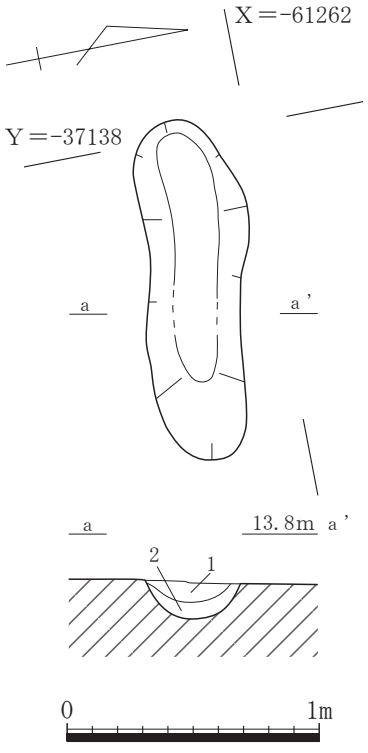
基盤層上面からの深さは0.12ｍである。底面は平坦で周壁は緩やかに立ち上がる。遺構埋土は、灰褐色シルト混じり微砂の単層で、自然堆積層と判断した。出土遺物は無く、本遺構の時期は不明であるが、Ⅳ層以前に形成されたと推測できるため、Ⅳ期以前と推定する。

ＳＫ 431（第 27 図）

Ｈ２区東側に位置する。Ⅵ層上面で検出した。西側にSK431、Pit1881 が隣接する。

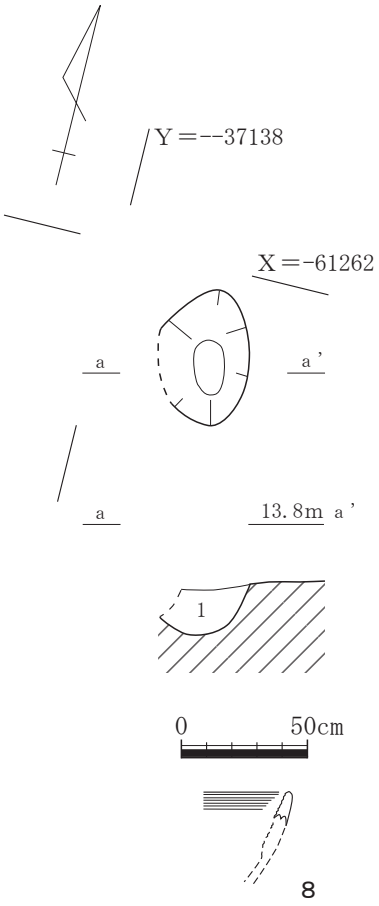
長軸1.37ｍ、短軸0.42ｍ、検出面からの深さは0.15ｍである。平面形は東西に長い不整楕円形で、底面から周壁まで緩やかに立ち上がる。遺構埋土は２層で、堆積状況から自然堆積層と判断した。

遺物は土師器が出土したが、詳細な時期を判別し得なかった。本遺構はおよそ平安時代以前に埋没したと考える。



〈ＳＫ 431 土層名〉
1．にぶい褐色 7.5ＹＲ 5/4 シルト混じり微砂
2．にぶい黄褐色 10ＹＲ 4/3 微砂

第 27 図　ＳＫ 431 実測図（1/30）



〈ＳＫ 432 土層名〉

1．灰黄色 2.5 Ｙ 6/4 シルト混じり微砂

第 28 図　ＳＫ 432 実測図（１/30）
出土遺物（１/４）

ＳＫ 432（第 28 図）

Ｈ２区東側に位置する。Ⅵ層上面で検出した。Pit1881 と重複し、本遺構が古い。東側に SK431、北側に Pit1814、西側に SK433 が隣接する。

長軸 0.55 ｍ、短軸 0.34 ｍ、検出面からの深さは 0.18 ｍである。平面形は東西に長い楕円形で、底面から周壁まで緩やかに立ち上がる。遺構埋土は、灰黄色シルト混じり微砂で、堆積状況から自然堆積層と判断した。

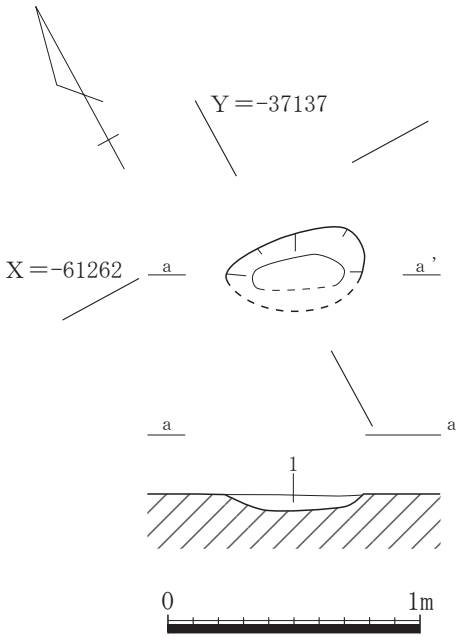
遺物は遺構埋土中から土師器が１点出土した。**8** は多条沈線のある有段高坏の口縁部である。廻間Ⅱ段階併行期と考えられる。

出土遺物から、本遺構は古墳時代初頭（Ⅱ１期）頃までに埋没したと考えられる。

ＳＫ 433（第 29 図）

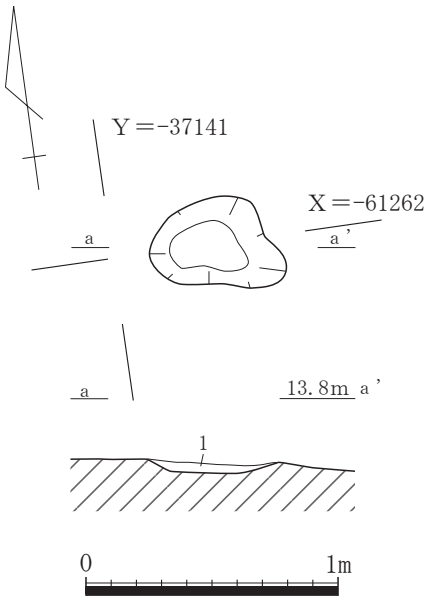
Ｈ２区東側に位置する。Ⅵ層上面で検出した。東側に SK432、Pit1881 が隣接する。

長軸 0.54 ｍ、検出面からの深さは 0.06 ｍである。平面形は北西から南東に長い楕円形で、底面から周壁まで緩やかに立ち上がる。遺構埋土は、灰褐色砂質土の単層で、自然堆積層と判断した。



〈ＳＫ 433 土層名〉

1．灰褐色 10 ＹＲ 4/1 砂質土



〈ＳＫ 434 土層名〉

1．にぶい黄褐色 10 ＹＲ 5/3 微砂

第 29 図　ＳＫ 433、434 実測図（１/30）

出土遺物は無く、本遺構の時期は不明である。

ＳＫ 434（第 29 図）

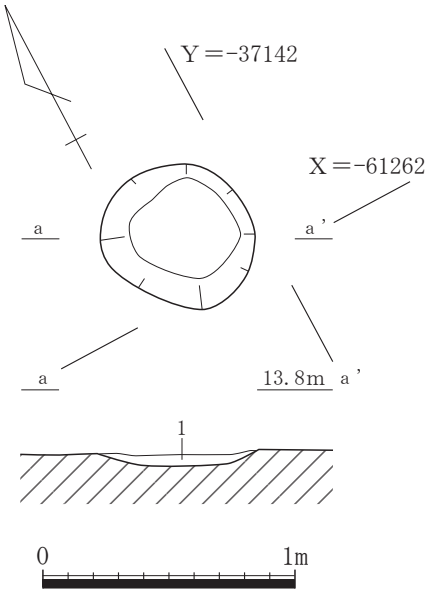
Ｈ２区東側に位置する。Ⅵ層上面で検出した。SD219 と重複し、本遺構が新しい。

長軸 0.52 ｍ、短軸 0.4 ｍ、検出面からの深さは 0.04 ｍと浅い。平面形は東西に長い不整楕円形で、底面から周壁まで緩やかに立ち上がる。遺構埋土は、にぶり黄褐色微砂の単層で、自然堆積層と判断した。出土遺物は無く、本遺構の時期は不明であるが、Ⅳ層以前に形成されたと推測できるため、Ⅳ期以前と推定する。

ＳＫ 435（第 30 図）

Ｈ２区東側に位置する。Ⅵ層上面で検出した。SD219 と重複し、本遺構が新しい。

長軸 0.62 ｍ、短軸 0.54 ｍ、検出面からの深さは 0.05 ｍと浅い。平面形は不整な円形で、底面から周壁まで緩やかに立ち上がる。遺構埋土は、にぶい黄色微砂の単層で、自然堆積層と判断した。出土遺物は無く、本遺構の時期は不明であるが、Ⅳ層堆積以前に形成されたと推測できるため、Ⅳ期以前と推定する。



〈ＳＫ 435 土層名〉
1．にぶい黄色 2.5 Ｙ 6/4 微砂

第 30 図　ＳＫ 435 実測図（１/30）

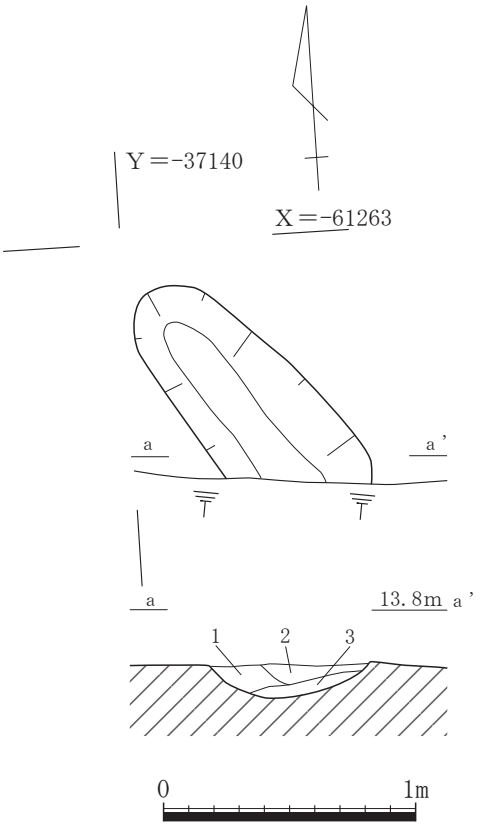
ＳＫ 441（第 31 図）

Ｈ２区東側に位置する。Ⅵ層上面で遺構の北側を検出した。調査区南壁面にも確認でき、南側調査区外へ続く。東側に Pit1813、SB214 が隣接する。

長軸 1.53 ｍ、短軸 0.5 ｍ、検出面からの深さは 0.13 ｍである。平面形は北西から南東に長い楕円形で、底面は緩やかに凹凸しており、周壁は緩やかに立ち上がる。遺構埋土は全３層で、灰黄褐色微砂、締まりが弱い黄褐色微砂、締まりがやや強い黄褐色微砂である。レンズ状に堆積するため自然堆積層と判断した。出土遺物は無く、本遺構の時期は不明であるが、Ⅳ層堆積以前に形成されたと推測できるため、Ⅳ期以前と推定する。

ＳＫ 466（第 23 図）

Ｈ２区南東端に位置する。SB214 掘削中に、Ⅵ層を掘り込む暗い土色の範囲を検出した。調査区壁面を



〈ＳＫ 441 土層名〉
1．灰黄褐色 10 ＹＲ 5/2 微砂（しまり強い）
2．黄褐色 2.5 Ｙ 5/3 微砂（しまり弱い）
3．黄褐色 2.5 Ｙ 5/4 微砂（しまりやや強い）

第 31 図　ＳＫ 441 実測図（１/30）

精査すると、Ⅳ層上面から掘り込まれる土坑 SK426 の直下に、SB214 を掘り込む土層が確認できた。当初は SK426 の最下層と認識していたが、検出範囲の一部が SK426 より西側へ広がったため、別遺構と判断した。本遺構は SK426 より古く、SB214 より新しい。上部が SK426 で壊され、掘り込み面は不明である。調査区南・東壁面にも確認でき、調査区外南東へ続く。

柱穴，その他（Ｐｉｔ，ＳＸ）

Ｐｉｔ 1815（第 21 図）

Ｈ２区東側北寄りに位置する。Ⅵ層上面で検出した。本遺構の西側には Pit1816 が隣接する。

径 0.26 ｍで、検出面からの深さは 0.19 ｍである。平面形はほぼ円形で、底面は緩やかに窪み、周壁は緩やかに立ち上がる。遺構埋土は灰黄褐色と黒褐色の砂質土である。堆積状況から柱抜取穴埋土と柱掘方埋土と判断した。周囲に一定距離で並ぶ遺構は見られなかった。

遺物は土師器が３点出土したが、詳細な時期を判別し得なかった。

本遺構は平安時代以前に埋没したと考える。

Ｐｉｔ 1831（第 21 図）

Ｈ２区東端に位置する。SB214 北側周壁と重複しており、SB214 掘削中にⅥ層上面で検出した。本遺構と SB214 の新旧関係は、断面では確認できなかったが、遺構埋土の１層が黄褐色微砂を含む灰黄褐色微砂で締まりが強く、Ⅳ層上面で検出した遺構の埋土に類似するため、本遺構が新しいと判断した。

径 0.39 ｍで、検出面からの深さは 0.20 ｍである。平面形はほぼ円形、底面は平坦で、周壁は緩やかに立ち上がる。上記の遺構埋土下の２層は灰色微砂を含む灰黄褐色微砂層で、堆積状況から１層は柱抜取穴埋土、２層は柱掘方埋土と判断した。周囲には一定距離で並ぶ遺構は見られなかった。

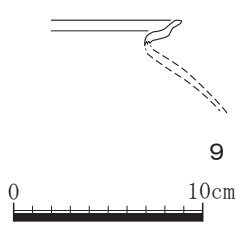
出土遺物は無く、本遺構の時期は不明である。

Ｐｉｔ 1881（第 21、32 図）

Ｈ２区東に位置する。Ⅵ層上面で検出した。SK432 と重複しており、本遺構が新しい。西側に SK433、東側に SK431、北側に Pit1814 が近接する。

径 0.43 ｍ、深さは 0.19 ｍである。平面形は東西に長い楕円形で、底面は緩やかに窪み、周壁も緩やかに立ち上がる。遺構埋土はにぶい黄色細砂混じり微砂の単層で、自然堆積層と判断した。

９はＳ字甕ＢＣ類の口縁部である。本遺構は古墳時代初頭以降に構築されたと考える。



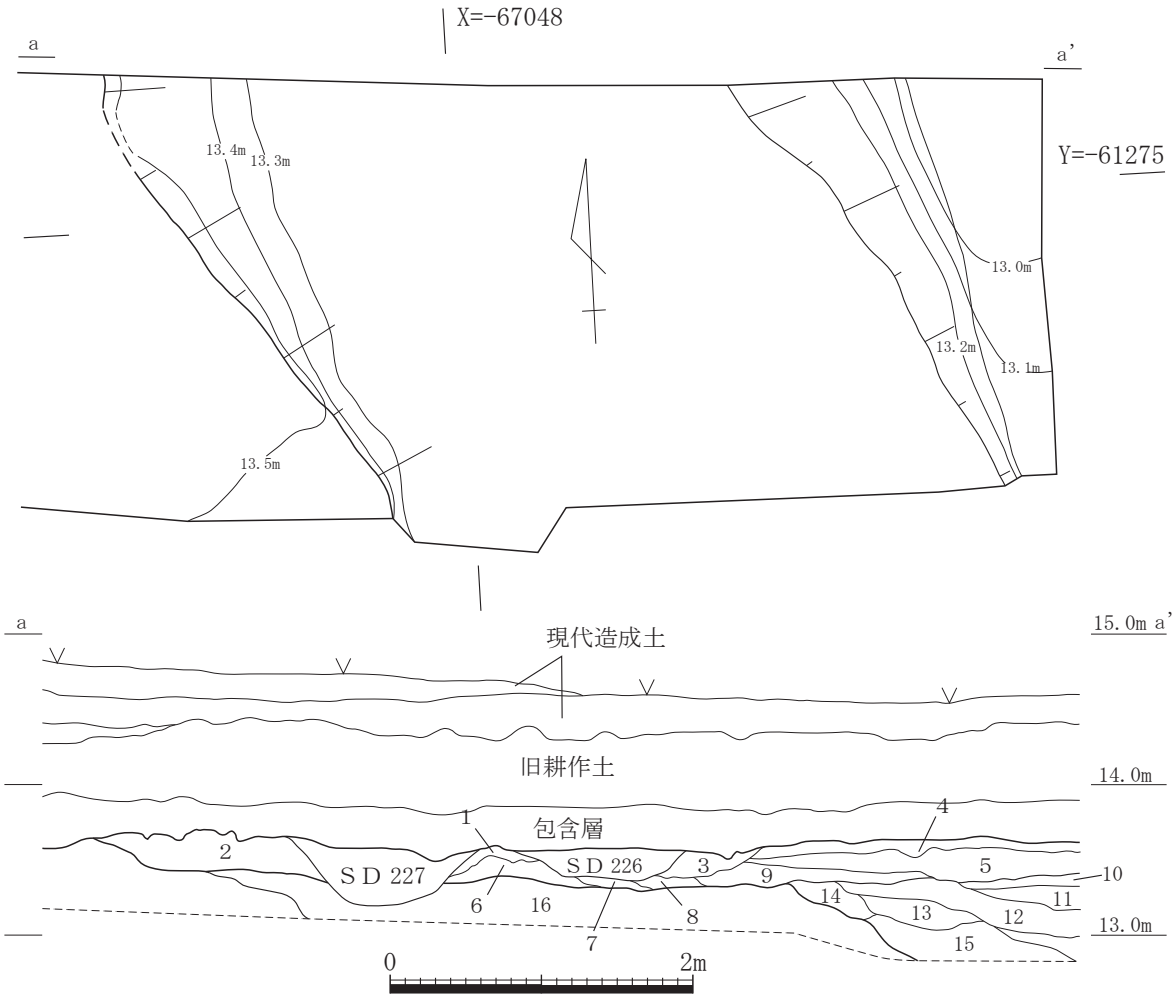
第 32 図　出土遺物（１/４）

第２節　Ｉ２調査区の遺構と遺物

１．概要　（第 36 図）

１～６層までは宅地に伴う造成土、旧耕作土と判断した。包含層には古墳時代前期～戦国期までの遺物が包含され、過去調査におけるⅢ層に対応する層位である。各時期の遺物が混じるため、撹拌しながら徐々に堆積したと思われる。１～15 層は過去調査のＶ層に対応する層と判断した。26 層は基本層序のⅥ層である。西から東へ少しずつ低くなり、調査区東端では大きく落ち込んでいることがわかった。

遺構は古墳～中世、戦国時代の各時期が断続的ではあるが確認できた。過去調査の遺構数推移に鑑み、古墳時代Ⅱ期、古代（Ⅲ～Ⅳ期）、中世から戦国時代（Ⅴ～Ⅵ期）の順に記述していく。検出した遺構別の数量については、第 36 図の表３の通りである。



〈自然流路あるいは落ち込み　Ｖ層〉

１．灰黄褐色 10 ＹＲ 5/2 砂質土	６．褐灰色 10 ＹＲ 4/1 砂質土	11. にぶい褐色 7.5 ＹＲ 5/3 細砂
２．灰黄褐色 10 ＹＲ 5/2 細砂	７．にぶい黄褐色 10 ＹＲ 5/3 粗砂	12. 明褐灰色 7.5 ＹＲ 7/1 細砂
３．灰黄褐色 7.5 ＹＲ 4/2 細砂	８．灰褐色 5 ＹＲ 6/2 砂質土	13. 灰褐色 7.5 ＹＲ 6/2 砂質土
４．灰黄褐色 10 ＹＲ 5/2 細砂	９．褐灰色 5 ＹＲ 5/1 砂質土	14. 褐灰色 7.5 ＹＲ 4/1 粗砂
５．にぶい黄褐色 10 ＹＲ 5/3 砂質土	10. にぶい黄褐色 10 ＹＲ 5/3 砂質土	15. 褐灰色 5 ＹＲ 4/1 砂質土
		16. にぶい黄褐色 10 ＹＲ 7/4 砂質土

第 33 図　自然流路あるいは落ち込み（１/50）

２．弥生時代後期～古墳時代前期（鷺山時期区分Ⅰ期～Ⅱ１期）

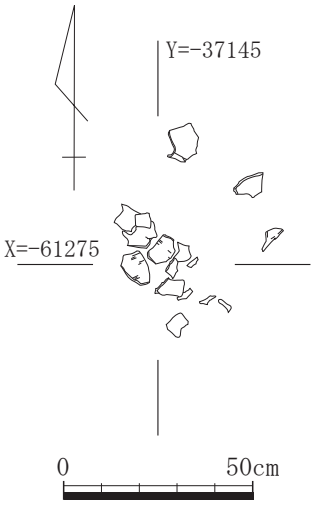
自然流路あるいは落ち込み（第 33 ～ 35 図）

調査区の東端で確認した。Ｈ 19 年度に調査したＳＤ 146 の西上端に相当すると考える。第 35 図、１～ 15 層は基本土層のⅤ層と対応する。埋土は粗砂から細砂である。Ｈ 19 年度のＩ３区の調査では溝の西側の斜面に流れによる浸食が観察できる。また、現地形や試掘調査の結果から、鷺山市場遺跡と鷺山仙道遺跡間には相対的な低地が入り込んでいた可能性が高いと考えられることからも、自然流路あるいは落ち込み状の自然地形であると判断した。

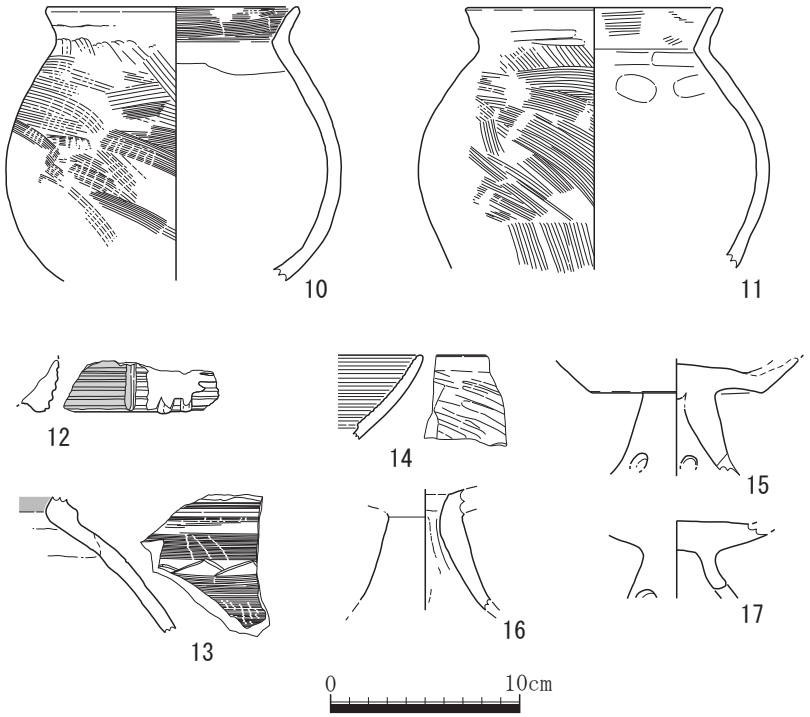
遺物は弥生土器、土師器片が多量に出土した。12 層を掘削中に土器がまとまって出土した（10、11）。他の土器類が散在して出土したのに対し、まとまりを持って出土したことから廃棄されたものとみられる。14 層中には遺物は含まれず、サブトレンチにおいてこれより下層で遺物の出土は確認できなかったこと、調査区壁面の崩落の危険があるため、最深部までの掘削は行わなかった。

出土遺物は土師器が主である。10、11 はくの字甕であり、外面はハケメにより調整している。脚台付きであったと推定できるが、脚部分は出土していない。12 はパレス壺の口縁部である。口縁部には凹線を施したのち、棒状付文を付している。口縁部外面には赤彩が確認できる。13 は壺の肩部であり鋸歯文を施す。頸部内面には赤彩が確認できる。14 ～ 17 は高杯である。14 は有段高杯で口縁部内面に多状沈線を施し、外面には磨きが施されている。15 は有稜高杯である。

遺物から弥生時代末～古墳時代初頭（Ⅰ～Ⅱ１期）頃には埋没していたと考える。



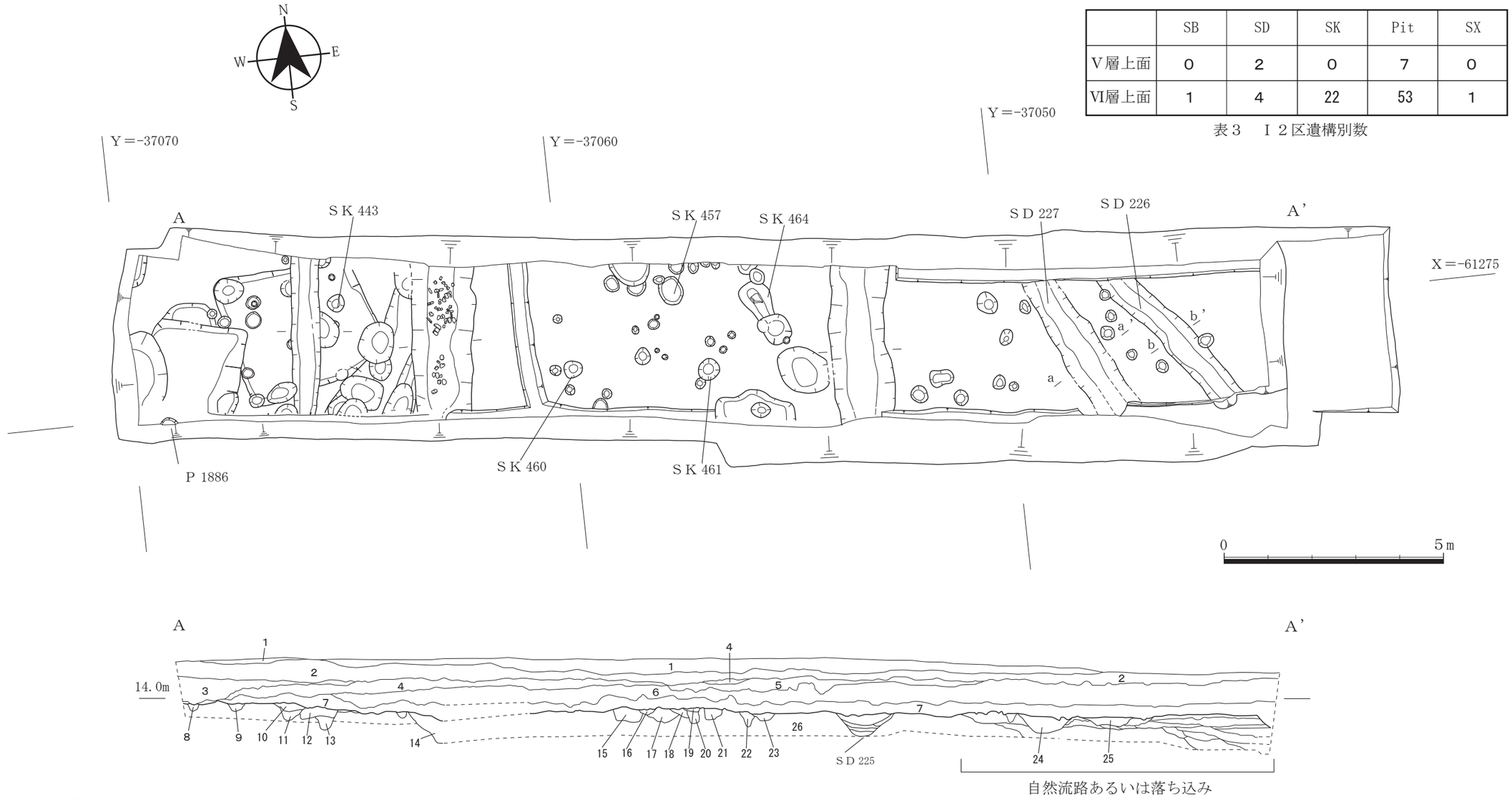
第 34 図　出土状況図（１/20）



第 35 図　自然流路あるいは落ち込み出土遺物（１/４）

	SB	SD	SK	Pit	SX
Ⅴ層上面	0	2	0	7	0
Ⅵ層上面	1	4	22	53	1

表３　Ｉ２区遺構別数



〈Ｉ２区北壁土層名〉

１．砕石　Ⅰ層
２．褐灰色 10 ＹＲ 5/1 砂質土（現代造成土）　Ⅰ層
３．灰色５Ｙ 6/1 細砂（現代造成土）　Ⅰ層
４．にぶい褐色 7.5 ＹＲ 5/3 細砂（旧耕作土）　Ⅰ層
５．にぶい褐色 7.5 ＹＲ 5/3 粗砂（旧耕作土）　Ⅰ層
６．にぶい褐色 7.5 ＹＲ 5/3 砂質土（旧耕作土）　Ⅰ層
７．褐灰色 10 ＹＲ 4/1 細砂（包含層）　Ⅱ層
８．褐灰色 10 ＹＲ 4/1 細砂（遺構埋土）
９．褐灰色 10 ＹＲ 4/1 砂質土（遺構埋土）
10. 褐灰色 7.5 ＹＲ 4/1 砂質土（ＳＤ 223 埋土）
11. 褐灰色 7.5 ＹＲ 5/1 砂質土（遺構埋土）
12. 灰褐色 7.5 ＹＲ 5/2 細砂　ややしまる（遺構埋土）
13. 褐灰色 7.5 ＹＲ 4/1 細砂（遺構埋土）
14. 壁面崩落箇所につき観察できなかった（ＳＤ 224 埋土）
15. 褐灰色 10 ＹＲ 4/1 細砂（遺構埋土）
16. 褐灰色 7.5 ＹＲ 4/1 砂質土（遺構埋土）
17. 褐灰色 7.5 ＹＲ 5/1 細砂（遺構埋土）
18. 褐灰色 10 ＹＲ 4/1 細砂（遺構埋土）
19. 灰黄褐色 10 ＹＲ 5/2 砂質土（遺構埋土）
20. 黒褐色 10 ＹＲ 3/1 砂質土（遺構埋土）
21. 褐灰色 10 ＹＲ 6/1 細砂（遺構埋土）
22. 灰褐色 7.5 ＹＲ 5/2（遺構埋土）
23. にぶい褐色 7.5 ＹＲ 5/3 細砂（遺構埋土）
24. 暗黄灰色 2.5 Ｙ 4/2 細砂（ＳＤ 227 埋土）
25. 黄灰色 2.5 Ｙ 6/1 砂質土（ＳＤ 226 埋土）
26. 褐灰色５ＹＲ 5/1 砂質土　（基礎層）Ⅵ層

第 36 図　Ｉ２区遺構配置図（１／ 100）

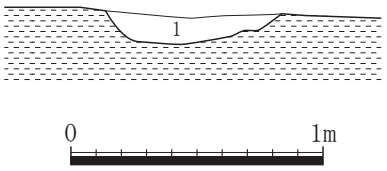
溝（ＳＤ）

ＳＤ 226（第 36、37 図）

調査区東端で埋没後の自然流路あるいは落ち込みの上面で検出した。北西から南東方向へ延びる。幅は 0.73 ｍ、深さは検出面から 0.12 ｍを測る。断面形は皿状を呈しており、東側は緩やかに立ち上がる。

遺物は土師器片が出土したが、図示は出来なかった。

本遺構は出土した遺物から、古墳時代前期頃には埋没していたと考える。



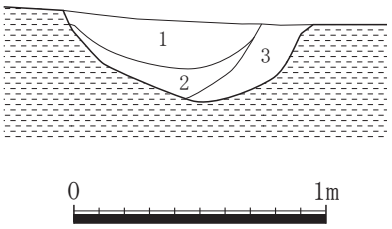
〈ＳＤ 226 土層名〉
1．黄灰色 2.5 Ｙ 6/1 砂質土

第 37 図　ＳＤ 226 断面図（1/30）

ＳＤ 227（第 36、38、39 図）

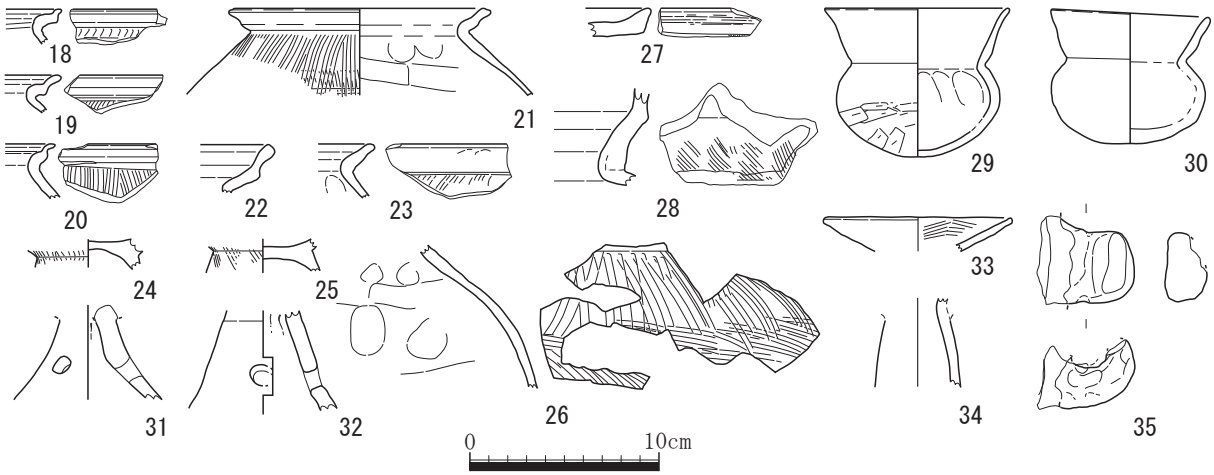
埋没後の自然流路あるいは落ち込みの上面で検出した。ＳＤ 226 と並行するように延びる。幅は 0.98 ｍ、深さは検出面から 0.33 ｍを測る。断面形はＵ字形を呈する。埋土からプラントオパールが確認された（詳細は第５章参照）。

遺物は土師器が出土している。18 ～ 25 はＳ字甕である。18 はＳ字甕Ａ類で、19・20 はＢＣ類、21 ～ 23 はＤ類とみられる。24・25 は脚台部である。26 は体部で肩部とみられ、ハケメ調整を施す。27 は壺の口縁部、28 は壺で頸部から口縁部かけての破片と考える。29・30 は小型丸底壺で、29 の外面底部はヘラ削りを行ったのち、なで調整を施している。体部内面にはなで上げが確認できる。31・32・34 は高杯の脚柱部である。33 は器台の坏部とみられる。35 は甑あるいは鍋の把手とみられる。遺物から古墳時代前期末（Ⅱ１期）頃には埋没したと考える。

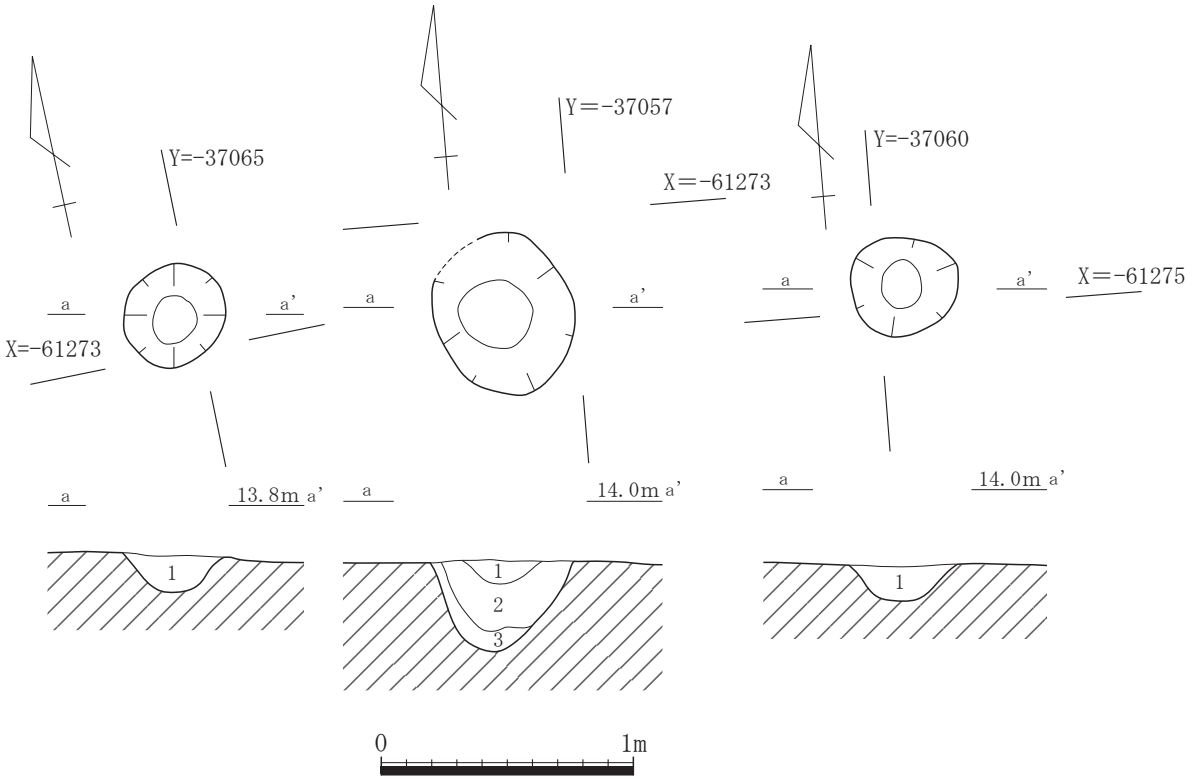


〈ＳＤ 227 土層名〉
1．黄灰色 2.5 Ｙ 5/1 粗砂
2．暗灰黄色 2.5 Ｙ 4/2 細砂
3．にぶい黄褐色 10 ＹＲ 5/2 砂質土

第 38 図　ＳＤ 227 断面図（1/30）



第 39 図　ＳＤ 227 出土遺物（1/4）



〈ＳＫ 443 土層名〉
1．黄灰色 10ＹＲ 4/1 細砂

〈ＳＫ 457 土層名〉
1．暗灰黄色 10ＹＲ 4/2 砂質土
2．黒褐色 10ＹＲ 3/2 粘土
3．灰黄色 10ＹＲ 5/2 細砂混じり微砂

〈ＳＫ 460 土層名〉
1．褐灰色 10ＹＲ 5/1 砂質土

第 40 図　ＳＫ 443、457、460 実測図（1/30）

土坑（ＳＫ）

ＳＫ 443（第 40 図）

調査区西側で確認した。平面形は楕円形を呈しており、長軸は 0.42 ｍ、短軸 0.4 ｍ、深さは検出面から 0.14 ｍを測る。断面形は椀形である。

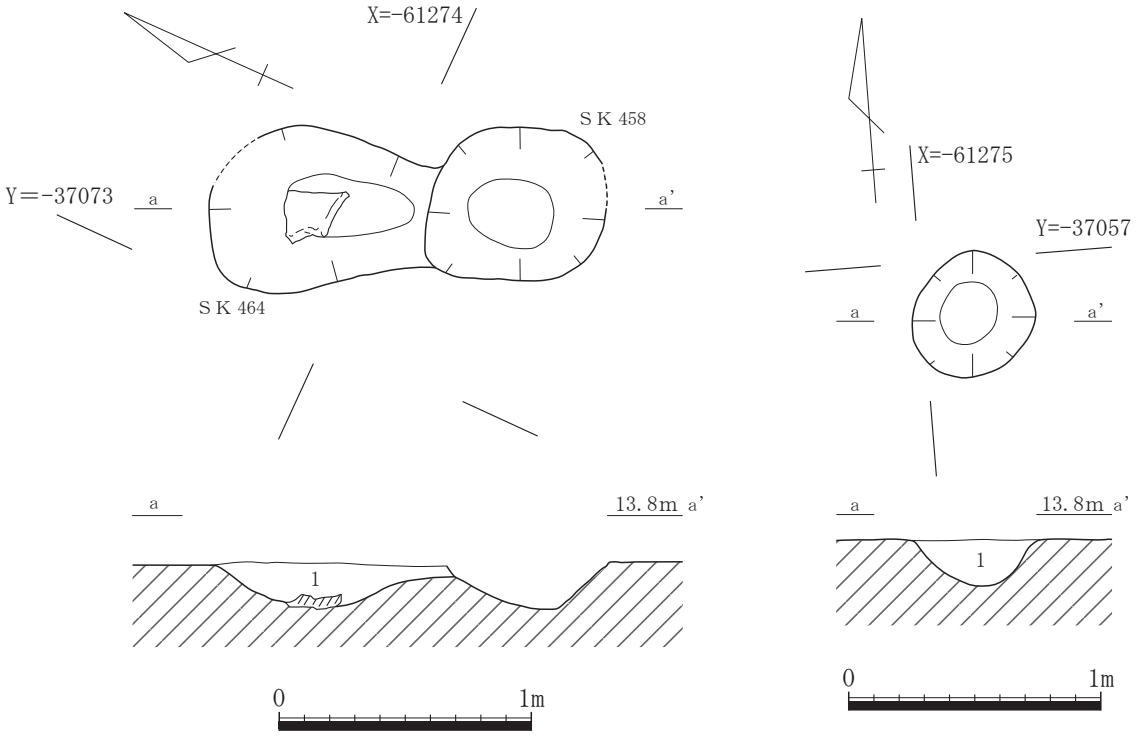
出土遺物は土師器が出土したが、いずれも小片で図示できなかった。本遺構は土師器のみが出土していることから、古墳時代（Ⅱ期）以降と考えておきたい。

ＳＫ 457（第 40 図）

調査区の中央付近で確認した。P1883 に切られている。平面形はやや南北に長い楕円形を呈しており、長軸は 0.66 ｍ、短軸 0.55 ｍ、深さは検出面から 0.36 ｍを測る。断面形はＵ字形をしている。出土遺物は土師器が出土したが、いずれも小片で時期比定、図示はできなかった。本遺構は土師器のみ出土していることから、古墳時代（Ⅱ期）以降としておく。

ＳＫ 460（第 40 図）

調査区中央付近で確認した。P1850 を切っている。平面形は楕円形を呈している。規模は長軸が 0.44 ｍ、短軸は 0.4 ｍ、深さは検出面から 0.14 ｍを測る。断面形は椀形である。出土遺物は土師器が出土したが、いずれも小片で図示できなかった。本遺構は土師器のみが出土していることから、古墳時代（Ⅱ期）以降と考えておきたい。



〈SK 464 土層名〉
1．灰黄褐色 10 YR 4/2 細砂

〈SK 461 土層名〉
1．暗灰黄色 2.5 Y 5/2 砂質土

第 41 図　SK 461、464 実測図（1/30）

SK 461（第 41 図）

調査区中央付近で確認した。P1850 を切っている。平面形は楕円形を呈している。規模は長軸が 0.51 m、短軸は 0.48 m、深さは検出面から 0.19 mを測る。断面形は椀形である。遺物は土師器が出土したが、いずれも小片で図示できなかった。本遺構は土師器のみが出土していることから、古墳時代（Ⅱ期）以降と考えておきたい。

SK 464（第 41 図）

調査区中央付近で確認した。SK458、P1882 に切られている。平面形は南北に長い楕円形と推定されるが、切り合いのため詳細は不明である。残存規模は長軸が 0.87 m、深さは検出面から 0.17 mを測る。底面で角礫が出土した。据えられた痕跡はなく、使用痕も確認できなかったため、何らかの理由で投棄されたと考える。

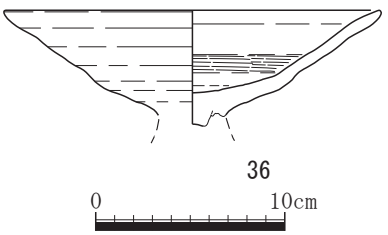
遺物は土師器が出土したが、いずれも小片で図示できなかった。本遺構は土師器のみが出土していることから、古墳時代（Ⅱ期）以降と考えておきたい。

柱穴（Ｐｉｔ）

P 1886（第 36、42 図）

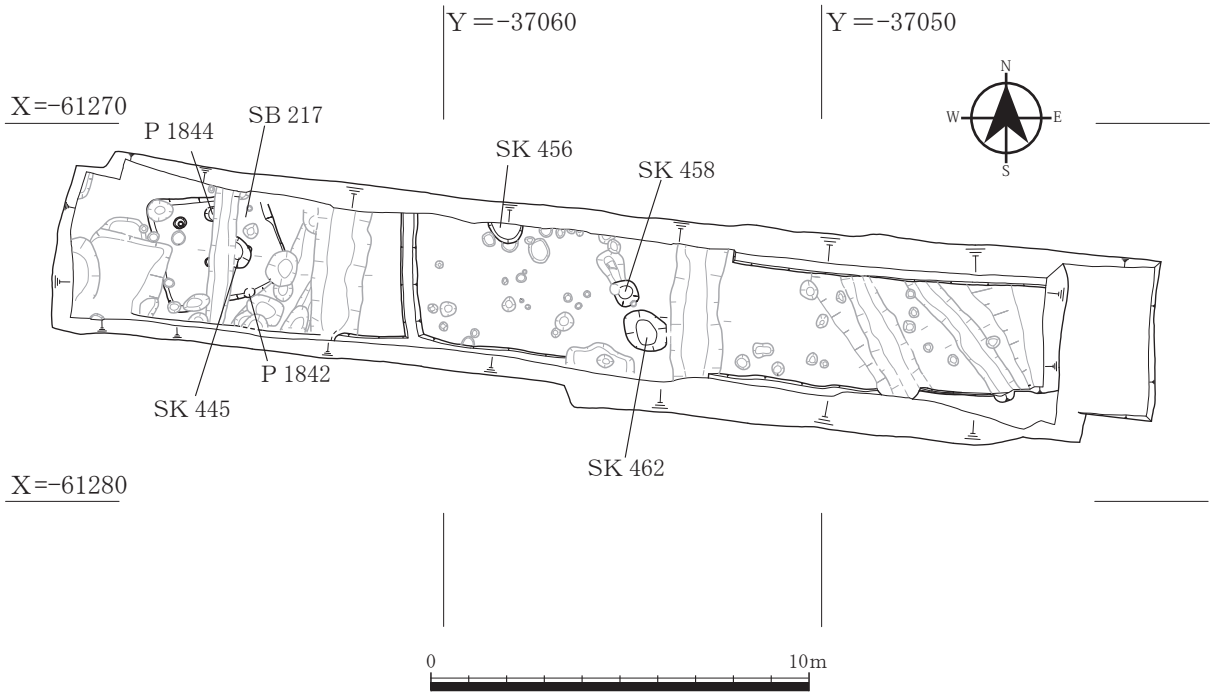
調査区の南西端で確認した。不明確ではあるが円形を呈する。規模は径 0.31 m、深さは確認面から 0.12 mを測った。

埋土から 36 が正位置で出土した。36 は高杯の坏部である。磨滅が著しく詳細な調整は分からなかった。高杯から本遺構の時期はⅡ 1 期（古墳時代前期）頃と考える。

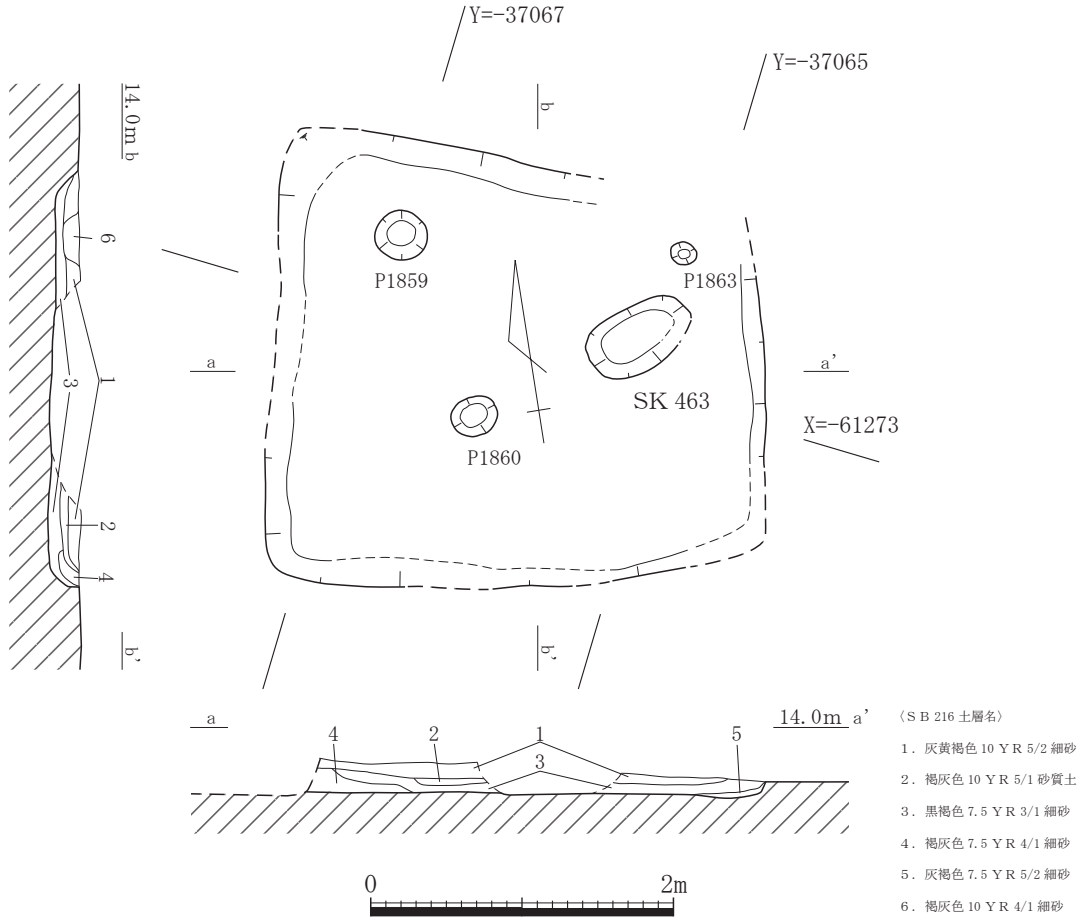


第42図　P 1886出土遺物（1/4）

3．古代（鷺山編年Ⅲ、Ⅳ期）



第 43 図　Ｉ２区古代（Ⅲ、Ⅳ期）遺構配置図（１/200）



第 44 図　S B 216 実測図（１/50）

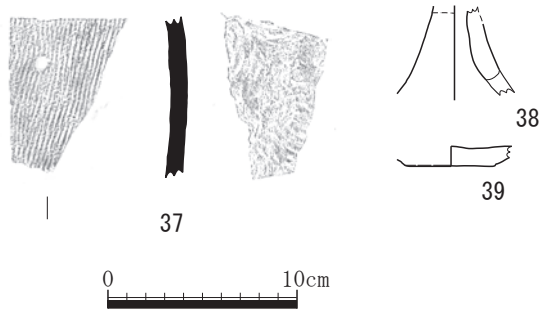
竪穴住居・掘立柱建物・竪穴状遺構（ＳＢ）

ＳＢ 216（第 44、45 図）

調査区西で確認した。SD223、228、SK445、450 等に切られる。隅丸方形を呈し、規模は長軸 3.25 ｍ、短軸 2.8 ｍで、検出面から深さ 0.2 ｍを測る。周壁溝、貼り床や硬化した箇所は確認できない。埋土は炭化物を含んでいたが、炉あるいはカマドといった施設は確認できなかった。床面を精査した結果、P1859、1860、P1863、SK463 を確認した。

遺物は須恵器、土師器類が出土した。**37** は須恵器の体部で平行目のタタキ痕、内面には同心円の当て具痕が残る。**38** は土師器の高杯脚部で円形の透かしがある。**39** は回転台土師器の底部である。

明確な時期は不明であるが、P1842 の切り合い関係と、須恵器の出土から古墳時代後期～古代（Ⅲ１期）頃と考える。



第 45 図　ＳＢ 216 出土遺物（１/ ４）

土坑（ＳＫ）

ＳＫ 445（第 46 図）

調査区西で確認した。本来であればSD223 に切られて確認できるが、検出段階で切り合い関係を誤認して検出した。このため、両遺構で若干遺物が混合した可能性がある。

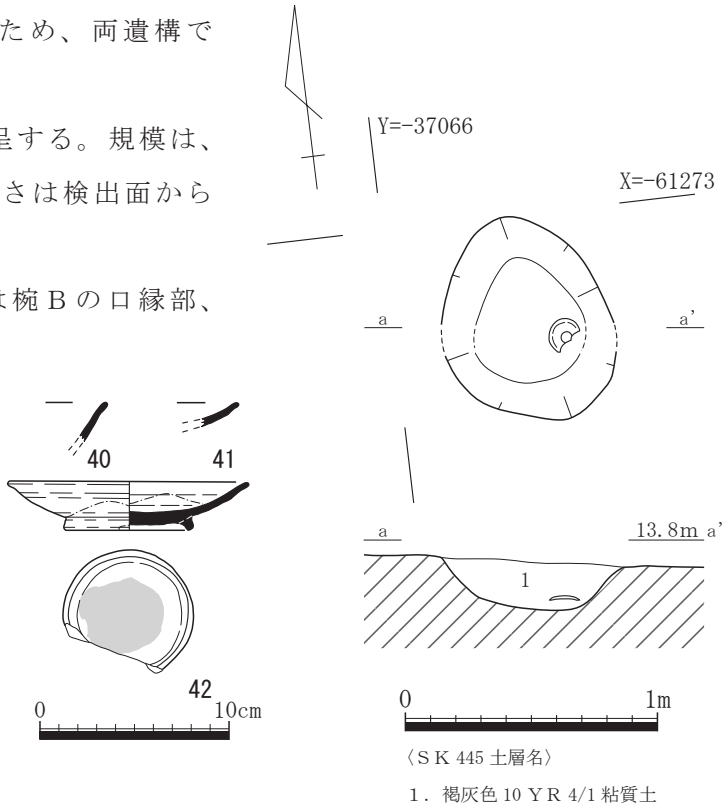
平面形は南北に長い長楕円形を呈する。規模は、長軸で 0.85 ｍ、短軸で 0.66 ｍ、深さは検出面から 0.19 ｍを測る。

40 ～ **42** は灰釉陶器である。**40** は椀Ｂの口縁部、**41・42** は皿である。**42** の底部には赤色顔料が確認され、分析の結果ベンガラと判断される（第５章第２節参照）。

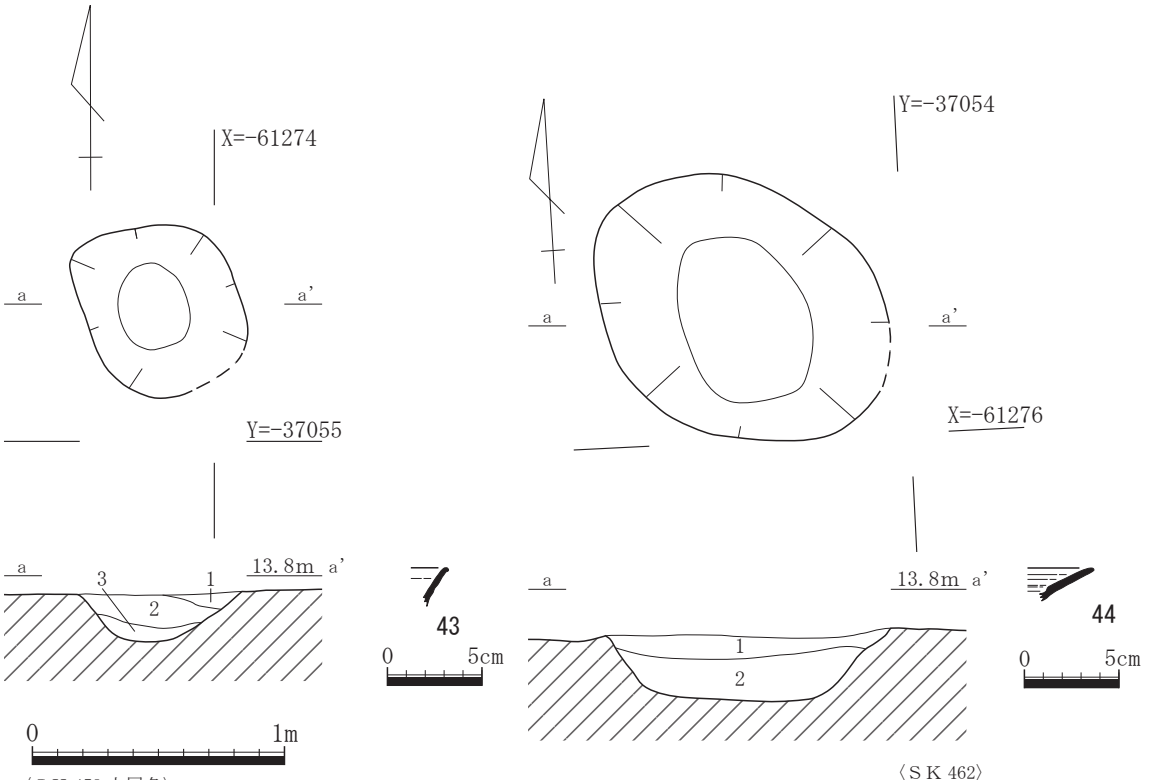
本遺構の時期は灰釉陶器から平安時代中（Ⅳ１期）頃と考える。

ＳＫ 458（第 47 図）

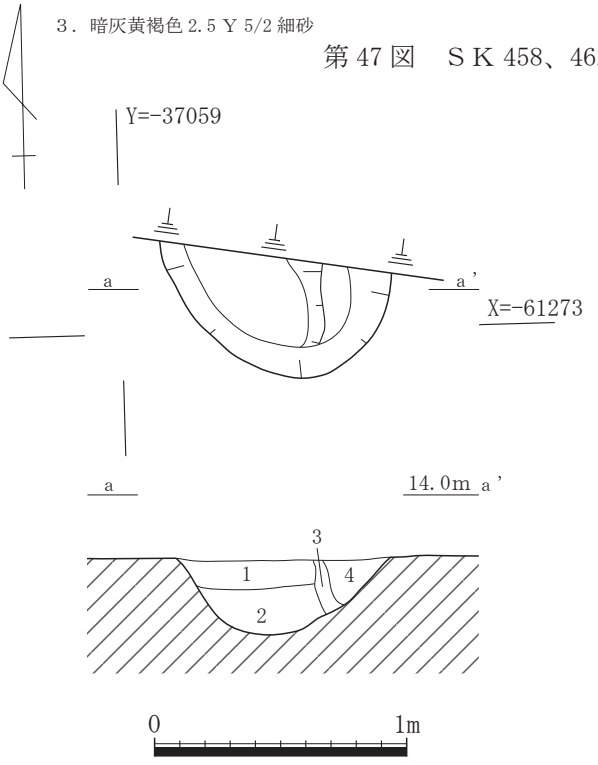
調査区中央に位置し、SK464 を切って確認した。平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸 0.78 ｍ、



第 46 図　ＳＫ 451 実測図（１/30）、出土遺物（１/ ４）



第 47 図　SK 458、462 実測図（1/30）、出土遺物（1/4）



第 48 図　SK 456 実測図（1/30）

短軸 0.66 m、深さは 0.19 m を測る。断面形は半円形を呈する。

43 は灰釉陶器の椀Aである。本遺構は平安時代中（Ⅳ 1 期）頃と考える。

SK 456（第 48 図）

調査区中央北壁際で確認した。P1884 を切っている。平面形は北側が調査区外となるが、楕円形を呈したと推定する。残存規模は長軸で 0.94 m、深さは検出面から 0.3 m を測る。椀状の断面形で埋土は全 4 層確認した。

遺物は山茶碗、灰釉陶器、須恵器、土師器類、土師器皿類が出土した。いずれも小破片で時期比定には至らなかったが、須恵器と灰釉陶器が一定量確認できるため、古代前半（Ⅲ～Ⅳ 1 期）頃としておきたい。

ＳＫ 462（第 47 図）

調査区中央で確認した。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸 1.3 ｍ、短軸 0.98 ｍ、深さは検出面から 0.26 ｍを測る。

44 は灰釉陶器の段皿の口縁部である。本遺構は平安時代中（Ⅳ 1 期）頃と考える。

柱穴（Ｐｉｔ）

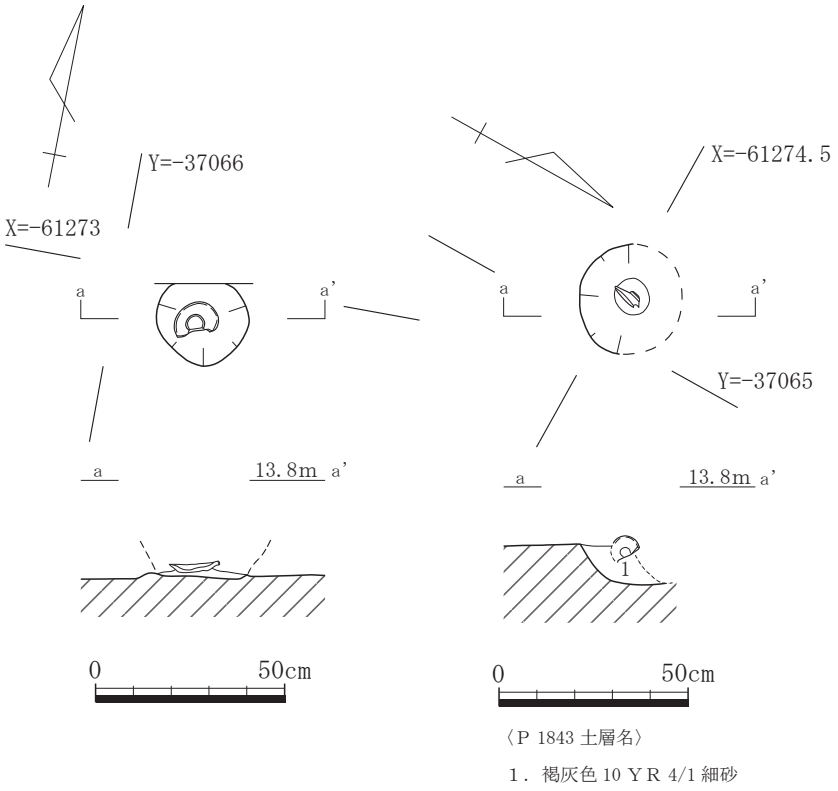
Ｐ 1842（第 49、51 図）

調査区西で、ＳＢ 216 を切って確認した。平面形は円形を呈し、径 0.12 ｍ、深さは検出面から 0.09 ｍを測る。埋土から灰釉陶器の皿が出土した。

45 は灰釉陶器皿である。時期はⅦ期中～新段階とみられる。

Ｐ 1843（第 49、51 図）

調査区西でＳＢ 216 の床面付近で確認した。**46** は灰釉陶器皿である。遺物について上部には SK445 が存在しており、SK455 の埋土を若干残してＳＢ 216 を掘削した可能性がある。**46** の時期はⅦ期古～中段階とみられる。

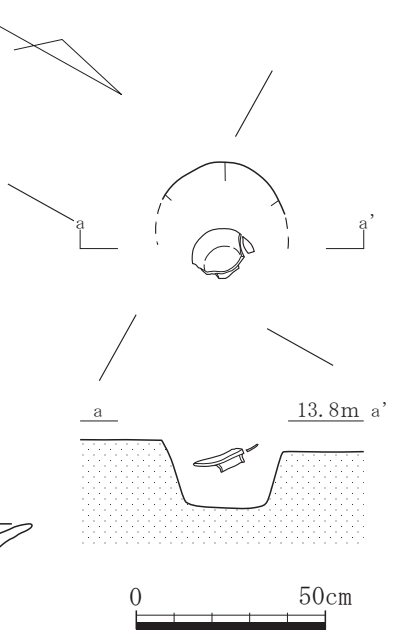


第 49 図　Ｐ 1842、1843 実測図（1 /20）

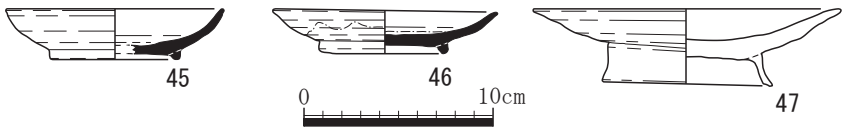
Ｐ 1844（第 50、51 図）

調査区西で確認した。SD223 に切られ、ＳＢ 216 を切っている。平面形は円形を呈する。規模は径 0.33 ｍ、深さは検出面から 0.18 ｍを測る。

47 は脚高の高台を有する皿であり、轆轤によって成形されている。詳細な時期は不明であるが 10 世紀後葉～11 世紀中葉頃と考える。

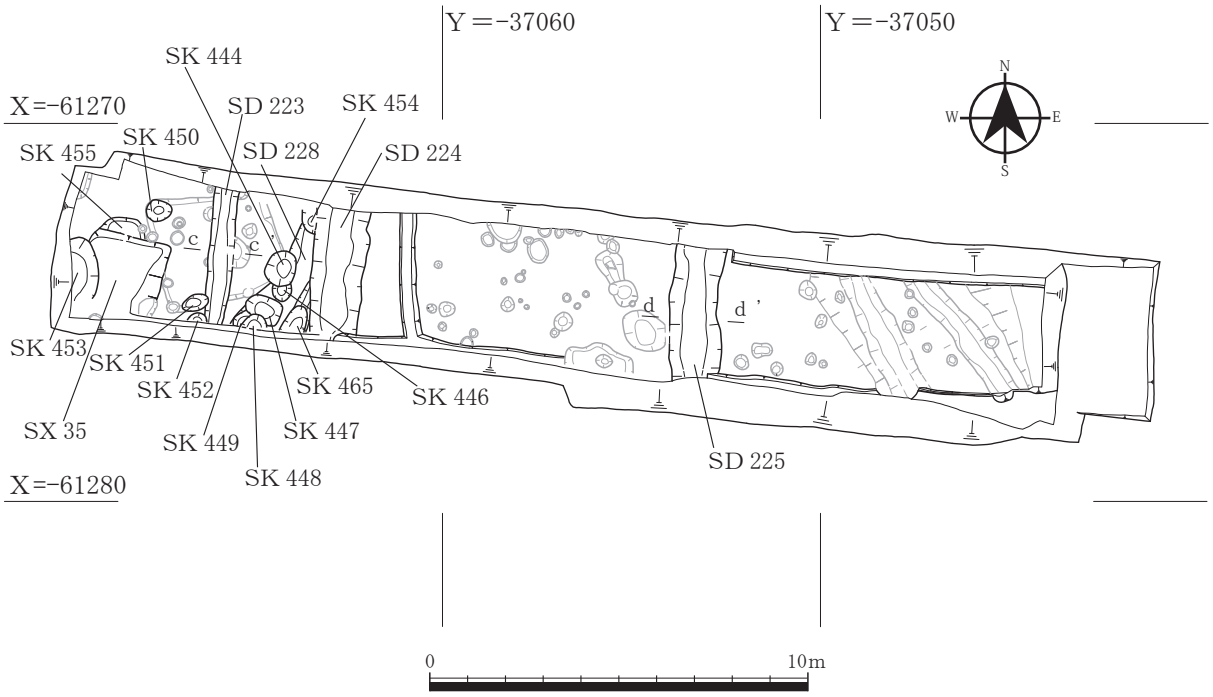


第 50 図　Ｐ 1844 実測図（1 /20）



第 51 図　Ｐ 1842、1843、1844 出土遺物（1 / 4）

4．中世～戦国（鷺山時期区分Ⅴ、Ⅵ期　13 世紀前葉～ 16 世紀前葉）



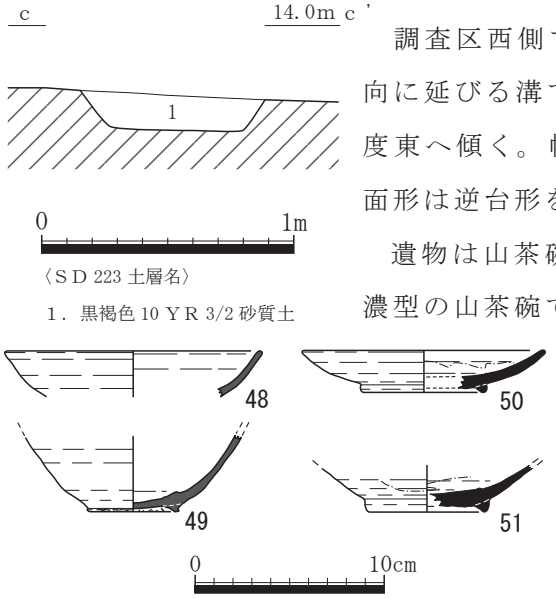
第 52 図　Ｉ２区中世～戦国時代（Ⅴ、Ⅵ期）遺構配置図（１/200）

溝（ＳＤ）

ＳＤ 223（第 53 図）

調査区西側で確認した。SB216、SK445 を切っている。南北方向に延びる溝で、調査区とほぼ直交する。北から 5°～ 10°程度東へ傾く。幅 0.16 ｍ、深さは検出面から 0.14 ｍを測る。断面形は逆台形を呈する。

遺物は山茶碗、灰釉陶器、土師器類が出土した。48、49 は東濃型の山茶碗である。48 は大洞東、49 は大畑大洞４号窯式である。50、51 は灰釉陶器である。50 は皿で、51 は深椀とみられる。時期はⅦ期中～新段階頃である。周辺には埋土の近似した遺構もあり、掘削段階で確認しきれなかった灰釉期の遺構が存在した可能性がある。よって、ここでは山茶碗の時期とし、Ⅴ１～２期頃と考える。



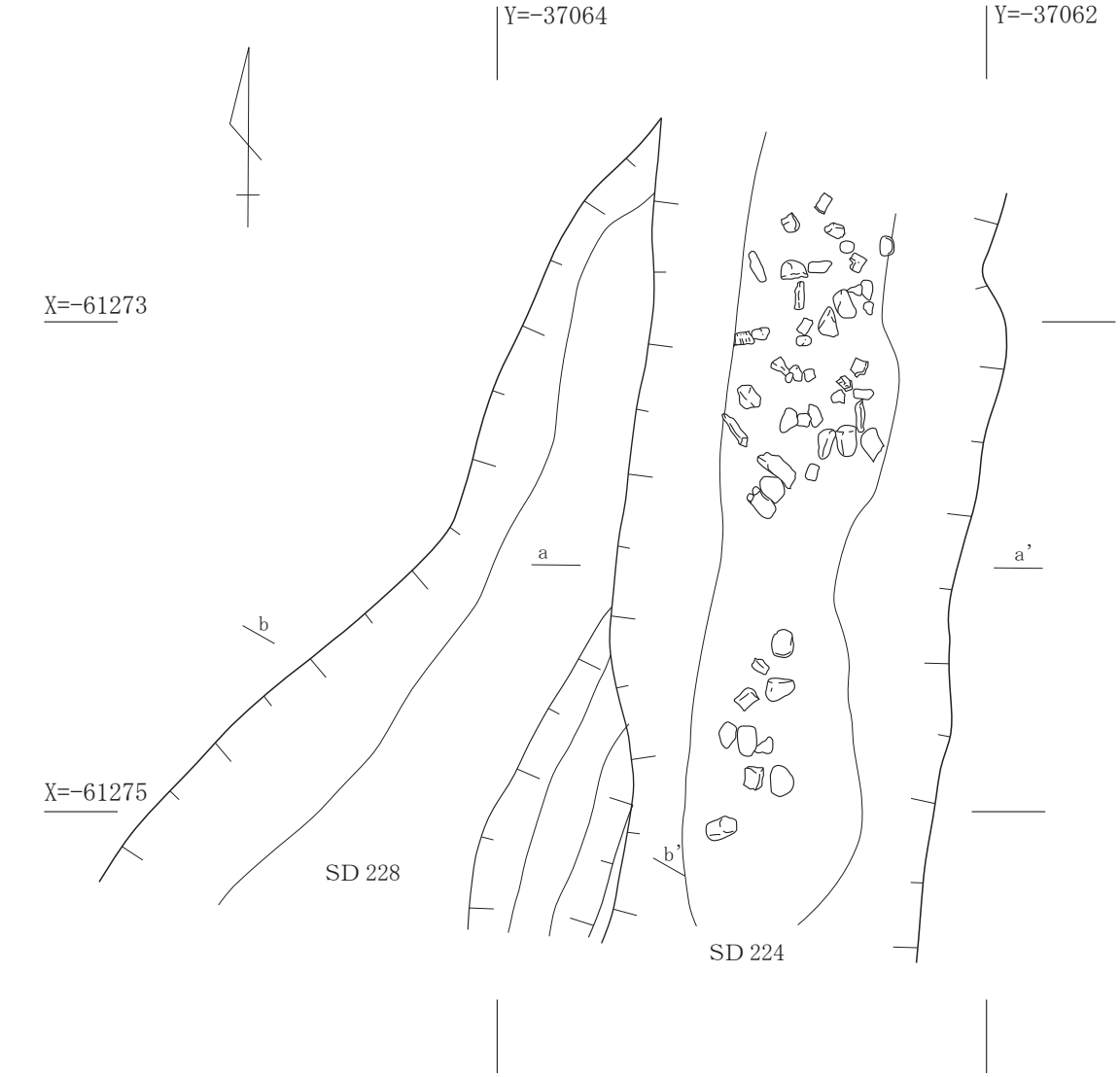
第 53 図　ＳＤ 223 断面図(１/30)出土遺物(１/４)

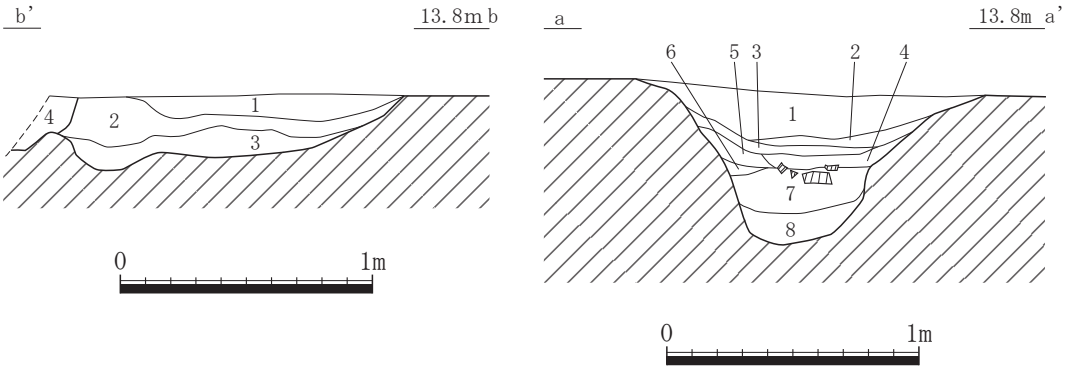
ＳＤ 224 とＳＤ 228 について

SD224 と SD228 では切り合い関係にあり、発掘調査段階では SD228 が古く SD224 が新しいと認識していた。しかし、遺物整理の際 SD224 の土器様相は SD228 よりも古い様相であることがわかり、両遺構の切り合いに矛盾が生じた。そこで、遺構と遺物と再検討した結果、SD224 と SD228 では（重複して）機能していたと考えた。

ＳＤ 224（第 54、55 図）

調査区の中央で確認した。南北方向に延びる溝で、調査区とほぼ直交しており、北から





〈ＳＤ 228 土層名〉

1．古褐色 10ＹＲ 3/1 細砂（ややしまる）
2．褐灰色 10ＹＲ 4/1 細砂（しまりない）
3．黒褐色砂質土 10ＹＲ 4/1 砂質土
4．黄灰色 2.5Ｙ 4/1 砂質土　　－ＳＤ 224 埋土

〈ＳＤ 224 土層名〉

1．褐灰色 10ＹＲ 4/1 砂質土(Ｍｎ沈着あり)
2．灰黄褐色 2.5Ｙ 6/2 砂質土(Ｍｎ沈着あり)
3．暗灰黄色 2.5Ｙ粗砂
4．黄灰色 2.5Ｙ 4/1 粗砂
5．暗灰黄色 2.5Ｙ 4/2 粗砂
6．灰色 5Ｙ 5/1 粗砂
7．青灰色 10ＢＧ 5/1 微細砂
8．暗青灰色 10ＢＧ 4/1 シルト

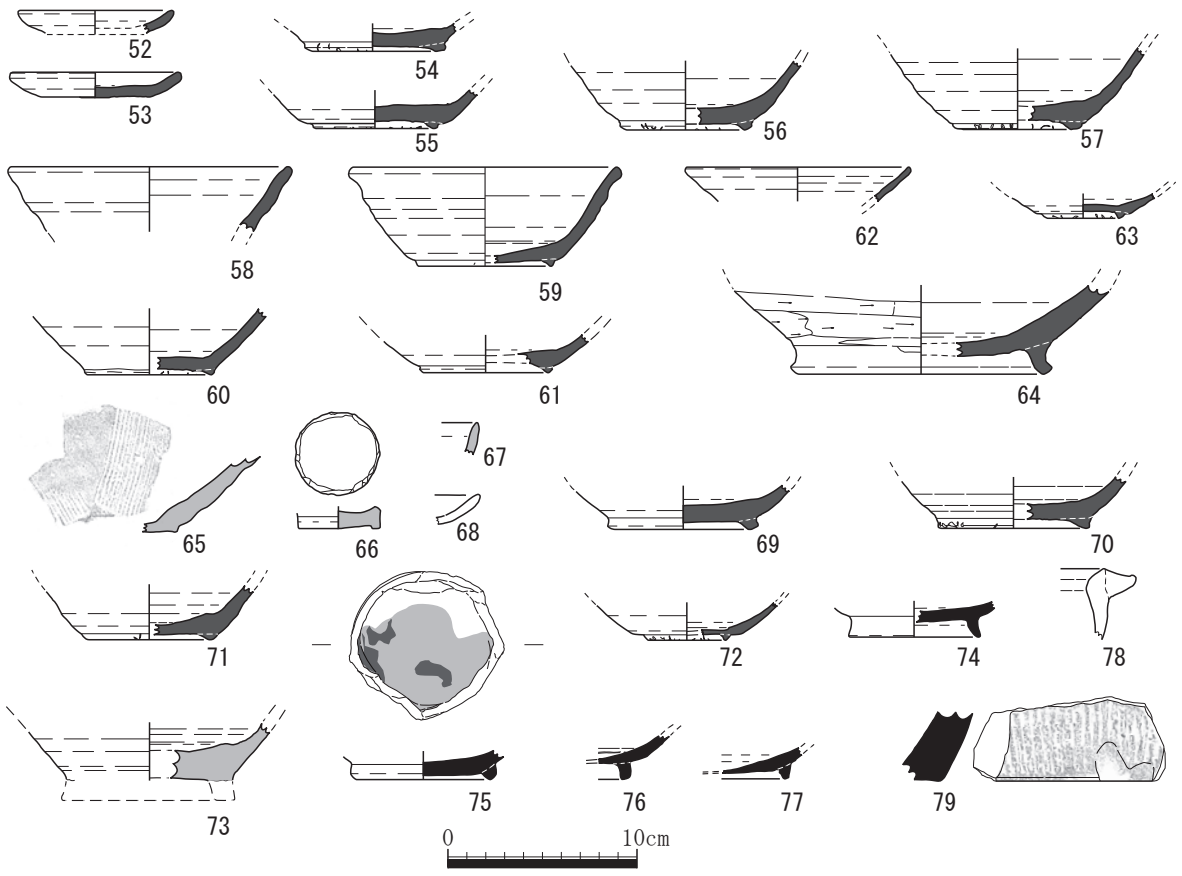
第 54 図　ＳＤ 224・228 実測図（1/30）

5°～10°程度東へ傾く。幅は1.2ｍ、深さは検出面から0.6ｍを測る。断面形はＶ字形をしている。埋土は大きく上下層に分けられる。上層（1層～6層）は茶褐色系の粗砂から砂質土であり、下層（7､8層）は還元作用を受けて青灰色をした極細砂から細砂である。7層上面には拳大程度の礫が集中して出土した。

52～68は上層から出土した遺物である。52～64は山茶碗で52～61は尾張型、62、63は東濃型である。52、53は皿で第6型式、56～61は碗で第6型式である。62、63は大洞東1号窯式である。64は片口鉢とみられる。65～67は瀬戸美濃産陶器である。65は後Ⅳ期新段階の擂鉢の底部である。66は大窯第1段階の天目茶碗である。67は小破片であるため詳細は不明であった。68は土師器皿でＣ2類とみられる

69～79は下層から出土した。69～70は尾張型の山茶碗で、69、70は第5型式、71は第6型式である。72は東濃型山茶碗で大畑大洞新である。73は古瀬戸後期段階の花瓶である。高台が付されていたようだが､欠損している。74～77は灰釉陶器の高台部分である。74の内面には墨が付着しており､転用されたものと考える。時期はⅦ期古～新段階であり、混入品と推定される。78は清郷型鍋の口縁部である。79は外面を平行目のタタキ調整を行っている。焼成はあまり良くなく、軟質な須恵器のようにみえる。

出土遺物から鎌倉時代（Ｖ1期）には開溝しており、最終的な埋没は戦国時代（Ⅵ期）と考えた。

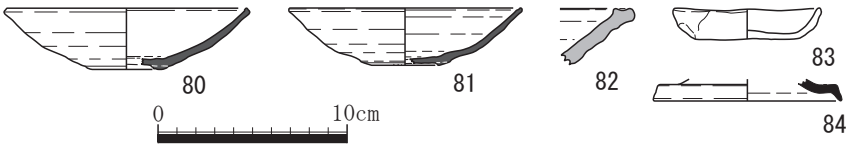


第55図　ＳＤ224出土遺物（1/4）

ＳＤ 228（第 54、56 図）

調査区の中央に位置し、SD224 に切られて検出した。北東から南東方向に延びる溝で、北から 35° ～ 40° 程度東に傾いている。残存幅は 1.4 ｍ、検出面から深さ 0.3 ｍを測る。断面形は椀状に緩やかに低くなり、最深部は一段低くなる。埋土は 1 ～ 3 層が SD228 で 4 層は SD224 と判断した。

遺物は山茶碗、瀬戸美濃産陶器、土師器類が出土した。**80、81** は東濃型大洞東 1 号窯式期の碗である。**82** は古瀬戸後Ⅳ古段階の卸目付大皿である。**83** は土師器皿のＣ１類である。**84** は須恵器小型高杯の脚部であり、混入したものと推定する。出土遺物から室町時代（Ｖ２期）頃には開溝していたと考える。



第 56 図　ＳＤ 228 出土遺物（1/4）

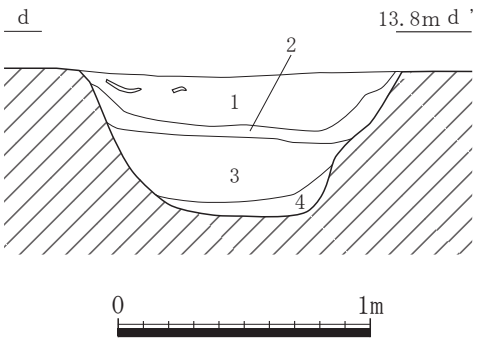
SD224 の下層出土山茶碗は SD228 に先行する型式がみられ、山茶碗の破片総数も南部系の方がやや多い。上層出土遺物も SD228 に先行あるいは併存する時期のものである。その中でも、**65 ～ 67** の瀬戸美濃産陶器は SD224 の中では新しく、SD228 より後出するものである。

したがって、溝の流れは SD224 古→ SD228 → SD224 新と 3 段階あったと思われる。

ＳＤ 225（第 57 ～ 60 図）

調査区中央やや東で確認した。南北に延びる溝で調査区とほぼ直交するように検出した。溝は北から 5° ～ 10° 程度東傾いている。幅は 1.35 ｍ、深さは検出面から 0.6 ｍを測る。断面形は逆台形で、東側は２段掘りを呈する。埋土は 4 層確認でき、1、2 層を上層、3、4 層を下層として掘削した。

上層（１層）からは完形に近い土師器皿が多量に出土し、一括で廃棄されたと思われる。断面観察用のアゼを中心に南北とすると、土師器皿は南側にやや多かった。一箇所に同一法量のものが集中して廃棄された状況ではなく、法量の異なる土師器皿が混在して出土した。

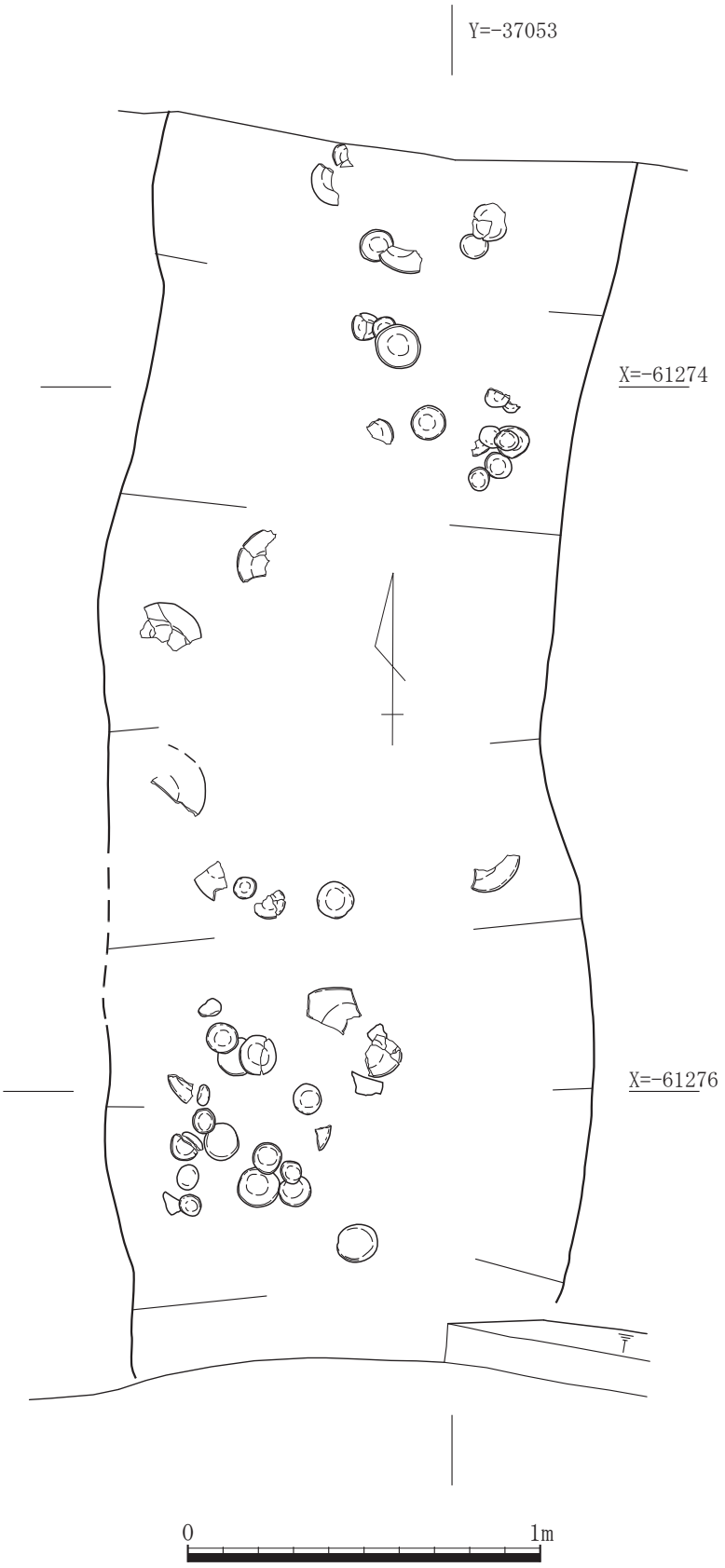


〈ＳＤ 225 土層名〉
1．褐灰色 10ＹＲ 4/1 砂質土
2．黄灰色 2.5Ｙ 4/1 砂質土
3．灰色 7.5Ｙ 6/1 細砂
4．灰白色 5Ｙ 7/1 砂質土

第 57 図　ＳＤ 225 断面図（1/30）

遺物は **85** ～ **151** までが上層、**152** ～ **159** までが下層から出土した。**85** ～ **147** は土師器皿である。**85** ～ **106** はＣ２類である。**107** ～ **132** までは土師器皿Ｂ２－ｂ類である。**107** ～ **120** までは比較的口径が小さい。**108** ～ **113** の口縁部には煤が付着しており、灯明皿として使用されたと思われる。**121** ～ **128** までは中法量、**129** ～ **132** は大法量である。

土師器皿の内面の部分にはなで調整が観察できるものがあった。見込み部分から「の」



第58図　ＳＤ225出土状況図（1/20）

の字状になでたのち、口縁部内面付近をなでている。軟質であり磨滅していることがあるため、一概には言及できないが、小法量については「の」の字状のなで１回で、やや大きくなると分割して、内面底部から「の」の字状になで上げた後に、口縁部内面を横なでする、２段階に分けてなでを施している。

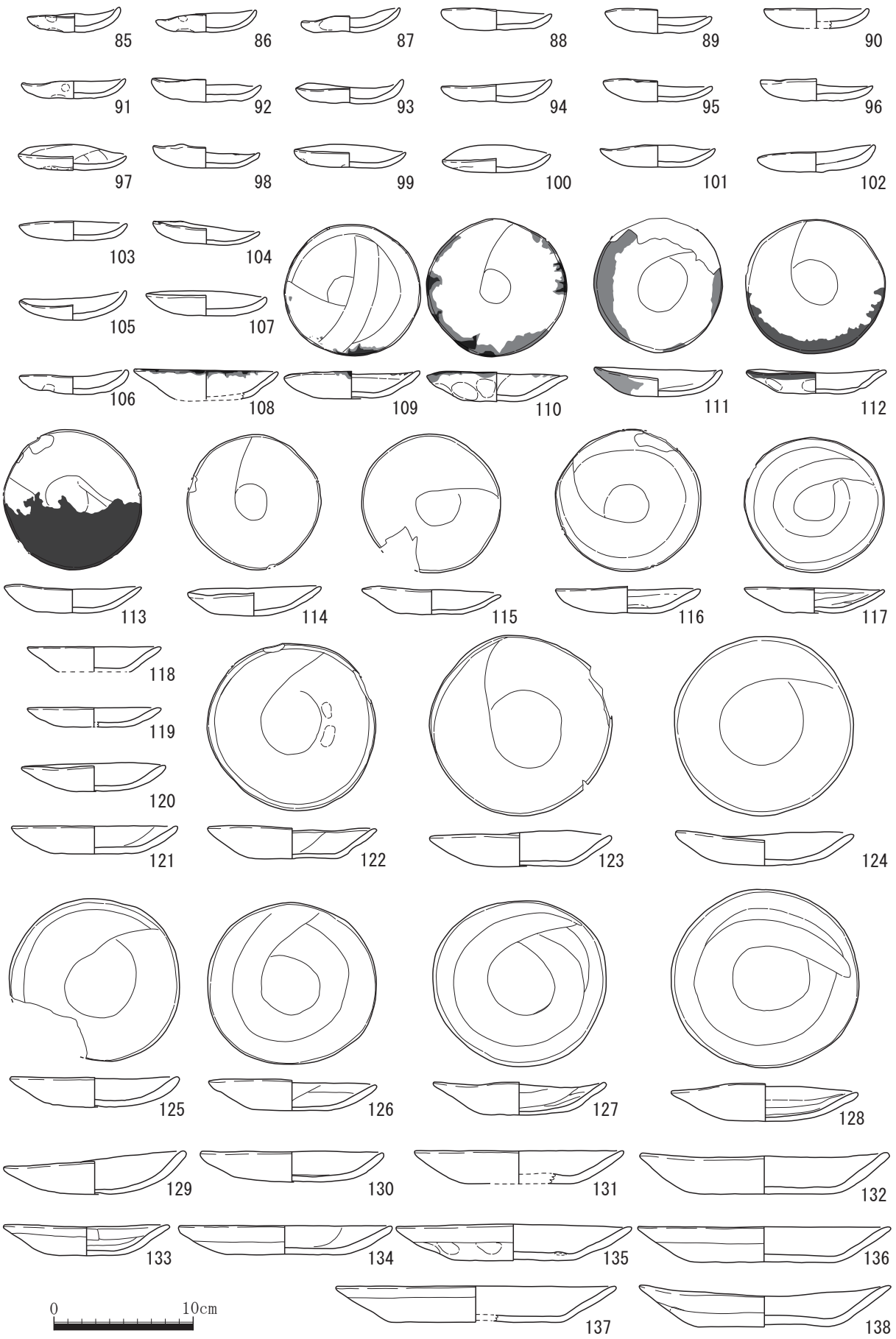
133～144はＢ２－ａ類である。口縁部になでを施し、丁寧なつくりのものが多い。先ほどの内面調整方法に着目すると、140、142のように横なでを一周させ、口縁部はもう一度横なでを施した２段階ものがある。

144、145については内面にタールが付着している。144は自然科学分析結果により、炭化物に違いが認められた（詳細は第５章第３節参照）。

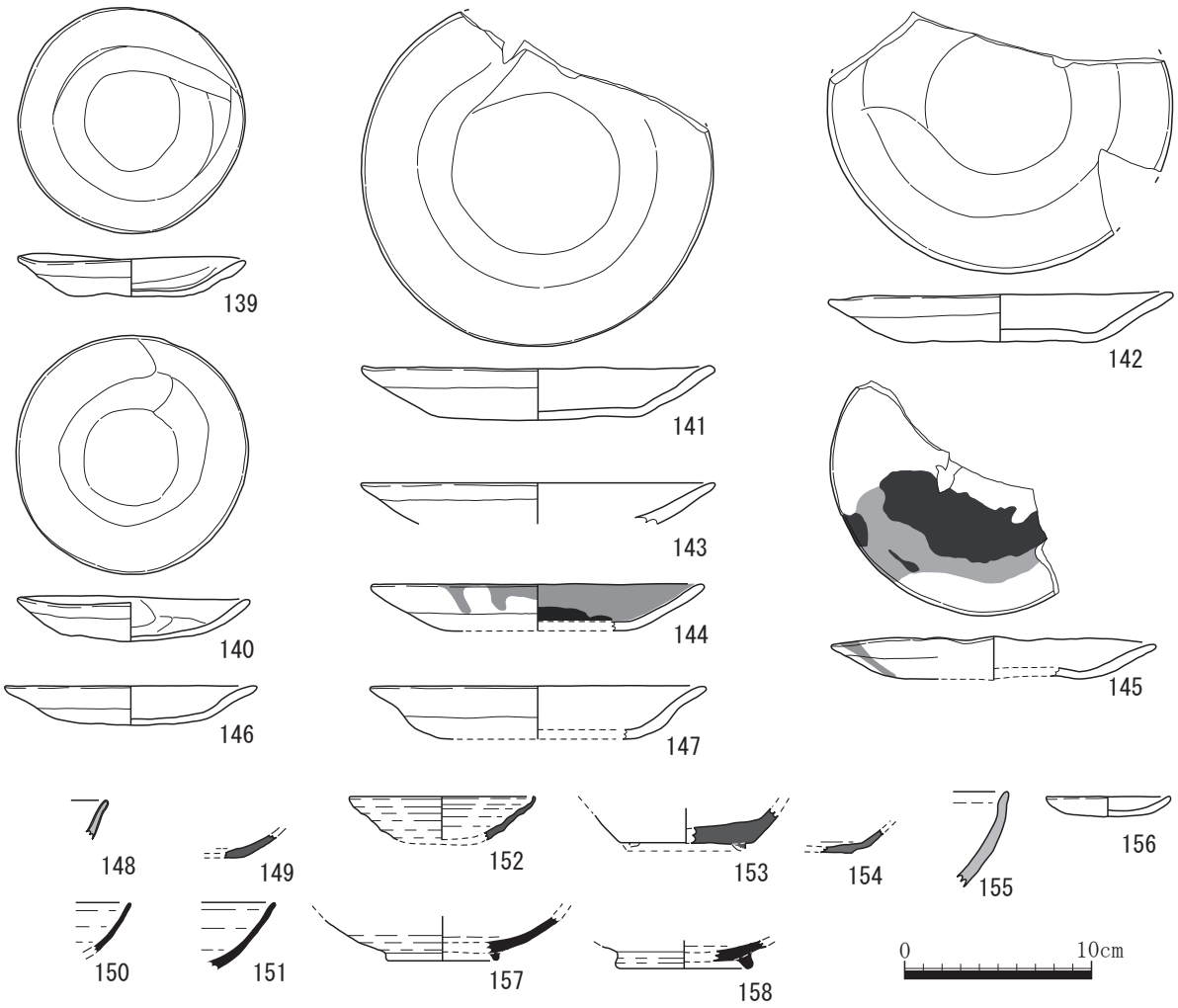
146、147はＢ１類とみられる。148は東濃型山茶碗口縁部で脇田３号窯式である。149は古瀬戸後Ⅳ期新段階の鉄釉製品とみられる。150、151は灰釉陶器である。

152は東濃型山茶碗で生田２号窯式期である。153は尾張型５型式、154は東濃型１号窯式期と考える。155は古瀬戸後Ⅳ期新段階の天目茶碗である。157は土師皿でＣ２類である。158は灰釉陶器の高台部分であり、混入品と考えた。

遺物の時期は室町～戦国時代（Ｖ３期～Ⅵ期）までとすることができ、下層で古瀬戸後



第 59 図　ＳＤ 225 出土遺物（１/４）



第 60 図　ＳＤ 225 出土遺物（１/４）

Ⅳ期新段階、生田２号窯式期といった時期の遺物が出土しているため、この時期には開溝していたと考え、土師皿の組成からⅥ期頃には埋没が進み、土師器皿の廃棄もこの頃と推定される。

土坑（ＳＫ）

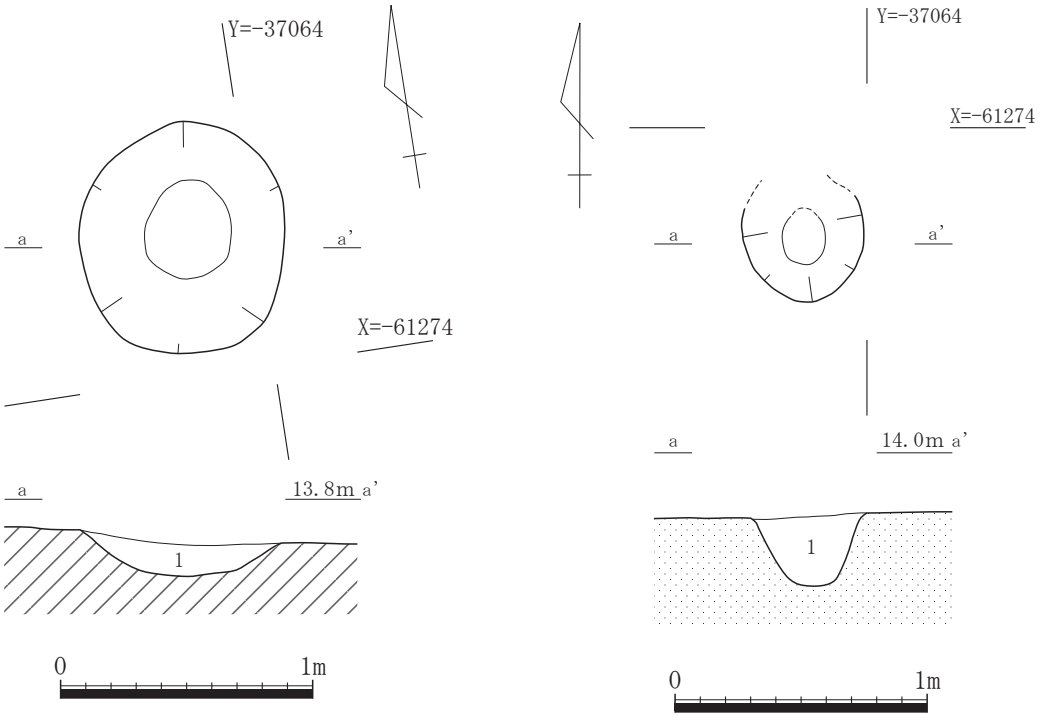
ＳＫ 444（第 61 図）

調査区の西側で確認した。SD228、SK446 を切っている。平面形は楕円形を呈しており、長軸 0.93 ｍ、短軸 0.82 ｍ、深さは検出面から 0.13 ｍを測る。断面形は皿状である。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、SD228 を切っていることから 15 世紀後葉（Ｖ３期）以降と推定する。

ＳＫ 446（第 61 図）

調査区西側で確認した。SD228 を切り、SK444 に切られている。平面形は楕円形と思われるが、北側を SK444 に切られており不明である。残存規模は長軸が 0.5 ｍ、深さは検出面から 0.27 ｍを測る。遺物は山茶碗、須恵器、土師器皿類が出土した。いずれも小破片であり、詳細な時期比定はできない。SD228 との切り合い、土師皿類の出土から 15 世紀後葉（Ｖ３期）以降と考えておきたい。



〈ＳＫ 444 土層名〉
1．暗灰黄色 4/2 細砂

〈ＳＫ 446 土層名〉
1．暗灰黄色 10ＹＲ 4/2 砂質土（ややしまりない）

第 61 図　ＳＫ 444、446 実測図（１/30）

ＳＫ 447（第 62 図）

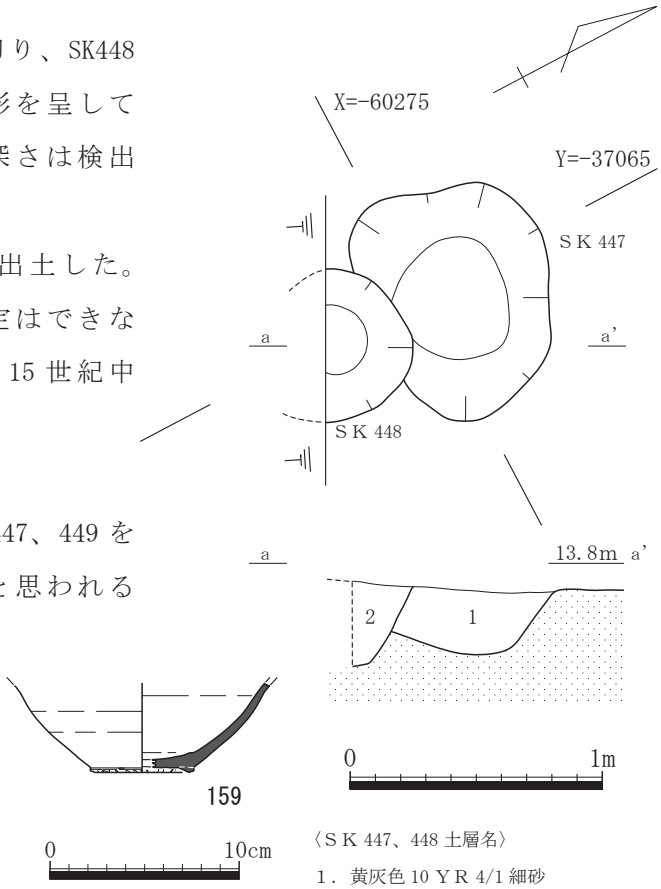
調査区の西側で確認した。SD228 を切り、SK448 に切られる。平面形は東西に長い楕円形を呈しており、長軸は 0.9 ｍ、短軸が 0.75 ｍ、深さは検出面から 0.35 ｍを測る。

遺物は東濃型山茶碗と土師器皿類が出土した。いずれも小破片であり、詳細な時期比定はできない。SD228 との切り合い、出土遺物から 15 世紀中葉（Ｖ２期）以降と考えておきたい。

ＳＫ 448（第 62 図）

調査区の西側で確認した。SD228、SK447、449 を切っている。平面形は楕円形を呈すると思われるが、南半分が調査区外であるため、詳細は不明である。残存規模は長軸が 0.6 ｍ、短軸が 0.4 ｍ、深さは検出面から 0.35 ｍを測る。

出土遺物は山茶碗、土師器皿類、土師器類が出土した。**159** は東濃型山茶碗である。本遺構の時期は SD228 との



〈ＳＫ 447、448 土層名〉
1．黄灰色 10ＹＲ 4/1 細砂
2．暗灰黄色 10ＹＲ 4/2 砂質土

第 62 図　ＳＫ 447､448 実測図（１/30）出土遺物（１/４）

切り合いと、出土遺物に土師器皿が含まれることからＶ２期以降としておきたい。

ＳＫ 449

調査区西側で確認した。SD228 を切り、SK447、448 に切られる。平面形は複数の切り合いにより、詳細は不明である。深さは検出面から 0.29 ｍを測る。

出土遺物は少なく、土師器類と常滑焼の破片が出土した。本遺構の時期は SD228 との切り合いとからＶ３期以降としておきたい。

ＳＫ 450（第 63 図）

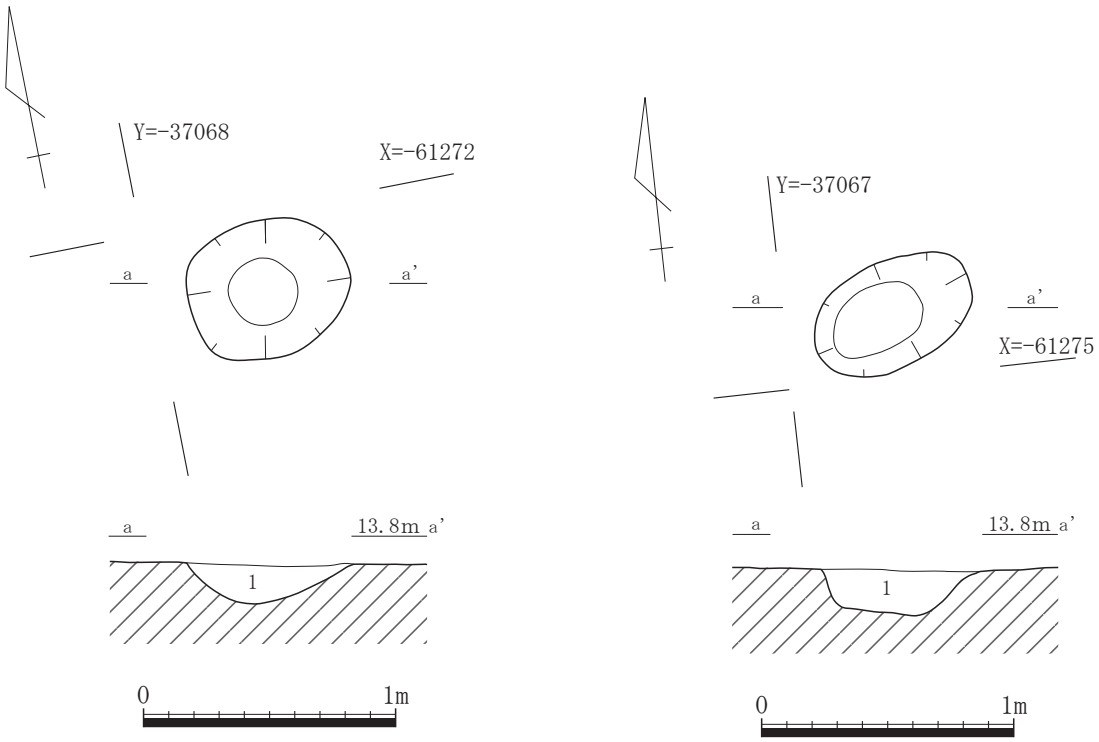
調査区の北西で確認にした。ＳＢ 216 を切っている。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸で 0.65 ｍ、短軸は 0.55 ｍで、深さは検出面から 0.15 ｍを測る。断面形は皿状である。

出土遺物は少なく、土師器類と山茶碗が出土した。いずれも小破片であり詳細な時期比定はできないが、山茶碗からＶ２期以降としておきたい。

ＳＫ 451（第 63 図）

調査区南西で確認した。SD223 を切っている。平面形は東西に長い楕円形を呈しており、長軸は 0.68 ｍ、短軸は 0.42 ｍで、深さは検出面から 0.17 ｍを測る。断面形は逆台形である。遺物は出土していない。

本遺構の時期について詳細な時期は不明であるが、SD228 を切っていることから、Ｖ２期以降と推定しておきたい。



〈ＳＫ 450 土層名〉

１．黒褐色 10ＹＲ 4/1 細砂

〈ＳＫ 451 土層名〉

１．暗灰黄色 2.5Ｙ 4/2 細砂

第 63 図　ＳＫ 450、451 実測図（１/30）

ＳＫ 452（第 64 図）

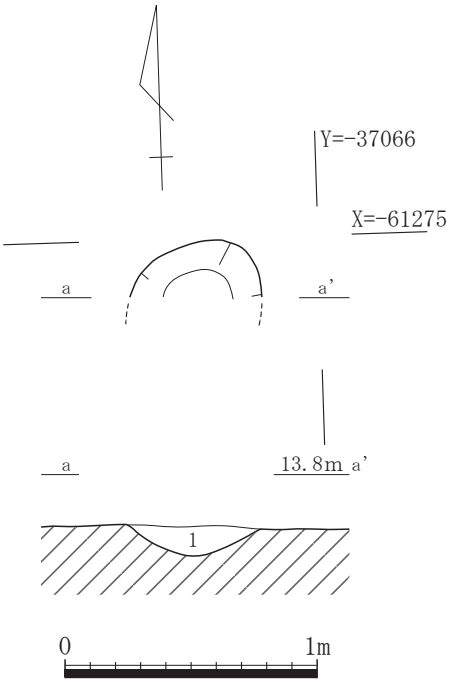
調査区南西の壁際で確認した。SD223 を切っている。平面形は南側が調査区外であるため、詳細は不明であるが楕円形を呈すると思われる。残存規模は、長軸で 0.52 ｍ、深さは検出面から 0.12 ｍを測る。遺物は出土していない。

本遺構の時期について詳細な時期は不明であるが、SD228 を切っていることから、Ｖ２期以降と推定する。

ＳＫ 453（第 52 図）

調査区の西壁際で確認した。SK455、SX35 を切っている。平面形は西側が調査区外であるため詳細は不明だが、楕円形と推定される。残存規模は長軸で 1.56 ｍ、深さは検出面から 0.51 ｍを測る。遺物の出土はない。

本遺構について詳細な時期は不明であるが、SK455、SX35 を切っていることから、Ｖ１期以降と推定しておきたい。



〈ＳＫ 452 土層名〉

１．暗灰黄色 2.5Ｙ 4/2 砂質土

第 64 図　ＳＫ 452 実測図（１/30）

ＳＫ 454（第 52 図）

調査区西側で確認した。SD228 を切り、SD224 に切られている。平面形は楕円形と推定される。残存規模は長軸で 0.5 ｍ、検出面から 0.24 ｍを測る。

遺物は山茶碗と土師器類が出土しが、小破片で詳細な時期比定はできない。

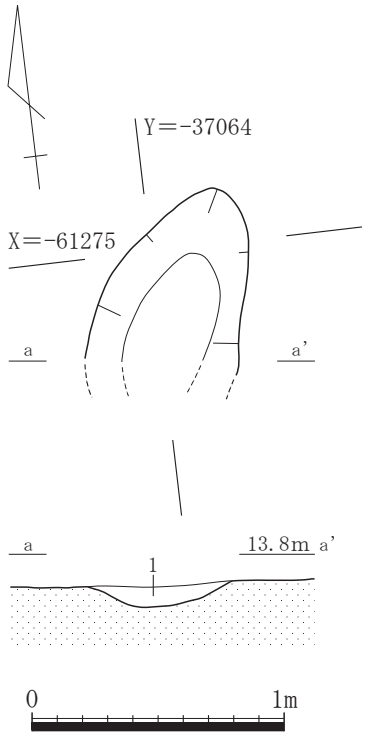
周辺の遺構は土の色調共に近似していたため、SD224 の上端部の崩れあるいは、SD228 を SK454 と認識した可能性は残る。

ＳＫ 465（第 65 図）

調査区の南西壁際で確認した。SD228 を切っている。平面形は南側が調査区外となるが、検出した形状から楕円形を呈していたと思われる。

残存規模は長軸で 0.7 ｍ、深さは検出面から 0.08 ｍを測る。

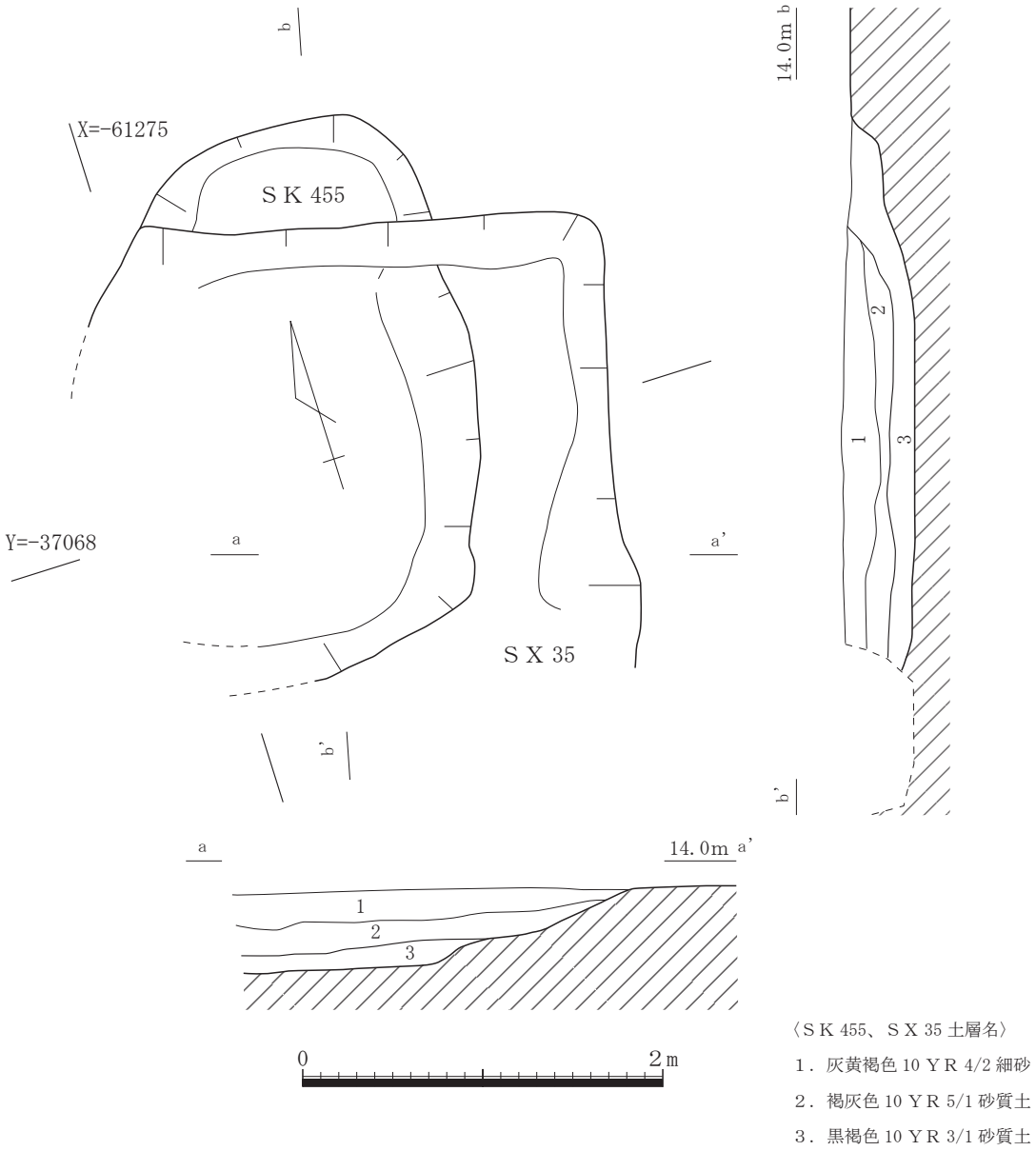
遺物は少なく、土師器類と土師器皿体部が出土した。詳細な時期比定はできないが、SD228 を切っており土師器皿が出土することから、Ｖ３期以降と考える。



〈ＳＫ 465 土層名〉

１．褐灰色 10ＹＲ 4/1 シルト

第 65 図　ＳＫ 465 実測図（１/30）



第 66 図　ＳＫ 455・ＳＸ 35 実測図（１/40）

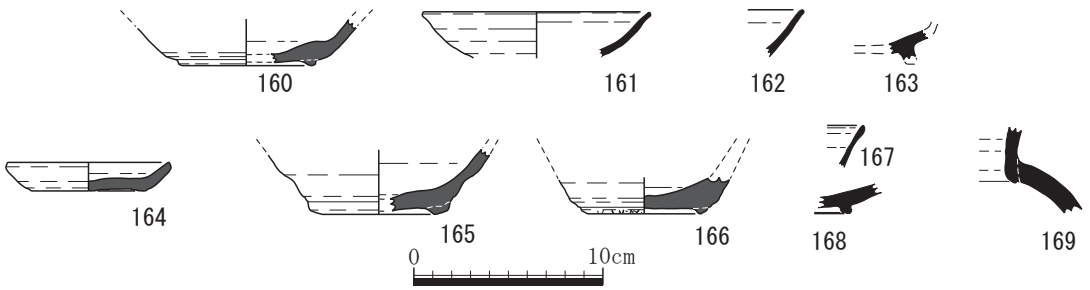
ＳＫ 455（第 66、67 図）

調査区の西端で確認した。SX35 に切られている。平面形は長楕円形を呈し、残存規模は長軸 2.3 ｍ、深さは検出面から 0.33 ｍを測る。

遺物は山茶碗、灰釉陶器、須恵器が出土した。160 は尾張型６型式の山茶碗である。161 は灰釉陶器の皿の口縁部である。162 は灰釉陶器の椀口縁部とみられる。163 は須恵器の杯で高台部分とみられる。出土遺物から 13 世紀前葉（Ｖ１期頃）と考えた。

ＳＸ 35（第 66、67 図）

調査区の西端で確認した。SK455 を切っており、SK453 に切られている。平面形は隅丸方形と思われるが、南半が調査区外となるため詳細は不明である。全２層に分層できた。下層の３層は SK455 に伴うと判断した。過去調査で西側に位置するＩ１区において、同様の



第67図　ＳＫ455・ＳＸ35出土遺物（1/4）

隅丸方形を呈した10～13世紀頃の土坑（SK67・172・187）が確認されているが、こういった土坑の機能を類推する根拠は得られなかった。

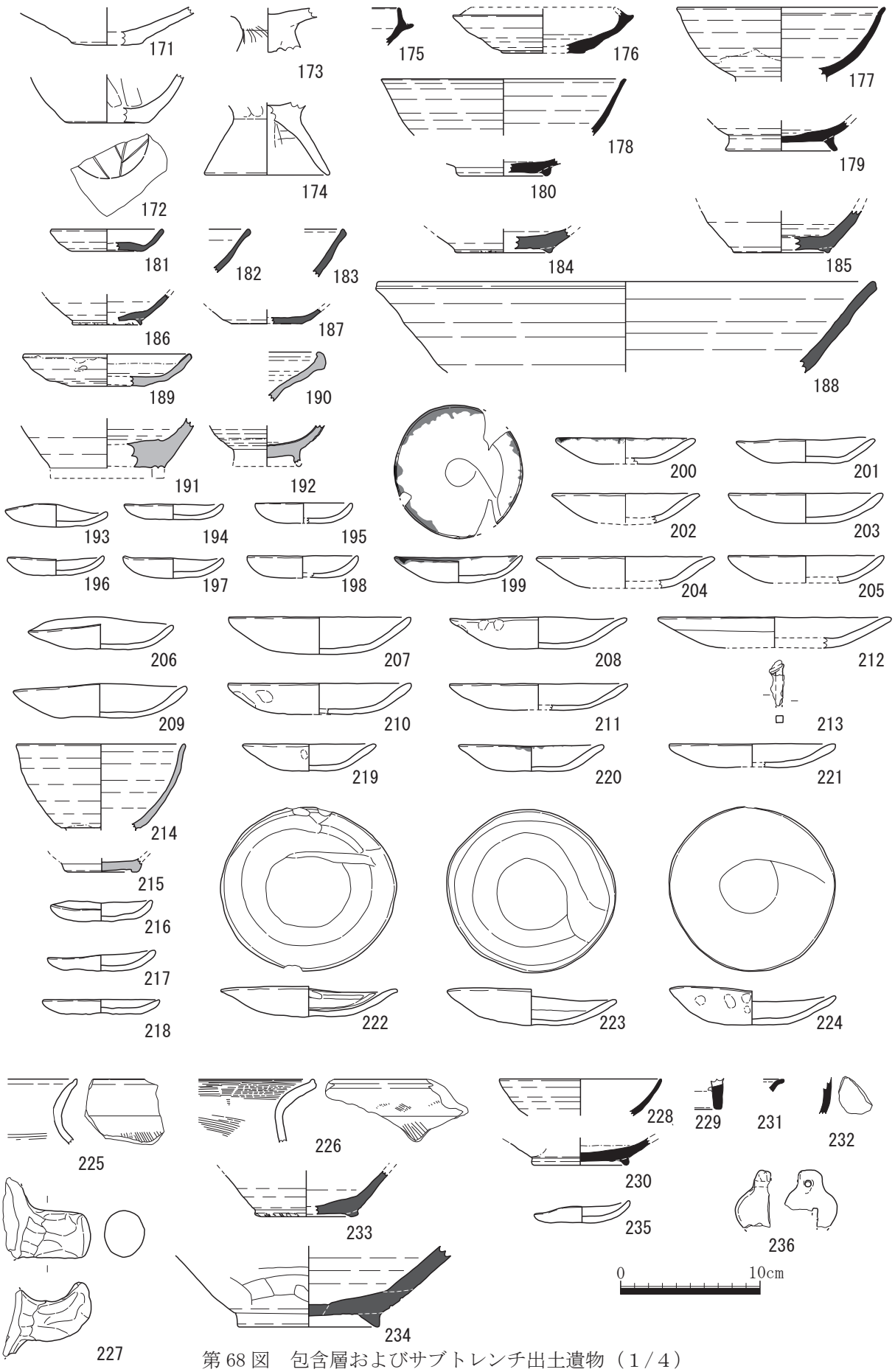
出土遺物は山茶碗、灰釉陶器、須恵器、土師器類、土師器皿類が出土している。164～166は尾張型山茶碗である。164と166は第６型式、165は第５型式と判断した。167、168は灰釉陶器である。169は須恵器の横瓶の頸部とみられる。

本遺構の時期は山茶碗からＶ１期頃と考えるが、SK455と近似した時期であり一連の遺構であった可能性は残る。

５．包含層およびサブトレンチ出土遺物（第68図）

171～224は包含層より出土した遺物である。171～174は土師器で、171、172は壺の底部、173、174は台付甕の脚台部とみられる。175、176は須恵器の坏であり、６世紀末頃～７世紀前葉頃と推定される。177～180は灰釉陶器である。177、178は深椀、179は椀Ｂの高台、180は皿の高台である。時期はⅦ期中段階を中心とした前後、179はⅧ期古段階を中心とした前後の時期である。181～187は山茶碗である。181～185は尾張型の山茶碗で、183は第５型式、184、185は碗の高台部分で第６型式である。186、187は東濃型山茶碗で、明和～大畑大洞期である。188は尾張型第６型式の片口鉢である。189～192は瀬戸美濃産陶器である。189は縁釉小皿、190は擂鉢の口縁部で、ともに古瀬戸後Ⅳ新段階である。191は古瀬戸後期の花瓶である。192は登り窯４の丸碗である。193～212は土師器皿である。193～198はＣ２類、199～211はＢ２－ｂ類、212はＢ２－ａ類である。213は鉄釘とみられる。214～224は包含層掘削時にかたまって出土したため、付近を精査したが遺構の検出には至らなかった。よって、これらの遺物は遺構に帰属した可能性が高いと思われる。214、215は天目茶碗で、214が古瀬戸後Ⅳ期新段階、215が大窯第１段階である。216～224は土師器皿である。216～218はＣ２類、222～224はＢ２－ｂ類である。

225～236はサブトレンチ掘削時に出土した遺物である。本来ならばいずれかの遺構に帰属したものと思われる。225､226は伊勢型甕の口縁部である。227は土師質の把手であり、甑あるいは鍋類に付していたものと思われる。228～230は灰釉陶器である。231、232は緑釉陶器で、231は深椀の口縁端部である。小破片であるため詳細は不明であるが、東濃産でⅦ期を中心とした時期とみられる。233は尾張型山茶碗の第６型式である。234は尾張型10型式の片口鉢である。235は土師器皿のＣ２類。236は土鈴である。



第 68 図　包含層およびサブトレンチ出土遺物（1 / 4）

第５章　自然科学分析

第１節　鷺山市場遺跡の花粉分析、プラント・オパール分析

森　将志（パレオ･ラボ）

1. はじめに

岐阜県岐阜市鷺山に所在する鷺山市場遺跡は、濃尾平野の北端に位置しており、弥生時代後期～古墳時代前期や戦国時代の遺構・遺物が検出されている。この遺跡における古植生を検討するために、SD224 や SD227、自然流路などから花粉分析用とプラント・オパール分析用の試料が採取された。以下では、試料について行った花粉分析とプラント・オパール分析の結果を示し、遺跡周辺における古植生について考察を行った。

2. 試料と方法

2-1. 花粉分析

花粉分析の試料が採取された場所は I2 区の SD224 である。SD224 からは 15 世紀中葉～ 16 世紀前葉頃の遺物が出土しており、遺跡に広がる区画溝と推定されている。SD224 は全部で 8 層に区分されており、これらのうち花粉分析に用いた試料は 7 層の灰オリーブ色シルト質細粒砂（No.4）と 8 層の灰オリーブ色シルト質粘土（No.3）である。以上の試料から、次の手順で花粉化石を抽出した。

試料（湿重量約 3 ～ 4g）を遠沈管にとり、10% 水酸化カリウム溶液を加え 10 分間湯煎する。水洗後 46% フッ化水素酸溶液を加え 1 時間放置する。水洗後、比重分離（比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸 9：濃硫酸 1 の割合の混酸を加え 20 分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作製して行った。各プレパラートは全面を検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、保存状態の良好な花粉・胞子を選んで単体標本を作製し、図版 1 に載せた。図版 1 に載せた分類群ごとの単体標本（PLC.426 ～ 429）はパレオ・ラボに保管されている。

2-2. プラント・オパール分析

I2 区東端では旧地形が大きく下がる状況が確認されており、自然流路あるいは落ち込みであると考えられている。自然流路あるいは落ち込みの覆土は、出土遺物から弥生時代後期～古墳時代初頭の堆積物であると考えられており、この覆土を切って SD227 が掘削されている。SD227 出土遺物から古墳時代前期頃の遺構と考えられている。プラント・オパール分析用の試料は、自然流路あるいは落ち込み覆土から採取された灰褐色砂質シルト（No.1）と、SD227 覆土から採取された灰褐色シルト質砂（No.2）である。以上の試料を用

いて、以下に示した手順に従って処理を施し、分析を行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定)。別に試料約 1g（秤量）をトールビーカーにとり、約 0.02g のガラスビーズ（直径約 0.04mm）を加える。これに 30% の過酸化水素水を約 20 ～ 30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについてガラスビーズが 300 個に達するまで行った。

3. 結果

3-1. 花粉分析

今回検出された花粉･胞子の分類群はカバノキ属とコナラ属コナラ亜属､クリ属､イネ科､アカザ科－ヒユ科､アブラナ科､ヨモギ属､単条型胞子､三条型胞子の計 9 である（表４)。いずれの試料においても胞子が多く産出し、試料 No.4（SD224 7 層）では単条型胞子が 639 個産出している。なお、今回の試料には花粉化石が十分に含まれていなかったため、分布図は示していない。

表４　産出花粉化石一覧表

学名	和名	No.3 (SD224 8 層)	No.4 (SD224 7 層)
樹木			
Betula	カバノキ属	1	-
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	-	1
Castanea	クリ属	4	1
草本			
Gramineae	イネ科	22	25
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	6	6
Brassicaceae	アブラナ科	1	-
Artemisia	ヨモギ属	-	1
シダ植物			
Monolete type spore	単条型胞子	44	639
Trilete type spore	三条型胞子	10	13
Arboreal pollen	樹木花粉	5	2
Nonarboreal pollen	草本花粉	29	32
Spores	シダ植物胞子	54	652
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	88	686
Unknown pollen	不明花粉	3	1

3-2. プラント・オパール分析

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料 1g 当たりの各プラント・オパール個数を求め（表５)、それらの分布を図 69 に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料 1g 当たりの検出個数である。

表５　試料１ｇ当たりのプラント・オパール個数

試料番号	イネ (個／ｇ)	ネザサ節型 (個／ｇ)	クマザサ属型 (個／ｇ)	他のタケ亜科 (個／ｇ)	ウシクサ族 (個／ｇ)	不明 (個／ｇ)
No.2 (SD227)	1,200	7,200	1,200	1,200	4,800	0
No.1 (自然流路)	0	34,900	2,400	0	16,800	6,000

今回の分析試料で最も多く産出した植物珪酸体は、試料 No.1(自然流路あるいは落ち込み）のネザサ節型機動細胞珪酸体で、34,900 個である。次いで、同じく試料 No.1(自然流路あるいは落ち込み）のウシクサ族機動細胞珪酸体が 16,800 個で多い。ネザサ節型機動細胞珪酸体とウシクサ族機動細胞珪酸体は試料 No.2(SD227) では少なく、それぞれ 7,200

個と4,800個である。クマザサ属型機動細胞珪酸体は試料No.1(自然流路あるいは落ち込み)で2,400個、試料No.2(SD227)で1,200個産出している。また、試料No.2(SD227)ではイネ機動細胞珪酸体が1,200個産出している。

4. 考察

SD224から採取した試料No.3と4は細粒砂～粘土からなる堆積物で、花粉が堆積しやすい環境にあったと思われるが、花粉化石がほとんど含まれていなかった。花粉膜にはスポロポレニンと呼ばれる酸にもアルカリにも耐性がある物質が含まれているが、一般的に乾燥に弱く、土壌バクテリアや紫外線などによって分解され、消失してしまう。SD224から花粉化石が産出しないということは、SD224は絶えず水を湛えた場所ではなく、乾燥した環境にあったと思われる。ただし、胞子は一般的にスポロポレニンの含有量が多く、花粉に比べると乾燥した環境にも強い。そのため、胞子のみが大量に産出したと思われる。以上のように、今回の試料には花粉化石がほとんど残っていないため、花粉化石から古植生を検討するのは難しい。よって、以下では植物珪酸体から遺跡周辺におけるイネ科植生について検討してみたい。

弥生時代後期～古墳時代初期の堆積物と考えられる試料No.1（自然流路あるいは落ち込み）では、ネザサ節型機動細胞珪酸体とウシクサ族機動細胞珪酸体が多く産出している。岐阜市下土居に所在する鷺山仙道遺跡における地山堆積物の花粉分析結果（新山，2002）によれば、古墳時代以前には鷺山仙道遺跡周辺にアカガシ亜属を主体とした照葉樹林が広がっており、開けた空間があまりなかったようである。おそらく、鷺山市場遺跡周辺においても照葉樹林が広がっていたと思われ、そうした照葉樹林の林縁部にケネザサやゴキタケなどのネザサ節型のササ類や、ススキやオギなどのウシクサ族が生育していたと思われる。林床の一部にはスズタケやミヤコザサなどのクマザサ属型のササ類も生育していたであろう。

古墳時代前期の堆積物と考えられている試料No.2（SD227）では、イネ機動細胞珪酸体の産出が見られた。イネ機動細胞珪酸体の産出背景としては、イネの葉や機動細胞珪酸体が自然堆積した可能性や、人為的作用によってSD227に稲藁が混入していた可能性などが考えられる。また、ネザサ節型機動細胞珪酸体とウシクサ族機動細胞珪酸体の産出も見られ、古墳時代前期になっても照葉樹林の林縁部にケネザサやゴキタケなどのネザサ節型のササ類や、ススキやオギなどのウシクサ族が生育していたと思われる。しかし、試料No.1(自然流路あるいは落ち込み）に比べると、ネザサ節型機動細胞珪酸体とウシクサ族機動細胞珪酸体の産出は少ない。これらイネ科植物の産出傾向の相違については、遺跡周辺に照葉樹林が発達し、周囲に水田が存在していたとしても、ネザサ節型のササ類やウシクサ族が生育できる林縁部や開けた場所が少なくなってきていた可能性や、遺構の違いによる集積作用の違いなどの可能性が考えられよう。

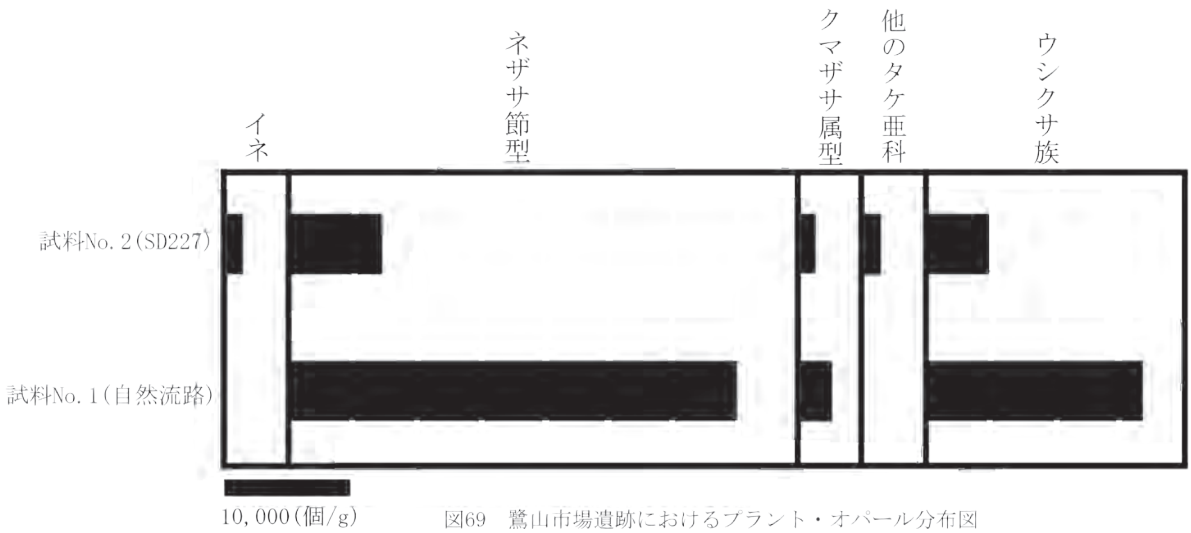


図69　鷺山市場遺跡におけるプラント・オパール分布図

引用文献

新山雅広（2002）第2節花粉化石群集．岐阜市教育文化振興事業団編「鷺山仙道遺跡」：142-146，岐阜市教育文化振興事業団．

第2節　鷺山市場遺跡出土土器付着赤色顔料の蛍光X線分析

竹原弘展（パレオ・ラボ）

1. はじめに

鷺山市場遺跡より出土した土器に付着する赤色顔料について蛍光X線分析を行い、顔料の種類を検討した。

2. 試料と方法

分析対象は、鷺山市場遺跡のSK445より出土した皿の外面底部に付着する赤色顔料で、皿の製作時期は10世紀とみられる（表6、図版13-1）。セロハンテープに赤色部分を極少量採取して分析試料とした。

表6　分析対象

分析No.	調査区	遺構名	器種	法量（cm）			時期
				口径	高さ	底径	
42	I2区	SK445	皿	12.5	2.6	6.3	10世紀

分析装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000Type Ⅱを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV･1mAのロジウムターゲット、X線ビーム径が100 μ mまたは10 μ m、検出器は高純度Si検出器（Xerophy）である。検出可能元素はナトリウム～ウランであるが、ナトリウム、マグネシウムといった軽元素は蛍光X線分析装置の性質上、検出感度が悪いため、試料中に少量含む程度ではピークを検出し難く、検出できてもその定量値はかなり誤差が大きい。

本分析での測定条件は、50kV、0.88mA（自動設定による）、ビーム径100 μ m、測定時間500sに設定した。定量分析は、標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法(FP法)

による半定量分析を装置付属ソフトで行った。定量値の誤差は大きい。

さらに、蛍光X線分析用に採取した試料を観察試料として、生物顕微鏡で赤色顔料の粒子形状を確認した。

3. 結果

分析により得られたスペクトルおよびFP法による半定量分析結果を図版13-2に示す。分析の結果、鉄（Fe）が多く検出された。また、生物顕微鏡観察により得られた画像を図版1-3に示す。特にパイプ状粒子は認められなかった。

4. 考察

代表的な赤色顔料の種類としては、朱（水銀朱）とベンガラが挙げられる。水銀朱は硫化水銀（HgS）で、鉱物としては辰砂と呼ばれ、産出地はある程度限定される。ベンガラは狭義には三酸化二鉄（Fe_2O_3、鉱物名は赤鉄鉱）を指すが、広義には鉄（Ⅲ）の発色に伴う赤色顔料全般を指し（成瀬，2004）、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは直径約1μmのパイプ状の粒子形状からなるものも多く報告されている。このパイプ状の粒子形状は鉄バクテリアを起源とすることが判明しており（岡田，1997）、含水水酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱がこのような形状を示す（成瀬，1998）。

今回分析した試料は、ケイ素など土中成分に由来すると考えられる元素は検出されたものの、水銀は検出されなかった。鉄が高く検出されていることから、赤い発色は鉄によるものであると推定できる。すなわち、顔料としてはベンガラにあたる。なお、パイプ状粒子は検出されなかったことから、いわゆるパイプ状ベンガラではない。

5. おわりに

鷲山市場遺跡出土の10世紀の皿の外面底部に付着する赤色顔料について分析した結果、鉄が多く検出され、鉄（Ⅲ）による発色と推定された。顔料としてはベンガラにあたる。

引用文献

成瀬正和（1998）縄文時代の赤色顔料Ⅰ―赤彩土器―．考古学ジャーナル，438，10-14，ニューサイエンス社．

成瀬正和（2004）正倉院宝物に用いられた無機顔料．正倉院紀要，26，13-61，宮内庁正倉院事務所．

岡田文男（1997）パイプ状ベンガラ粒子の復元．日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集，38-39．

第３節　土器付着炭化物の炭素・窒素安定同位体分析

山形秀樹・竹原弘展（パレオ・ラボ）

1. はじめに

鷲山市場遺跡より出土した灯明皿に付着した炭化物を対象として、炭素と窒素の安定同位体比を測定した。また、炭素含有量と窒素含有量を測定して試料のC/N比を求めた。

2. 試料および方法

試料は、溝SD225より出土した灯明皿5点の内面～口縁に付着している炭化物で、灯明皿の時期は15世紀末から16世紀前半とみられる（表７、図版14)。試料№144のみ、土器の寸法が大きく、炭化物の付着状況も若干異なる。測定を実施するにあたり、炭化物試料は、酸・アルカリ・酸洗浄（HCl:1.2N, NaOH:0.1N）を施して試料以外の不純物を除去した後、測定を行った。

表７　分析対象

試料番号	調査区	遺構名	種類	寸法(cm)		時期
				口径	高さ	
109	I2区	SD225	灯明皿	9.6	2.0	15世紀末～16世紀前半
110				10.0	2.1	
113				9.9	2.0	
112				10.5	1.7	
144				17.6	2.5	

炭素含有量および窒素含有量の測定には、EA（ガス化前処理装置）であるFlash EA1112 (Thermo Fisher Scientific社製）を用いた。スタンダードは、アセトニトリル（キシダ化学製）を使用した。得られた炭素含有量と窒素含有量に基づいてC/N比を算出した。

炭素安定同位体比（$\delta\ ^{13}C_{PDB}$）および窒素安定同位体比（$\delta\ ^{15}N_{Air}$）の測定には、質量分析計DELTA V (Thermo Fisher Scientific社製）を用いた。スタンダードは、炭素安定同位体比がIAEA Sucrose (ANU)、窒素安定同位体比がIAEA N1を使用した。

測定は、次の手順で行った。スズコンテナに封入した試料を、超高純度酸素と共に、EA内の燃焼炉に落とし、スズの酸化熱を利用して高温で試料を燃焼、ガス化させ、酸化触媒で完全酸化させる。次に還元カラムで窒素酸化物を還元し、水を過塩素酸マグネシウムでトラップ後、分離カラムでCO_2とN_2を分離し、TCDでそれぞれ検出・定量を行う。この時の炉および分離カラムの温度は、燃焼炉温度1000℃、還元炉温度680℃、分離カラム温度45℃である。分離したCO_2およびN_2はそのままHeキャリアガスと共にインターフェースを通して質量分析計に導入し、安定同位体比を測定した。

3. 結果

表８に、試料名と炭素安定同位体比、窒素安定同位体比、炭素含有量、窒素含有量、

C/N 比を示す。試料番号 144 以外は窒素含有量が非常に少なく、C/N 比が極めて大きな値を示した。また、窒素安定同位体比も適正出力が得られなかったため補正をかけている。図 70 は炭素安定同位体比と窒素安定同位体比の関係、図 71 は炭素安定同位体比と C/N 比の関係を示したものである。試料は、図 70 では試料番号 144 以外が C_3 植物の範囲に、試料番号 144 は海産物の左方にプロットされた。図 71 では試料番号 144 は C_3 植物・草食動物付近にプロットされ、その他は C/N 比が高いため図中にプロットできなかった。

表８　測定結果

試料番号	$\delta^{13}C_{PDB}$ (‰)	$\delta^{15}N_{Air}$ (‰)	炭素含有量 (%)	窒素含有量 (%)	C／N比	備考
109	-28.2	-1.42	10.4	検出限界以下	-	*
110	-28.0	3.77	50.7	0.078	758.00	**
113	-28.3	-1.03	36.7	0.125	342.38	***
112	-27.9	-0.880	61.8	0.182	395.98	***
144	-21.1	12.9	20.5	3.93	6.08	

＊ δ^{15}N値について、窒素量が少なく適正出力を得られなかったため、約3.42‰の補正をかけている。±0.4‰程度の誤差があると予想される。
** δ^{15}N値について、窒素量が少なく適正出力を得られなかったため、約1.74‰の補正をかけている。±0.4‰程度の誤差があると予想される。
*** δ^{15}N値について、窒素量が少なく適正出力を得られなかったため、約0.48‰の補正をかけている。±0.2‰程度の誤差があると予想される。

4. 考察

測定の結果、試料番号 144 以外の 4 点は δ^{13}C 値が低いことから、海産物由来である可能性は低く、陸産物由来と考えられる。一方、試料番号 144 は δ^{13}C 値が高く、δ^{15}N 値も高いことから、海産物の影響を受けている可能性が高い。いずれにせよ、試料番号 144 以外の 4 点は互いによく似た組成であり、これらに対して試料番号 144 の炭化物の由来は明らかに異なるものであるといえよう。

参考文献

赤澤　威・南川雅男（1989）炭素・窒素同位体比に基づく古代人の食生活の復元．田中　琢・佐原　眞編「新しい研究法は考古学になにをもたらしたか」：132-143，クバプロ．

坂本　稔（2007）安定同位体比に基づく土器付着物の分析．国立歴史民俗博物館研究報告，137，305-315.

Yoneda, M., M. Hirota, M. Uchida, A. Tanaka, Y. Shibata, M. Morita, and T. Akazawa (2002) Radiocarbon and stable isotope analyses on the Earliest Jomon skeletons from the Tochibara rockshelter, Nagano, Japan. Radiocarbon 44(2), 549-557.

吉田邦夫・西田泰民（2009）考古科学が探る火炎土器．新潟県立歴史博物館編「火焔土器の国　新潟」：87-99，新潟日報事業社．

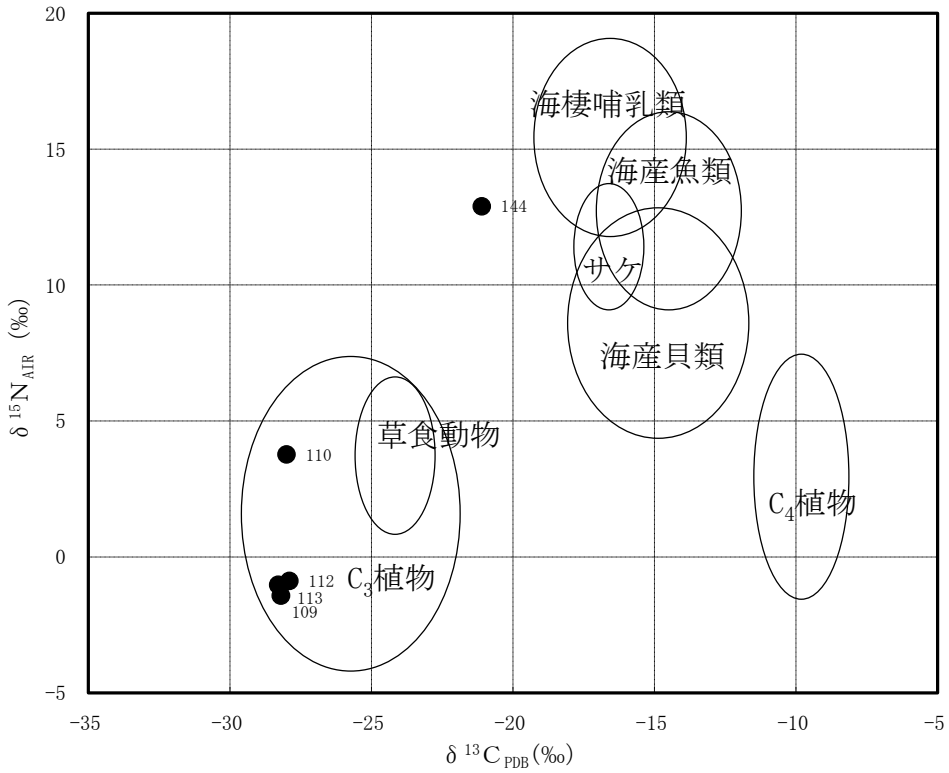


図70　炭素・窒素安定同位体比(吉田・西田(2009)に基づいて作成)

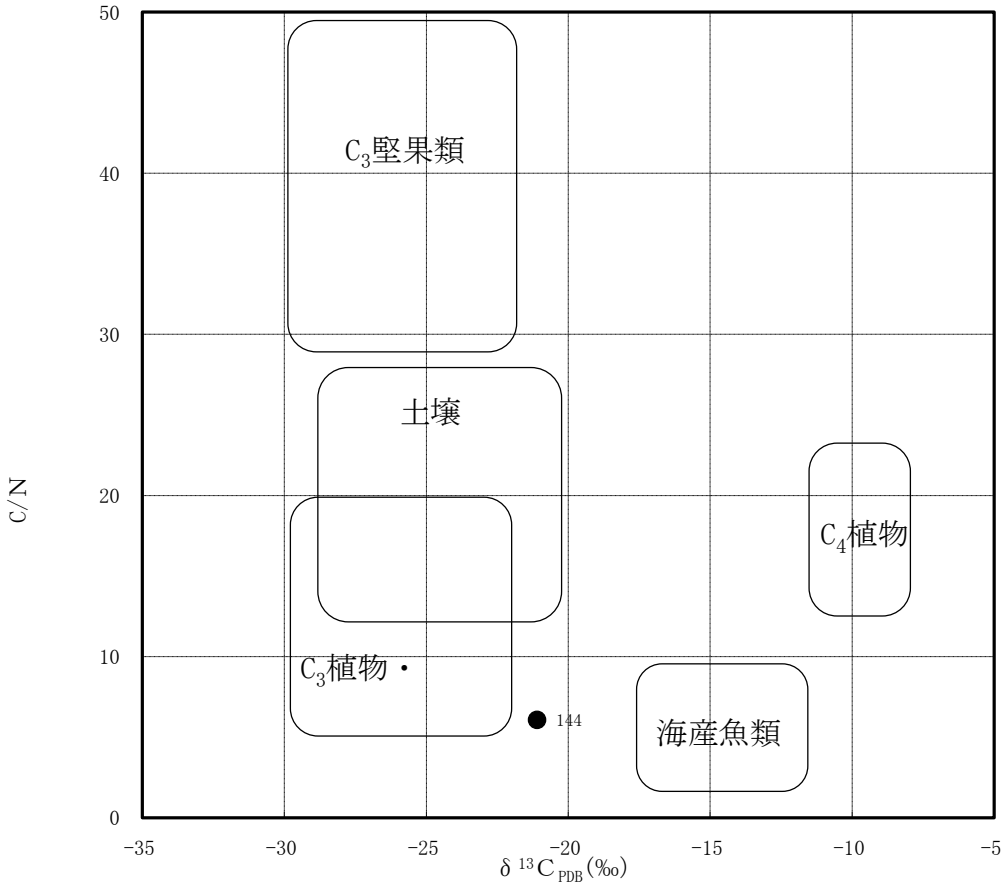


図71　炭素安定同位体比とC/N比の関係（吉田・西田(2009) に基づいて作成）

第６章　総括

第１節　時期毎の変遷について

今年度行った発掘調査からも断続的ではあるが、各時代の遺構、遺物が確認できた。過去調査成果をふまえながら概括していきたい。

〈弥生時代末～古墳時代前期〉（Ⅰ～Ⅱ１期）

鷺山市場遺跡において本格的に集落が営まれだした時期である。Ｈ２区では当該期に比定できる住居跡が確認できた。Ｉ２区東端に存在した自然流路あるいは落ち込み状の自然地形は埋没が進行している。埋没直後にはSD226、227といった自然地形に平行するような溝が掘られ、このうちSD227からは稲のプラント・オパールが検出された。ただし、SD227埋土に含まれるプラント・オパール数量は少なく、すぐ近くに水田跡が存在したとの認定はできない。鷺山市場遺跡北東端といった範囲で捉えると、当該期には稲作が行われていたと考える。これらの生産域は自然流路あるいは落ち込みの埋没といった、古環境の変化が背景にあったものと推測される。

〈古墳時代後期～古代〉（Ⅲ期～Ⅳ期）

Ｉ２区ではⅢ期頃と推定されるSB217が確認できる。過去調査ではⅢ１期の遺構が鷺山市場遺跡で最も多く確認されている。しかし、今年度の調査では当該期の遺構は少なく、とくにSB217より東からは住居が見つかっていない。このことから、Ｉ２区の中央付近から東は、集落の中でも縁辺部であったと理解できる。

Ｉ２区西側の柱穴、土坑からは灰釉陶器あるいはロクロ土師器が出土しており、平安時代中頃（Ⅳ１期）と判断できる。柱穴からは掘立柱建物の復元には至れず、出土状況から埋納といった行為を推測した。過去調査では当該期の住居はＣ区に集中しており、その他調査区には散在的な状況が判明している。

〈中世～戦国時代〉（Ⅴ～Ⅵ期）

両調査区を通じて新たに区画溝が５条確認できた。溝は南北に延びる溝で北から５°～10°前後東へ傾き、過去調査でみられる区画溝の方位とほぼ同じと判断できる。

Ｈ２区のSD220・221は詳細な時期は不明ながら、同一地点で２度掘りなおしが行われたと推測される。

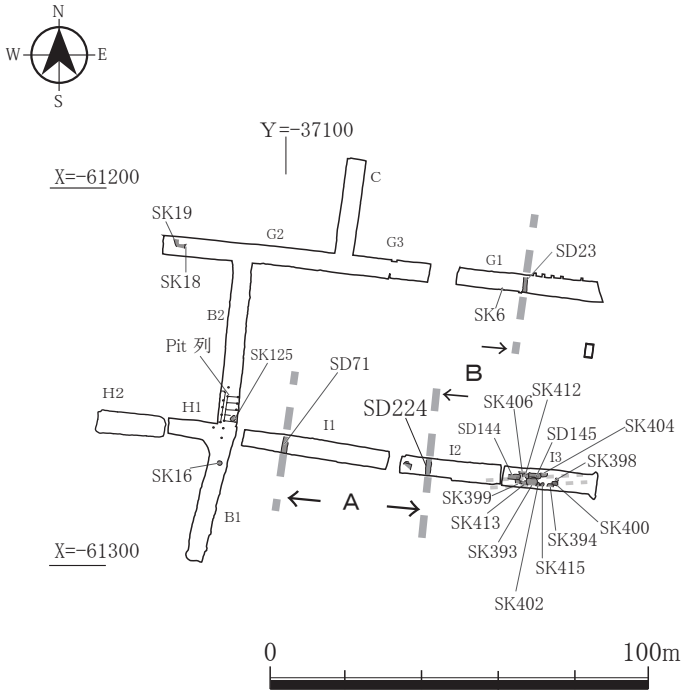
Ｉ２区のSD223は比較的浅く、時期もⅤ２期の間に埋没したと考える。SD224は出土遺物の検討から古と新があり、最終埋没はⅥ期と考えた。また、SD224の下層埋土はシルトから微細砂を呈していた。よって、土壌サンプルを採取し花粉分析を試みたが、依存状態は良好ではなく成果は得られなかった。SD225は土器からⅤ３期からⅥ期にかけて機能していたと思われる。上層からは土師器皿がまとまって出土し、一括廃棄と判断できる。SD228の方向性は他の区画溝と大きく異なっており、一連の区画溝とはやや異なった溝と考える。

第２節　区画の規模と連続性

ここでは、今年度調査および過去調査で検出した溝によりできる、区画の規模と連続性について検討していきたい。

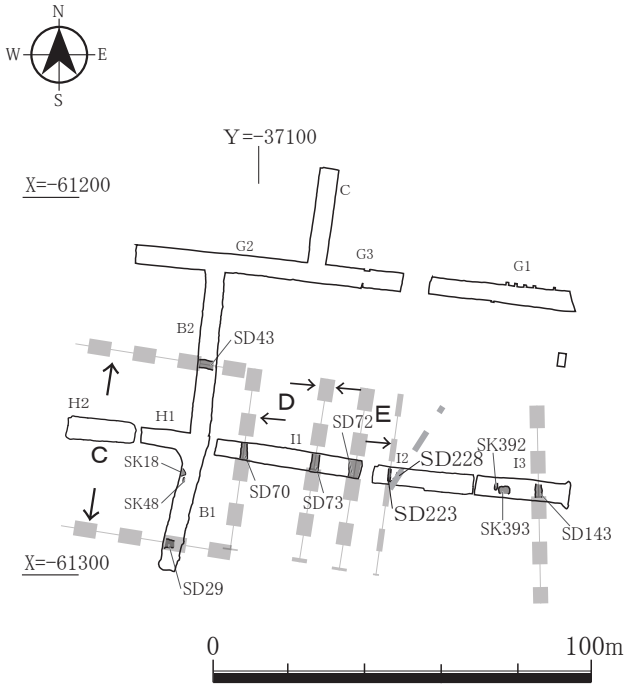
１．鎌倉時代（Ｖ1期）（第 72 図）

今年度の調査で新たに SD225 を確認した。この時期にはＩ１区の SD71、Ｇ１区の SD23 があり、SD71 と SD224 間（Ａ）で約 40 ｍ、SD224 古と SD23 間（Ｂ）で約 20 ｍを測る。南北を規定するような溝は見当たらないが、東西規模はＡ－Ｂで半分となっている。



(1：2000)

第 72 図　Ｖ１期主要遺構分布図（１/2,000）



(1：2000)

第 73 図　Ｖ２期主要遺構分布図（１/2,000）

２．室町時代（Ｖ2期）（第 73 図）

今年度の調査で SD223、SD228 が確認できた。Ｂ１区、Ｂ２区で東西方向の SD43、29 があり、この間（Ｃ）は約 50 ｍを測る。SD73 を中心とすると SD70 までの間（Ｄ）は約 20 ｍ、SD224 までの間（Ｅ）も約 20 ｍとなる。

よって、SD70 と SD223 間で約 40 ｍとなり、Ｖ１期（Ａ）と同じ規模になる。Ｖ１期にみられた SD71 から SD70 は西へ２ｍ程度移動し、Ｉ２区の SD224 から SD223 でも西へ２ｍ移動している。このことから、40 ｍの区画規模を踏襲しつつ西へ２ｍ程度移動させたと理解できる。

SD223 から西では SD228、SD143 が確認できるが、いずれも区画方位が大きく異なっている。

Ｉ３区の SK392、393 は火葬施設と推定

された土坑である。SD223 を境とした西側の土地利用を推測すると、居住域や生産域以外の目的で使用されていた可能性が高い。

３．室町、戦国時代（Ｖ３期）（第 74 図）

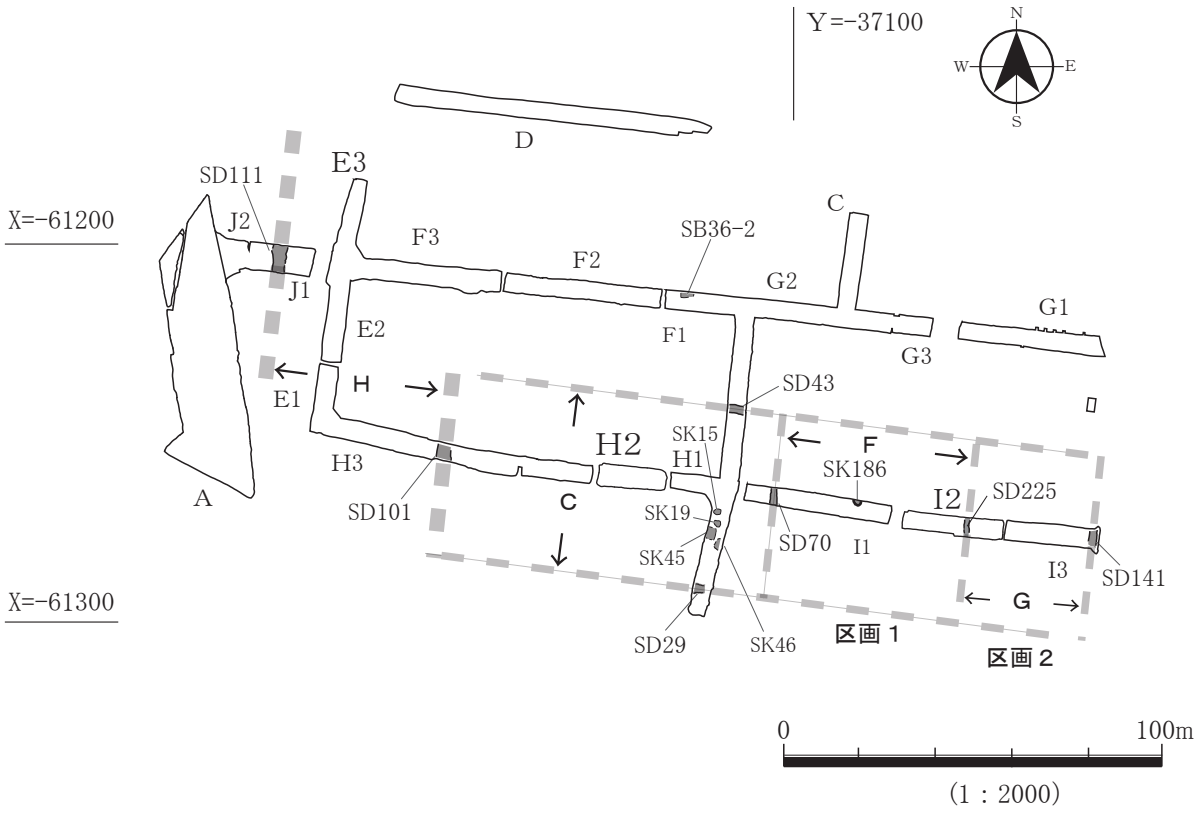
SD43、29 を南北とし、SD101、141 を東西とする長方形の区画が復元できる。この時期にはＪ１区で SD111 が確認されており、北側へも区画範囲が伸長したと推測する。

SD101 と SD141 の中間に SD70 が確認されており、今年度調査区Ｉ２区までの間（Ｆ）で約 50 ｍを測る。SD43 から SD29 間（Ｃ）も約 50 ｍであることから、約 50 ｍ四方の区画（区画１）が復元できる。SD225 と SD141 間（Ｇ）は約 35 ｍを測り、SD43、29 が東進すると仮定すると、ここには約 35 ｍ× 50 ｍ規模の区画（区画２）が復元できる。

SD70 は SD101 と SD141 との中間になるため、SD70 を軸に西側にも同規模の区画が推定できる。Ｊ１区の SD111 と SD101 間（Ｈ）では同じく約 50 ｍであり、さらに北側へも同様な区画規模の伸長を行っていたと考える。

東西約 35 ｍの区画は前時代にはみられない。約 50 ｍ四方の区画はＶ２期に SD70 より西範囲で成立していた可能性は高い。

区画規模からみると、約 50 ｍ四方と約 35 ｍの組合せにより構成しており、前時代を踏襲しつつ拡張したと考える。



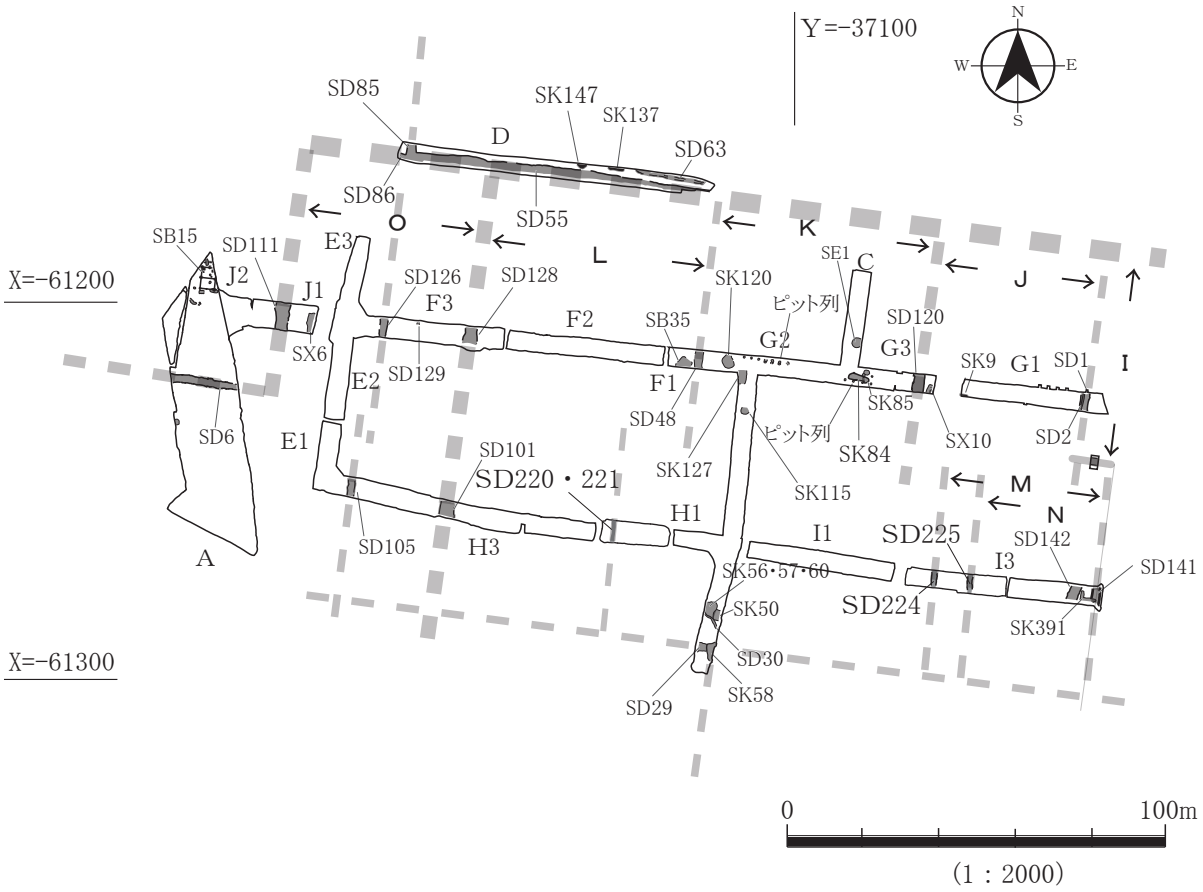
第 74 図　Ｖ３期主要遺構分布図（１/2,000）

４．戦国時代（Ⅵ期）（第 75 図）

今年度の調査ではＨ２区の SD220・221、Ｉ２区の SD224 新と SD225 があげられる。

区画の範囲としてＤ区の SD55 の延長と、Ｈ 10 年度試掘調査により確認された溝（Ｉ）を南北にした約 60 ｍに、SD120、SD １（Ｊ）を東西にした区画が復元できる。さらに西には、SD120 と SD48（Ｋ）間が約 60 ｍ、SD48 と SD128（Ｌ）間約 60 ｍが復元できる。南側のＩ３区 SD141 と SD224 新（Ｍ）間で約 45 ｍを測る。SD220・221 とＳＤ 101 も約 45 ｍである。Ｈ３区の SD101 からＩ３区 SD141 が約 180 ｍであり、45 ｍの区画が４面成立することとなる。

区画規模は約 60 ｍと約 45 ｍを基準としており、前時代の約 50 ｍ、35 ｍといった規模からの拡大がみられる。旧来の区画規模は SD141、225 間（Ｎ）、SD128、SD111 間（Ｏ）といった位置にあてはまり、新旧の区画規模が混在している。



第 75 図　Ⅵ期主要遺構分布図（１/2,000）

５．まとめ

区画溝は発掘調査範囲から検討する限り、かなり計画的に配置されている。区画方向は鎌倉時代（Ｖ１期）から踏襲したと理解できるが、区画規模はＶ１～Ｖ３期とⅥ期の間に改変が認められた。この改変の契機については様々な要因が推測でき、今後の課題として検討していく必要がある。

竪穴住居（ＳＢ）

番号	地区	層位	時期	平面形	規模(m)			備考	図
					長軸	短軸	深さ		
214	1(H2)区	Ⅵ層	Ⅱ期	隅丸方形	3.3	2.17	0.23		23図
215	1(H2)区	Ⅵ層	Ⅱ期	隅丸方形	2.8	2.5	0.15		24図
216	2(I2)区	Ⅵ層	Ⅲ1期	隅丸方形	3.25	2.8	0.2		44図
153	H3区	Ⅵ層		隅丸方形				既報告書にあり	22図

土坑（ＳＫ）

番号	地区	層位	時期	平面形	規模(m)			備考	図
					長軸	短軸	深さ		
420	1(H2)区	Ⅳ層	Ⅵ期以降	不整形	0.63	0.5	0.11		10図
421	1(H2)区	Ⅳ層	Ⅵ期以降	不整形	0.79	0.78	0.08		11図
422	1(H2)区	Ⅳ層	Ⅴ期以降	楕円形	1.72	0.52	0.06		11図
423	1(H2)区	Ⅳ層	Ⅶ期以前	楕円形	1.2	0.35	0.18		11図
424	1(H2)区	Ⅳ層	Ⅶ期以前	不明	0.35	—	0.14		11図
425	1(H2)区	Ⅳ層	Ⅶ期以前	不明	0.68	0.4	0.14		11図
426	1(H2)区	Ⅳ層	Ⅵ期以前	不明	—	—	—		12図
427	1(H2)区	Ⅳ層	Ⅴ～Ⅵ期	不整形	1.14	0.74	0.1		13図
428	1(H2)区	Ⅳ層	Ⅵ期以降	楕円形	0.6	0.25	0.08		13図
429	1(H2)区	Ⅳ層	Ⅶ期以前	楕円形	0.54	0.24	0.17		14図
430	1(H2)区	—		不明	—	—	0.12		
431	1(H2)区	Ⅵ層	Ⅳ期以前	楕円形	1.37	0.42	0.15		27図
432	1(H2)区	Ⅵ層	Ⅱ1期以前	楕円形	0.54	0.35	0.18		28図
433	1(H2)区	Ⅵ層	Ⅳ期以前	楕円形	0.54	0.32	0.06		29図
434	1(H2)区	Ⅵ層	Ⅳ期以前	楕円形	0.52	0.4	0.04		29図
435	1(H2)区	Ⅵ層	Ⅳ期以前	円形	0.62	0.59	0.04		30図
436	1(H2)区	Ⅳ層	Ⅶ期以前	不明	1	0.17	0.17		15図
437	1(H2)区	Ⅳ層	Ⅶ期以前	楕円形	1	0.25	0.07		16図
438	1(H2)区	Ⅳ層	Ⅵ期以降	楕円形	0.35	0.18	0.07		17図
439	1(H2)区	Ⅳ層	Ⅵ期以前	不明	0.88	0.45	0.07		18図
440	1(H2)区	Ⅳ層	Ⅵ期以降	楕円形	1.42	0.25	0.22		19図
441	1(H2)区	Ⅵ層	Ⅳ期以前	楕円形	1.53	0.5	0.13		31図
442	1(H2)区	Ⅳ層	Ⅵ期以降	不明	—	—	0.21		
443	2(I2)区	Ⅵ層	Ⅱ期以降	楕円形	0.42	0.4	0.14		40図
444	2(I2)区	Ⅵ層	Ⅴ3期以降	楕円形	0.93	0.82	0.13		61図
445	2(I2)区	Ⅵ層	Ⅳ1期	楕円形	0.85	0.66	0.19		
446	2(I2)区	Ⅵ層	Ⅴ3期以降	楕円形	0.5	0.48	0.27		61図
447	2(I2)区	Ⅵ層	Ⅴ2期以降	楕円形	0.9	0.75	0.24		62図
448	2(I2)区	Ⅵ層	Ⅴ2期以降	楕円形	0.6	0.4	0.35		62図
449	2(I2)区	Ⅵ層	Ⅴ3期以降	—	—	0.3	0.29	重複のため不明	
450	2(I2)区	Ⅵ層	Ⅴ2期以降	楕円形	0.65	0.55	0.15		63図
451	2(I2)区	Ⅵ層	Ⅴ2期以降	楕円形	0.68	0.42	0.17		46･63図
452	2(I2)区	Ⅵ層	Ⅴ2期以降	楕円形	0.52	0.2	0.12		64図
453	2(I2)区	Ⅵ層	Ⅴ1期以降	楕円形	1.56	0.7	0.51		52図
454	2(I2)区	Ⅵ層	—	—	0.5	0.35	0.24		52図
455	2(I2)区	Ⅵ層			2.3	1.55	0.33		66･67図
456	2(I2)区	Ⅵ層	Ⅲ～Ⅳ期	楕円形	0.94	0.42	0.3		48図
457	2(I2)区	Ⅵ層	Ⅱ期以降	楕円形	0.66	0.55	0.36		40図
458	2(I2)区	Ⅵ層	Ⅳ期	隅丸方形	0.78	0.66	0.19		47図
459	2(I2)区	Ⅵ層			1.82	0.65	0.17		
460	2(I2)区	Ⅵ層	Ⅱ期以降	楕円形	0.44	0.4	0.14		40図
461	2(I2)区	Ⅵ層			0.51	0.48	0.19		41図
462	2(I2)区	Ⅵ層	Ⅳ1期	楕円形	1.3	0.98	0.26		47図
463	2(I2)区	Ⅵ層			0.72	0.43	—		
464	2(I2)区	Ⅵ層			0.87	0.67	0.17		41図
465	2(I2)区	Ⅵ層	Ⅴ3期以降	楕円形	0.7	0.57	0.08		65図
466	1(H2)区		Ⅱ1期以降	—	—	—	—		

その他（ＳＸ）

番号	地区	層位	時期	平面形	規模(m)			備考	図
					長軸	短軸	深さ		
35	2(I2)区	Ⅵ層	Ⅴ1期	隅丸方形	1.74	2	0.22		66図

柱穴（Ｐｉｔ）

番号	地区	層位	時期	平面形	規模(cm)		備考	図
					径	深さ		
1790	1(H2)区	Ⅳ層		隅丸方形	32	9		
1791	1(H2)区	Ⅳ層	Ⅳ1期	楕円形	64	14		20図
1792	1(H2)区	Ⅳ層		楕円形	40	4		
1793	1(H2)区	Ⅳ層		隅丸方形	40	3		
1794	1(H2)区	Ⅳ層		楕円形	31	5		
1795	1(H2)区	Ⅳ層		楕円形	42	7		
1796	1(H2)区	Ⅳ層		円形	38	10		
1797	1(H2)区	Ⅳ層		楕円形	28	18		
1798	1(H2)区	Ⅳ層		楕円形	43	12		
1799	1(H2)区	Ⅳ層		楕円形	28	9		
1800	1(H2)区	Ⅳ層	Ⅴ3期以降	円形	32	5		
1801	1(H2)区	Ⅳ層		隅丸方形	64	7		
1802	1(H2)区	Ⅳ層		円形	33	8		
1803	1(H2)区	Ⅳ層		—	23	9		
1804	1(H2)区	Ⅵ層		円形	24	10		
1805	1(H2)区	Ⅵ層		—	42	12	SB215床面	
1806	1(H2)区	Ⅳ層		—	42	12		
1807	1(H2)区	Ⅳ層		—	37	4		
1808	1(H2)区	Ⅳ層		楕円形	35	16		
1809	1(H2)区	Ⅳ層		楕円形	38	14		
1810	1(H2)区	Ⅳ層		—	—	5		
1811	1(H2)区	Ⅳ層		楕円形	85	45		
1812	1(H2)区	Ⅳ層		楕円形	32	7		
1813	1(H2)区	Ⅳ層		円形	40	9		
1814	1(H2)区	Ⅳ層		円形	18	7		
1815	1(H2)区	Ⅳ層	Ⅳ1期	円形	26	19		
1816	1(H2)区	Ⅳ層		楕円形	32	12		
1817	1(H2)区	Ⅵ層		円形	38	18	PIT列1	25図
1818	1(H2)区	Ⅵ層		楕円形	27	26	PIT列1	25図
1819	1(H2)区	Ⅵ層		楕円形	50	16		
1820	1(H2)区	Ⅵ層		円形	41	10	PIT列1	25図
1821	1(H2)区	Ⅵ層		楕円形	41	18	PIT列1	25図
1822	1(H2)区	Ⅵ層		隅丸方形	47	9		
1823	1(H2)区	Ⅵ層		円形	14	7		
1824	1(H2)区	Ⅵ層		円形	20	6		
1825	1(H2)区	Ⅵ層		円形	30	8		

番号	地区	層位	時期	平面形	規模(cm)		備考	図
					径	深さ		
1826	1(H2)区	Ⅵ層		円形	23	3		
1827	1(H2)区	Ⅵ層		楕円形	30	7	PIT列1	
1828	1(H2)区	Ⅵ層		隅丸方形	28	11	SB214主柱穴	23図
1829	1(H2)区	Ⅵ層		円形	30	11	SB214主柱穴	23図
1830	1(H2)区	Ⅵ層		円形	24	11	SB214主柱穴	23図
1831	1(H2)区	Ⅵ層		円形	39	20		
1832	1(H2)区	Ⅵ層	—	—	30	26		
1833	1(H2)区	Ⅵ層	—	—	30	23		
1834	2(I2)区	Ⅵ層		円形	31	12	根石状の石あり	
1835	2(I2)区	Ⅵ層		円形	28	13	根石状の石あり	
1836	2(I2)区	Ⅵ層		円形	18	10		
1837	2(I2)区	Ⅵ層		円形	23	4		
1838	2(I2)区	Ⅵ層		円形	38	13		
1839	2(I2)区	Ⅵ層		円形	32	13		
1840	2(I2)区	Ⅵ層		楕円形	27	10		
1841	2(I2)区	Ⅵ層		楕円形	35	9		
1842	2(I2)区	Ⅵ層	Ⅳ1期	円形	12	9	土器出土	49図
1843	2(I2)区	Ⅵ層	Ⅳ1期	楕円形	24	2	土器出土	49図
1844	2(I2)区	Ⅵ層	Ⅳ1期	円形	33	18	土器出土	50図
1845	2(I2)区	Ⅵ層			20	5		
1846	2(I2)区	Ⅵ層		円形	27	16		
1847	2(I2)区	Ⅵ層		円形	12	—		
1848	2(I2)区	Ⅵ層		円形	10	8		
1849	2(I2)区	Ⅵ層		円形	13	6		
1850	2(I2)区	Ⅵ層		楕円形	23	10		
1851	2(I2)区	Ⅵ層		楕円形	25	14		
1852	2(I2)区	Ⅵ層		楕円形	22	10		
1853	2(I2)区	Ⅵ層		円形	18	15		
1854	2(I2)区	Ⅵ層		—	38	10		
1855	2(I2)区	Ⅵ層		—	32	18		
1856	2(I2)区	Ⅵ層		—	20	10		
1857	2(I2)区	Ⅵ層		—	18	14		
1858	2(I2)区	Ⅵ層		—	42	15		
1859	2(I2)区	Ⅵ層		円形	35	11		
1860	2(I2)区	Ⅵ層		円形	30	6		
1861	2(I2)区	Ⅵ層		楕円形	30	5		

柱穴（Ｐｉｔ）

番号	地区	層位	時期	平面形	規模(cm)		備考	図
					径	深さ		
1862	2(I2)区	Ⅵ層		—	37	21		
1863	2(I2)区	Ⅵ層		楕円形	19	2		
1864	2(I2)区	Ⅵ層		—	37	4		
1865	2(I2)区	Ⅵ層		楕円形	26	6		
1866	2(I2)区	Ⅵ層		円形	23	5		
1867	2(I2)区	Ⅵ層		楕円形	17	9		
1868	2(I2)区	Ⅵ層		楕円形	40	20		
1869	2(I2)区	Ⅵ層		楕円形	46	10		
1870	2(I2)区	Ⅵ層		楕円形	30	11		
1871	2(I2)区	Ⅵ層		円形	23	13		
1872	2(I2)区	Ⅵ層		円形	25	7		
1873	2(I2)区	Ⅵ層		円形	26	10		
1874	2(I2)区	Ⅵ層		円形	32	16		
1875	2(I2)区	Ⅵ層		円形	20	12		
1876	2(I2)区	Ⅵ層		楕円形	32	9		
1877	2(I2)区	Ⅵ層		楕円形	38	17		
1878	2(I2)区	Ⅵ層		楕円形	33	14		
1879	2(I2)区	Ⅵ層		楕円形	50	17		
1880	1(H2)区	Ⅵ層	Ⅱ1期	円形	26	9	SB214主柱穴	23図
1881	1(H2)区	Ⅵ層		楕円形	43	19		
1882	2(I2)区	Ⅵ層		楕円形	39	7		
1883	2(I2)区	Ⅵ層		楕円形	27	9		
1884	2(I2)区	Ⅵ層		円形	24	13		
1885	2(I2)区	Ⅵ層		隅丸方形	38	7		
1886	2(I2)区	Ⅵ層		—	31	12		
1887	2(I2)区	Ⅵ層		円形	40	12		
1888	2(I2)区	Ⅵ層		—	25	10		
1889	2(I2)区	Ⅵ層		楕円形	53	10		
1890	2(I2)区	Ⅵ層		円形	33	12		
1891	2(I2)区	Ⅵ層		円形	23	5		
1892	2(I2)区	Ⅵ層		円形	14	10		

溝（ＳＤ）

番号	地区	層位	時期	幅(cm)	断面形	深さ(cm)	備考	図
215	1(H2区)	Ⅳ層	Ⅵ期以降	40	逆台形	10		
216	1(H2区)	Ⅳ層	Ⅵ期以降	120	逆台形	20		
217	1(H2区)	Ⅳ層	Ⅵ期以降	20	逆台形	10		
218	1(H2区)	Ⅳ層	Ⅵ期以降	45	逆台形	7		
219	1(H2区)	Ⅵ層	Ⅳ期以前	123	逆台形	20		
220	1(H2区)	Ⅵ層	Ⅵ期以降	57	逆台形	34		
221	1(H2区)	Ⅵ層	Ⅵ期以降	100	逆台形	28		重複残存部分
222	1(H2区)	Ⅵ層	Ⅵ期以降	118	逆台形	36		
223	2(I2)区	Ⅵ層	Ⅴ2期	163	逆台形	14		
224	2(I2)区	Ⅵ層	Ⅴ1～Ⅵ期	140	逆台形	60		
225	2(I2)区	Ⅵ層	Ⅴ3～Ⅵ期	135	逆台形	60		
226	2(I2)区	Ⅴ層	Ⅱ1期	73	逆台形	12		
227	2(I2)区	Ⅴ層	Ⅱ1期	98	U字形	33		
228	2(I2)区	Ⅵ層	Ⅴ2期	147	逆台形	30		

遺物観察表

遺構名	番号	地区	器種	器形	分類・時期	法量(cm)( )内は復原値・残存値			形態・手法の特徴
						口径	器高	底径	
SD215	1	H2	古瀬戸	擂鉢	後Ⅳ新	—	(1.7)	—	
SD222	2	H2	土製品	土錘					
SK420	3	H2	土製品	土錘					
SK427	4	H2	須恵器	椀	9世紀頃？	—	(1.7)	—	
P1791	5	H2	灰釉陶器	椀B	東濃産 Ⅶ古～中段階	(2.2)	(6.9)		回転ナデ、糸切り痕
SB214	6	H2	土師器	高杯？		(4.7)	—		内面　ハケメ調整
	7	H2	土製品	土錘					
SK432	8	H2	土師器	高杯？		—	(1.6)	—	
P1811	9	H2	土師器	S字甕	BC類	—	(1.4)	—	
自然流路 落ち込み	10	I2	土師器	くの字甕	フォーラム Ⅰ～Ⅱ期	(12.9)	(14.5)	—	外体部ハケメ調整
	11	I2	土師器	くの字甕	フォーラム Ⅰ～Ⅱ期	(13.4)	(13.8)	—	外体部ハケメ調整
	12	I2	土師器	広口壺	フォーラム Ⅰ～Ⅱ期	—	(2.8)	—	棒状付文、赤彩あり
	13	I2	土師器	壺	フォーラム Ⅰ～Ⅱ期	—	(7.2)	—	外体部　鋸歯文
	14	I2	土師器	高杯	フォーラム Ⅱ～Ⅲ期	—	(6.2)	—	
	15	I2	土師器	高杯		—	(6.2)	—	
	16	I2	土師器	高杯		—	(6.4)	—	
	17	I2	土師器	高杯		—	(4.1)	—	
SD227	18	I2	土師器	S字甕	A類	—	(1.8)	—	体部ハケメ調整
	19	I2	土師器	S字甕	BC類	—	(2.0)	—	体部ハケメ調整
	20	I2	土師器	S字甕	BC類	—	(2.9)	—	体部ハケメ調整
	21	I2	土師器	S字甕	D類	(13.1)	(4.6)	—	外体部ハケメ調整
	22	I2	土師器	S字甕	D類	—	(2.6)	—	体部ハケメ調整
	23	I2	土師器	S字甕	D類	—	(2.9)	—	体部ハケメ調整
	24	I2	土師器	S字甕 (脚台)		—	(1.6)	—	
	25	I2	土師器	S字甕 (脚台)		—	(1.7)	—	
	26	I2	土師器	S字甕		—	(7.6)	—	外体部ハケメ調整 内　指オサエ後ナデ調整
	27	I2	土師器	広口壺		—	(1.5)	—	
	28	I2	土師器	壺　頸部		—	(4.4)	—	
	29	I2	土師器	壺	小型丸底 フォーラムⅤ期	(9.7)	7.9	—	内指オサエ、口縁部ナデ 外底部ヘラ削り後ナデ
	30	I2	土師器	壺	小型丸底 フォーラムⅤ期	8.3	7.2	—	
	31	I2	土師器	高杯		—	(5.0)	—	
	32	I2	土師器	高杯		—	(5.2)	—	
	33	I2	土師器	小型器台		(10.0)	(2.4)	—	
	34	I2	土師器	高杯		—	(4.7)	—	
	35	I2	土師器	鍋か甑 把手		—	—	—	
P1886	36	I2	土師器	高杯		19.8	(6.2)	—	
SB217	37	I2	須恵器	甕体部		—	—	—	
	38	I2	土師器	高杯		—	(4.8)	—	
	39	I2	土師器 (ロクロ)	椀か皿		—	(1.1)	4.7	
SK445	40	I2	灰釉陶器	椀	東濃産　椀B Ⅶ期中～新	—	(2.0)	—	
	41	I2	灰釉陶器	皿	東濃産 Ⅶ期新～Ⅷ期古	—	(1.3)	—	
	42	I2	灰釉陶器	皿	東濃産 Ⅶ期古～中	12.5	2.6	6.3	
SK458	43	I2	灰釉陶器	椀	東濃産　椀A Ⅶ期	—	(2.1)	—	
SK462	44	I2	灰釉陶器	段皿	東濃産 Ⅶ期古～中	—	(1.7)	—	
P1842	45	I2	灰釉陶器	皿	東濃産 Ⅶ期中～新	(11.4)	2.7	6.6	
P1843	46	I2	灰釉陶器	皿	東濃産 Ⅶ期古～中	11.7	2.4	6.3	
P1844	47	I2	土師器 (ロクロ)	皿	脚高　高台	16.3	3.8	8.7	

遺構名	番号	地区	器種	器形	分類・時期	法量(cm)( )内は復原値・残存値			形態・手法の特徴
						口径	器高	底径	
SD223	48	I2	山茶碗	碗	東濃型 大洞東1	(13.3)	(2.4)	—	
	49	I2	山茶碗	碗	東濃型 大畑大洞4	—	(4.0)	(4.7)	回転ナデ、底部糸切り
	50	I2	灰釉陶器	皿	東濃産 Ⅶ期新～Ⅷ期古	(12.6)	(1.3)	—	
	51	I2	灰釉陶器	深椀	東濃産 Ⅶ期	—	(2.5)	(6.0)	
SD224	52	I2	山茶碗	皿	尾張型 第6型式	(8.0)	(1.7)	—	回転ナデ
	53	I2	山茶碗	皿	尾張型 第6型式	(8.7)	(1.3)	(6.0)	回転ナデ、底部糸きり
	54	I2	山茶碗	碗	尾張型 第6型式	—	(1.5)	(6.6)	回転ナデ、底部不定方向のナデ
	55	I2	山茶碗	碗	尾張型 第6型式	—	(2.1)	(6.2)	回転ナデ、底部糸きり
	56	I2	山茶碗	碗	尾張型 第6型式	—	(3.7)	(6.2)	回転ナデ、底部糸きり
	57	I2	山茶碗	碗	尾張型 第6型式	—	(4.3)	(5.3)	回転ナデ
	58	I2	山茶碗	碗	尾張型	(14.6)	(3.4)	—	回転ナデ
	59	I2	山茶碗	碗	尾張型 第6型式	(13.9)	5.3	(7.0)	
	60	I2	山茶碗	碗	尾張型 第6型式	—	(3.5)	(6.4)	回転ナデ、底部糸きり
	61	I2	山茶碗	碗	北部系	—	(2.0)	(6.0)	回転ナデ
	62	I2	山茶碗	碗	東濃型 第6型式	—	(2.0)	(6.0)	回転ナデ
	63	I2	山茶碗	碗	東濃型 大洞東1	—	(1.3)	(3.8)	回転ナデ、底部糸きり
	64	I2	山茶碗	片口鉢	尾張型	—	(4.7)	(12.9)	回転ナデ、静止ヘラ削り
	65	I2	古瀬戸	擂鉢	後Ⅳ期新段階	—	(4.0)	—	底部糸きり
	66	I2	大窯	天目茶碗	大窯第1段階	—	(1.2)	—	加工円盤の可能性あり
	67	I2	古瀬戸	不明		—	(1.7)	—	
	68	I2	土師器	皿	C2類	—	(1.5)	—	
	69	I2	山茶碗	碗	尾張型 第5型式	—	(2.3)	(7.1)	回転ナデ
	70	I2	山茶碗	碗	尾張型 第5型式	—	(2.7)	(7.7)	回転ナデ
	71	I2	山茶碗	碗	尾張型 第6型式	—	(2.9)	(6.4)	回転ナデ、底部糸切り
	72	I2	山茶碗	碗	東濃型 大畑大洞新	—	(2.0)	(4.0)	回転ナデ、底部糸きり
	73	I2	古瀬戸	花瓶	後期	—	(3.1)	—	
	74	I2	灰釉陶器	椀	東濃産 Ⅷ期古～中	—	(1.9)	(6.7)	回転ナデ、底部糸きり
	75	I2	灰釉陶器	椀	東濃産 Ⅶ期古～中	—	(1.5)	(7.0)	回転ナデ、底部糸切り 転用
	76	I2	灰釉陶器	椀	東濃産 Ⅶ期古～中	—	(2.3)	—	回転ナデ
	77	I2	灰釉陶器	皿	東濃産 Ⅶ期古～中	—	(1.6)	—	回転ナデ、底部糸きり
	78	I2	土師器	甕	清郷型	—	(3.7)	—	口縁部横ナデ
	79	I2	不明						叩き成形
SD228	80	I2	山茶碗	碗	東濃型 大洞東1	(12.7)	3.25	(3.6)	
	81	I2	山茶碗	碗	東濃型 大洞東1	(12.2)	3.1	(3.5)	
	82	I2	古瀬戸	卸目付大皿	後Ⅳ期古段階	—	(3.0)	—	
	83	I2	土師器	皿	C1	(8.0)	1.2	—	
	84	I2	須恵器	小型高杯	7c中頃	—	1.1	(9.9)	
SD225	85	I2	土師器	皿	C2	6.6	1.8	—	
	86	I2	土師器	皿	C2	7	1.6	—	
	87	I2	土師器	皿	C2	7	1.8	—	
	88	I2	土師器	皿	C2	7.9	1.5	—	
	89	I2	土師器	皿	C2	7.6	1.6	—	
	90	I2	土師器	皿	C2	(7.5)	(1.4)	—	
	91	I2	土師器	皿	C2	7.3	1.5	—	
	92	I2	土師器	皿	C2	7.9	1.7	—	

遺構名	番号	地区	器種	器形	分類・時期	法量(cm)( )内は復原値・残存値			形態・手法の特徴
						口径	器高	底径	
	93	I2	土師器	皿	C2	7.7	1.75	—	
	94	I2	土師器	皿	C2	7.9	1.7	—	
	95	I2	土師器	皿	C2	7.8	1.7	—	
	96	I2	土師器	皿	C2	8	1.6	—	
	97	I2	土師器	皿	C2	7.8	1.2	—	
	98	I2	土師器	皿	C2	7.7	1.6	—	
	99	I2	土師器	皿	C2	7.9	1.3	—	
	100	I2	土師器	皿	C2	7.6	1.3	—	
	101	I2	土師器	皿	C2	8.1	1.6	—	
	102	I2	土師器	皿	C2	8.4	(2.0)	—	
	103	I2	土師器	皿	C2	7.8	1.4	—	
	104	I2	土師器	皿	C2	7.6	1.8	—	
	105	I2	土師器	皿	C2	7.7	2.1	—	
	106	I2	土師器	皿	C2	7.9	1.8	—	
	107	I2	土師器	皿	B2－b	8.6	1.8	—	
	108	I2	土師器	皿	B2－b	(10.1)	(2.1)	—	
	109	I2	土師器	皿	B2－b	9.6	2	—	内「の」の字状ナデ後一方向ナデ
	110	I2	土師器	皿	B2－b	10	2.1	—	内「の」の字状ナデ
	111	I2	土師器	皿	B2－b	9.2	2.1	—	
	112	I2	土師器	皿	B2－b	10.5	1.7	—	内「の」の字状ナデ
	113	I2	土師器	皿	B2－b	9.9	2	—	内「の」の字状ナデ
	114	I2	土師器	皿	B2－b	9.4	2.2	—	内「の」の字状ナデ
	115	I2	土師器	皿	B2－b	10.1	1.8	—	内「の」の字状ナデ
	116	I2	土師器	皿	B2－b	10.2	2	—	内「の」の字状ナデ
	117	I2	土師器	皿	B2－b	10.1	1.85	—	
	118	I2	土師器	皿	B2－b	(9.6)	1.8	—	
	119	I2	土師器	皿	B2－b	(9.6)	1.4	—	
	120	I2	土師器	皿	B2－b	10.5	2.1	—	
	121	I2	土師器	皿	B2－b	12	2	—	
	122	I2	土師器	皿	B2－b	12.1	2.2	—	内「の」の字状ナデ 外口縁部横ナデ
	123	I2	土師器	皿	B2－b	12.9	2.6	—	
	124	I2	土師器	皿	B2－b	12.8	2.5	—	内「の」の字状ナデ
SD225	125	I2	土師器	皿	B2－b	(12.2)	2.2	—	
	126	I2	土師器	皿	B2－b	12.1	2.2	—	内「の」の字状ナデ 外口縁部横ナデ
	127	I2	土師器	皿	B2－b	12.5	2.4	—	「の」の字状ナデ
	128	I2	土師器	皿	B2－a	12.5	2.4	—	内円周ナデ2段 外口縁部横ナデ
	129	I2	土師器	皿	B2－b	13.1	2.5	—	
	130	I2	土師器	皿	B2－b	13.3	2.2	—	
	131	I2	土師器	皿	B2－b	(15)	2.4	—	
	132	I2	土師器	皿	B2－b	(18.0)	3	—	
	133	I2	土師器	皿	B2－a	(12.0)	2.2	—	外口縁部横ナデ
	134	I2	土師器	皿	B2－a	13.3	2.2	—	外口縁部横ナデ
	135	I2	土師器	皿	B2－a	(16.6)	(1.7)	—	外口縁部横ナデ
	136	I2	土師器	皿	B2－a	(18.2)	2.6	—	外口縁部横ナデ
	137	I2	土師器	皿	B2－a	(19.8)	2.6	—	外口縁部横ナデ
	138	I2	土師器	皿	B2－a	(17.7)	(3.0)	—	外口縁部横ナデ
	139	I2	土師器	皿	B2－a	12	2.2	—	内「の」の字状ナデ 外口縁横ナデ
	140	I2	土師器	皿	B2－b	13.4	2.2	—	内「の」の字状ナデ
	141	I2	土師器	皿	B2－a	18.9	2.9	—	内「の」の字状ナデ 外口縁部横ナデ
	142	I2	土師器	皿	B2－a	18.4	2.8	—	内円周ナデ2段 外口縁部横ナデ
	143	I2	土師器	皿	B2－a	18.9	2.2	—	外口縁部横ナデ
	144	I2	土師器	皿	B2－a	(17.6)	(2.5)	—	外口縁部横ナデ
	145	I2	土師器	皿	—				タール付着のため不明
	146	I2	土師器	皿	B1	13.5	1.1	—	外口縁部横ナデ
	147	I2	土師器	皿	B1	17.4	2.8	—	外口縁部横ナデ
	148	I2	古瀬戸	天目茶碗	後Ⅳ期新段階	—	(2.1)	—	
	149	I2	山茶碗	碗	東濃型 脇之島3	—	(1.2)	—	回転ナデ、底部糸切り
	150	I2	灰釉陶器	碗	東濃産 Ⅶ期古～中	—	(2.8)	—	回転ナデ
	151	I2	灰釉陶器	椀	東濃産 Ⅶ期古～中	—	(3.6)	—	

遺構名	番号	地区	器種	器形	分類・時期	法量(cm)( )内は復原値・残存値			形態・手法の特徴
						口径	器高	底径	
SD225	152	I2	山茶碗	碗	東濃型 生田2	(9.8)	(2.3)	—	
	153	I2	山茶碗	碗	尾張型 第5型式	—	(1.9)	—	
	154	I2	山茶碗	碗	東濃型 白土原1	—	(1.3)	—	回転ナデ
	155	I2	古瀬戸	天目茶碗	後Ⅳ期新段階	—	(5.1)	—	
	156	I2	土師器	皿	C2	(6.7)	(1.1)	—	
	157	I2	灰釉陶器	椀	東濃産 Ⅶ期古～中	—	(2.4)	(5.8)	回転ナデ
	158	I2	灰釉陶器	碗	東濃産 Ⅶ期古～中	—	(1.5)	6.9	回転ナデ
SK447	159	I2	山茶碗	碗	東濃型 明和1	—	(4.7)	(5.0)	
SK455	160	I2	山茶碗	碗	尾張型 第6型式	—	(2.5)	(6.9)	回転ナデ、底部糸切り
	161	I2	灰釉陶器	椀	東濃型	(12.0)	(2.5)	—	
	162	I2	灰釉陶器	椀	東濃産 Ⅶ期古～中	—	(2.5)	—	
	163	I2	須恵器	杯	杯B	—	(1.5)	—	
SX35	164	I2	山茶碗	皿	尾張型 第6型式	(8.5)	1.5	(6.0)	
	165	I2	山茶碗	碗	尾張型 第5型式	—	(3.4)	(6.0)	
	166	I2	山茶碗	碗	尾張型 第6型式	—	(1.9)	(6.0)	
	167	I2	灰釉陶器	椀	東濃産 Ⅶ期	—	(2.2)	—	
	168	I2	灰釉陶器	皿	東濃産 Ⅶ期	—	(1.6)	—	
	169	I2	須恵器	横瓶		—	—	—	
包含層	170	I2	土師器	壺底部		—	(2.7)	(5.2)	
	171	I2	弥生土器	壺か甕底部		—	(3.5)	(6.0)	底部に木痕
	172	I2	土師器	脚部		—	(3.2)	—	
	173	I2	土師器	甕脚部		—	(5.2)	(8.8)	
	174	I2	須恵器	杯	7世紀	—	(2.7)	—	回転ナデ
	175	I2	須恵器	杯	7世紀	—	(3.1)	—	
	176	I2	灰釉陶器	皿	東濃産 Ⅶ期	—	(1.4)	—	
	177	I2	灰釉陶器	椀	東濃産 Ⅶ期	(14.7)	(5.3)	—	
	178	I2	灰釉陶器	椀	東濃産 Ⅶ期	(17.4)	(4.1)	—	
	179	I2	灰釉陶器	椀	東濃産 Ⅶ期	—	(2.2)	(7.6)	
	180	I2	山茶碗	碗	東濃産 Ⅶ期	—	(1.2)	(3.2)	
	181	I2	山茶碗	皿	東濃型 明和1	(7.9)	(1.6)	(5.0)	回転ナデ、底部糸切り
	182	I2	山茶碗	碗	東濃型 明和～大畑大洞	—	(3.1)	—	
	183	I2	山茶碗	碗	尾張型 第5型式	—	(3.4)	—	
	184	I2	山茶碗	碗	尾張型 第6型式	—	(1.7)	(6.6)	
	185	I2	山茶碗	碗	尾張型 第6型式型式	—	(3.0)	(6.8)	回転ナデ
	186	I2	山茶碗	碗	東濃型 明和1	—	(2.2)	(4.8)	回転ナデ、底部糸切り
	187	I2	山茶碗	碗	東濃型 明和1	—	(1.1)	(5.0)	回転ナデ、底部糸切り
	188	I2	山茶碗	片口鉢	尾張型 第6型式	(25.5)	(6.5)	—	
	189	I2	古瀬戸	縁釉小皿	後Ⅳ期新段階	(11.8)	(2.3)	(5.3)	
	190	I2	古瀬戸	擂鉢	後Ⅳ期新段階	—	(3.5)	—	
	191	I2	古瀬戸	花瓶	後期	—	(3.6)	—	
	192	I2	古瀬戸	天目茶碗	登り窯4	—	(2.7)	—	
	193	I2	土師器	皿	C2	7.3	1.3	—	
	194	I2	土師器	皿	C2	(7.2)	1.1	—	
	195	I2	土師器	皿	C2	(7.0)	1.5	—	

遺構名	番号	地区	器種	器形	分類・時期	法量(cm)( )内は復原値・残存値			形態・手法の特徴
						口径	器高	底径	
包含層	196	I2	土師器	皿	C2	7	1.4	—	
	197	I2	土師器	皿	C2	7.2	1.6	—	
	198	I2	土師器	皿	C2	(8.0)	1.6	—	
	199	I2	土師器	灯明皿	B2−b	9.2	1.9	—	
	200	I2	土師器	皿	C2	(10.0)	(1.9)	—	
	201	I2	土師器	皿	B2−b	10	1.7	—	
	202	I2	土師器	皿	C2	(10.6)	(2.1)	—	
	203	I2	土師器	皿	B2−b	(11.1)	2.2	—	
	204	I2	土師器	皿	B2−b	(12.8)	2.3	—	
	205	I2	土師器	皿	B2−b	(11.2)	2	—	
	206	I2	土師器	皿	B2−b	10.5	1.8	—	
	207	I2	土師器	皿	B2−b	(13.1)	2.7	—	
	208	I2	土師器	皿		(12.7)	1.3	—	
	209	I2	土師器	皿	B2−b	12.5	2.5	—	
	210	I2	土師器	皿	B2−b	(13.2)	2.3	—	
	211	I2	土師器	皿	B2−b	(13.8)	1.9	—	
	212	I2	土師器	皿	B2−a	(16.8)	(2.2)	—	
	213	I2	鉄釘			—	—	—	
	214	I2	大窯	天目茶碗	第1段階	(12)	(6.2)	—	
	215	I2	古瀬戸	天目茶碗	後Ⅳ新段階	—	(1.0)	4.9	
	216	I2	土師器	皿	C2	7.3	1.5	—	
	217	I2	土師器	皿	C2	(7.8)	1.5	—	
	218	I2	土師器	皿	C2	(8.4)	1.1	—	
	219	I2	土師器	皿	B2−b	(9.6)	(1.95)	—	
	220	I2	土師器	皿	B2−b	(10.4)	(1.9)	—	
	221	I2	土師器	皿	B2−b	(12.0)	1.7	—	
	222	I2	土師器	皿	B2−b	12.7	2.2	—	
	223	I2	土師器	皿	B2−b	12.2	2.7	—	内「の」の字状ナデ
	224	I2	土師器	皿	B2−b	12	2.8	—	内「の」の字状ナデ
	225	I2	土師器	伊勢型甕		—	(4.5)	—	
	226	I2	土師器	伊勢型甕		—	(4.7)	—	
	227	I2	土師器	鍋か甑把手					
	228	I2	灰釉陶器	椀	東濃産Ⅶ期	(11.6)	(2.7)	—	
	229	I2	灰釉陶器	深椀？大鉢？	東濃産Ⅶ期	—	(2.3)	—	
	230	I2	灰釉陶器	椀	東濃産Ⅶ期	—	(2.0)	(6.6)	
	231	I2	緑釉陶器	椀	東濃産Ⅶ期古～新	—	(0.9)	—	
	232	I2	緑釉陶器	不明	東濃産Ⅶ期				
	233	I2	山茶碗	碗	尾張型	—	(3.3)	(6.5)	
	234	I2	山茶碗	片口鉢		—	(5.1)	(9.9)	
	235	I2	土師器	皿	C2	6.9	1.6	—	
	236	I2	土製品	土鈴		—	—	—	

H23年度　H2区

遺物集計表（1）

遺構名	縄文土器	弥生土器	土師器	須恵器	灰釉陶器	緑釉陶器	山茶碗(南部系)	山茶碗(北部系)	常滑	古瀬戸	大窯	古瀬戸～大窯	土師器皿														焼塩土器	中国青磁	中国白磁	中国染付	中国鉄釉	朝鮮陶磁器	中近世土師器	近世陶磁器	その他陶磁器	銅製品	鉄製品	土製品	石製品	木製品	瓦(古)	瓦(新)	不明	備考
													M1	M2	M3	M4	A類	B1	B2-a	B2-b	B2-c	B類	B2類	C1	C2	D類	体部																
SB153			2																																							
SB214			4																																							
SD215			1																																							
SD216								1																																			
SD218			1																																							
SD219			1																																							
SD220			3					2																																		
SD222			12																																							
SK420			1																																							
SK422			2				2																																			
SK425			1																																							
SK426			8																																							
SK427			2																																							
SK439			4																																							
SK440			1																																							
P1795			1																																							
P1796			1																																							
P1800			1																																							
P1811			2					1																																		
西包含層			4				1																																			
中央包含層			4																																							
東包含層			15																																							
東トレンチ			7	2			1					1																						1									
撹乱			3	1					1																		4							1							1		

H23年度　I 2区

遺構名	縄文土器	弥生土器	土師器	須恵器	灰釉陶器	緑釉陶器	山茶碗(南部系)	山茶碗(北部系)	常滑	古瀬戸	大窯	古瀬戸～大窯	土師器皿														焼塩土器	中国青磁	中国白磁	中国染付	中国鉄釉	朝鮮陶磁器	中近世土師器	近世陶磁器	その他陶磁器	銅製品	鉄製品	土製品	石製品	木製品	瓦(古)	瓦(新)	不明	備考
													M1	M2	M3	M4	A類	B1	B2-a	B2-b	B2-c	B類	B2類	C1	C2	D類	体部																
SB216			40	3	5		1	2				1															3									7							
SD223			36	4	4		4																				6																
SD224上層			73	8	2		36	37	14	1	1	2															16									1							
SD224(礫集中)			1	1			2	2	1	1																	2																
SD224下層			1	4	1		7	4	6			1															4																
SD225上層			32	10	2		1	12	1										4	15			5		8		34									1							
SD225下層		1	183	7	4		19	41				1						1	5	8			25		10		52																
SD226			11																																					1			
SD227			789																								18																
SD227(1層)			47																																								
SD227(2層)			4																																								
SD227(3層)			31																																								
SD228			50	3	2		9	17	2														2		2		13																
SK433			3																																								
SK443			5																																								
SK445			8	2	6			3																			2																
SK446			5	1			1																				2																
SK447			8					6																			3															1		
SK448			3					1																			5																
SK449			1						1																																			
SK450			4					1																																			
SK454			8					1																																			
SK455			91	4	4		11	34																			16																
SK456			12	3	3		3	2																			1																
SK457			13																																								
SK458			16		1		1	1																			4																
SK459			10	1																																						
SK460			1																																							
SK461			5																																							
SK462			40	2	3		5	1																																		
SK463			2	1																																						
SK464			4																																							
SX35			24	1	3		13	7																			3																
SK465			13																								2																
P1794			2																																								
P1821			1																																							
P1822			1																																							

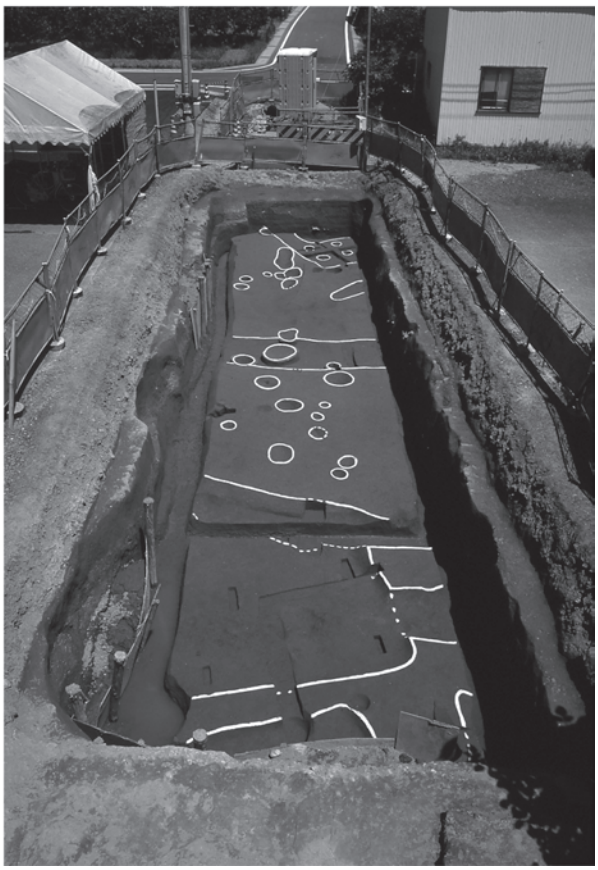
遺物集計表（2）

遺物集計表（3）

遺構名	縄文土器	弥生土器	土師器	須恵器	灰釉陶器	緑釉陶器	山茶碗(南部系)	山茶碗(北部系)	常滑	古瀬戸	大窯	古瀬戸～大窯	土師器皿														焼塩土器	中国青磁	中国白磁	中国染付	中国鉄釉	朝鮮陶磁器	中近世土師器	近世陶磁器	その他陶磁器	銅製品	鉄製品	土製品	石製品	木製品	瓦(古)	瓦(新)	不明	備考
													M1	M2	M3	M4	A類	B1	B2-a	B2-b	B2-c	B類	B2類	C1	C2	D類	体部																
P1825			1				1	1																																		
P1826			1																																							
P1832			7																							2																
P1835			1																																							
P1837			1																																							
P1838			3																																							
P1842				1																																						
P1843				1																																						
P1844			1																																							
P1845			1																																							
P1846			3																																							
P1864			2	1																																						
P1866			1																																							
P1869			2																																							
P1871			2																																							
P1872			1																																							
P1877			2																																							
P1878			2				1					1																															
P1879			2																																							
P1882			1																																							
P1887			4																																							
P1888			1																																							
自然流路(下)			233																																							
自然流路(上)			273				1	1																																	1		
包含層			131	13	12		21	32	5			6						1	11	28			5		10		74									1							
包含層(西)			19	18	14		40	32	4			2								1					3		9																
包含層(中央)			148	25	18		17	33	8	6		2						2	15	32					18		143									1							
包含層(東)			342	16	4		21	32	1			1							3	5					2		28																
東包含層中(一括)																			3	3							1																
遺構検出中(西)			63	4	1		2	7															1																				
遺構検出中(中央)			26				2	1																																			
遺構検出中(東)			12					3															1																		1		
側溝掘削中			206	13	13	4	39	121	8			10							8	11					11		58		4	1							2						
排土 等			21		1		2	10												2							19									1					10		

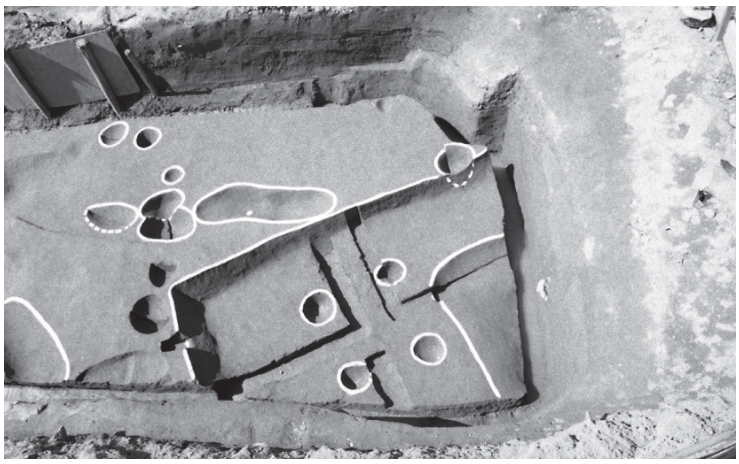
鷺山市場遺跡　H2区全景（北東から）

H2区　Ⅳ層上面遺構完掘（西から）

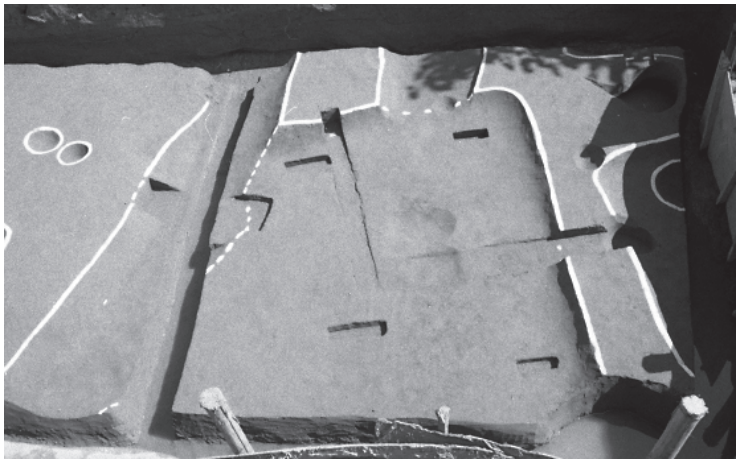


H2区　Ⅵ層上面遺構完掘（西から）

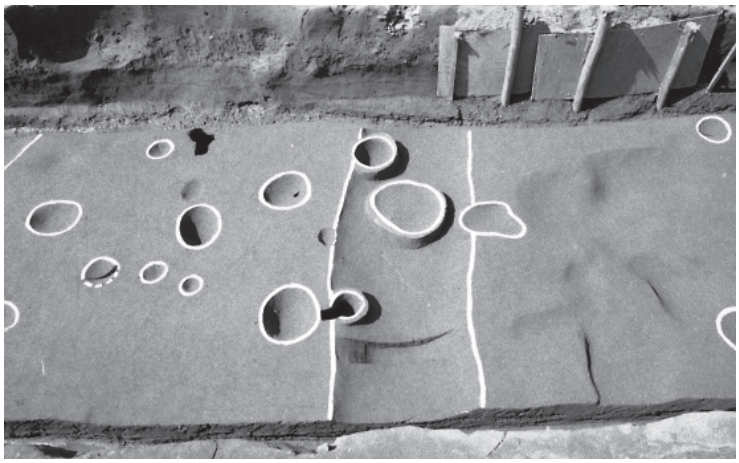
図版２



SB 214（南から）



SB 215（北から）



Pit列
SD 219（南から）

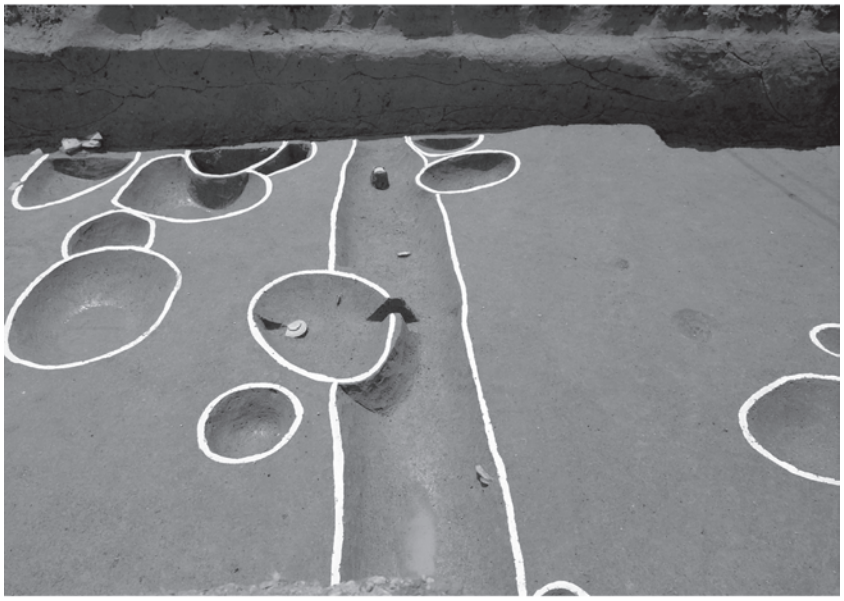
SD 220・221（北から）

鷺山市場遺跡　I2区全景（東から）

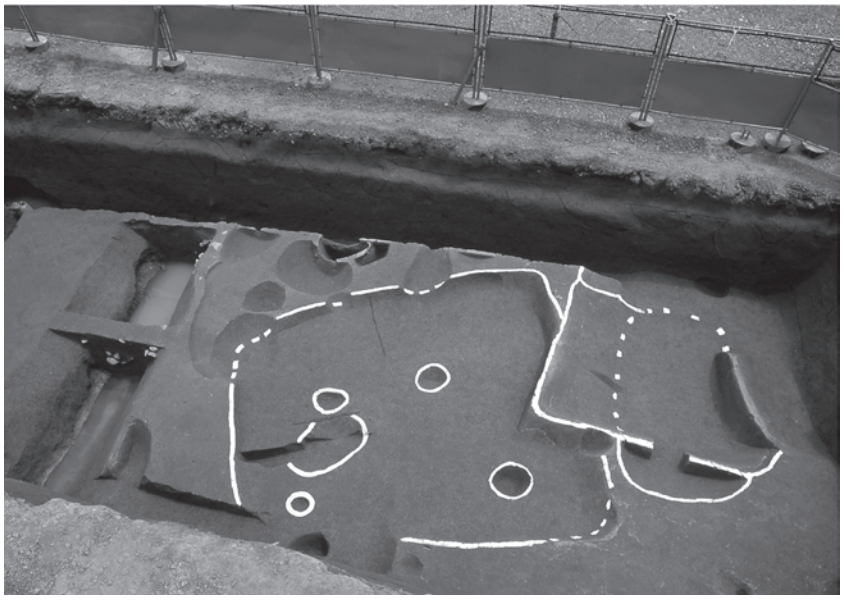
I2区完掘（東から）

図版４

I2区西側全景
（東から）



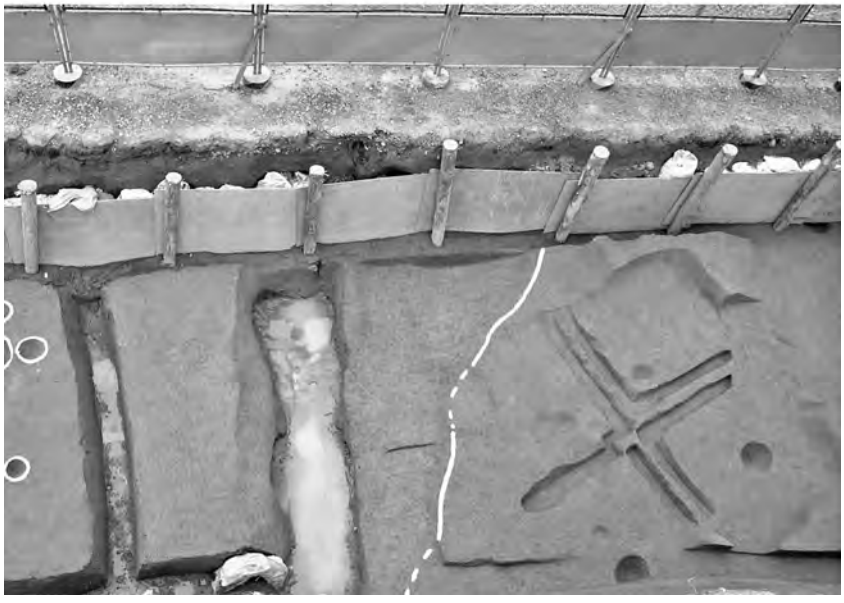
I2区SD 223
（北から）



I2区SB 216
（北から）

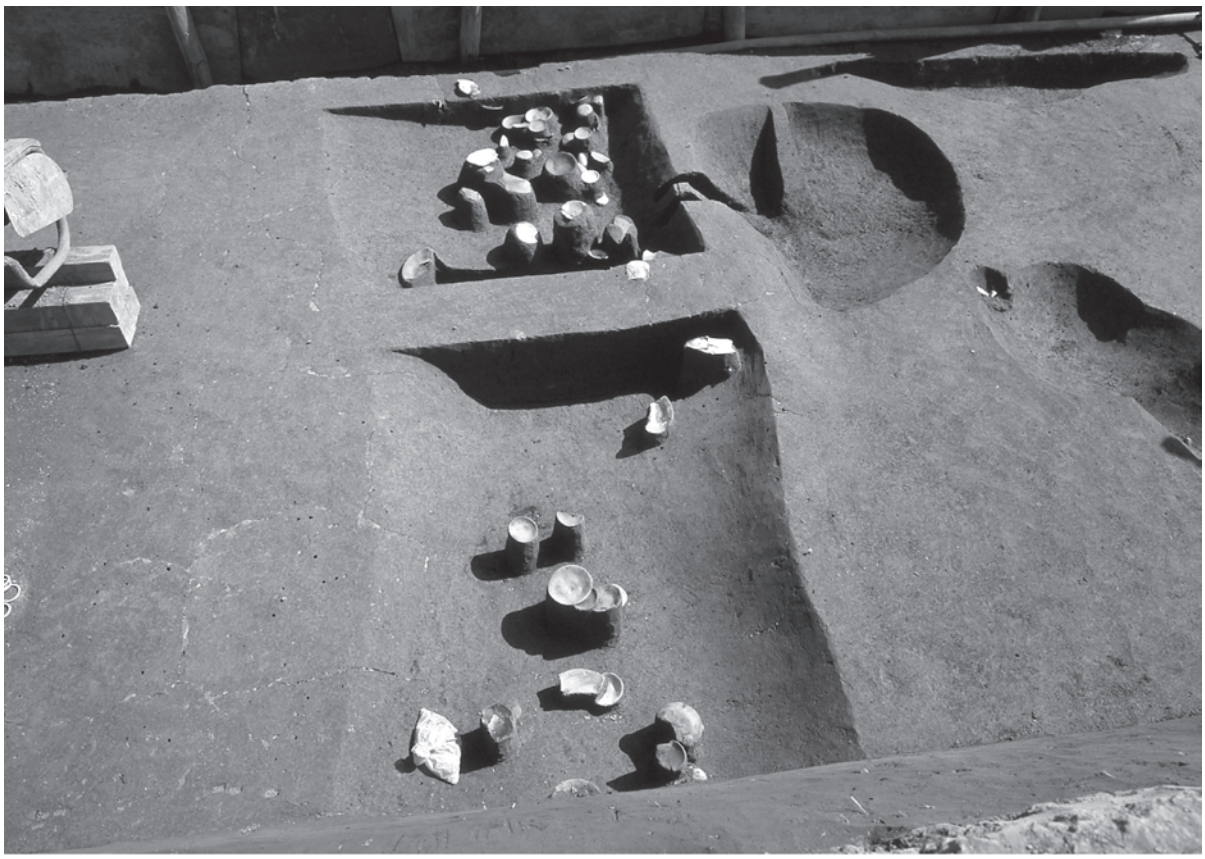
SD 224 礫集中部
（北から）

SD 224 完掘
（北から）



SD 228 完掘
（北から）

図版 6

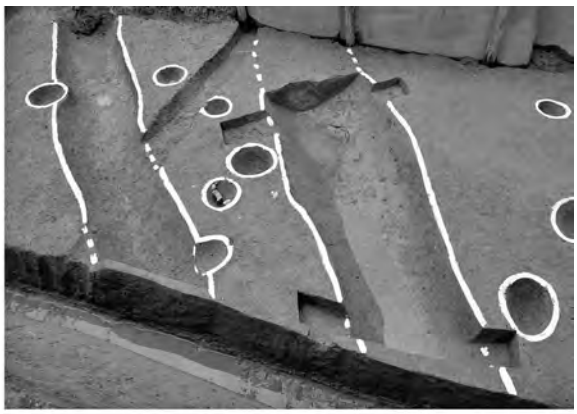


SD 225 土師器皿出土上状況（北から）

SD 224 出土状況北半（東から）

SD 224 出土状況南半（東から）

（上）自然流路あるいは落ち込み（西から）
（右）自然流路あるいは落ち込み
出土状況（西から）



SD 226、227（北から）

SK 445 出土状況（南から）

P 1842 出土状況（南から）

P 1843 出土状況

P 1844 出土状況

10

11

29

30

21

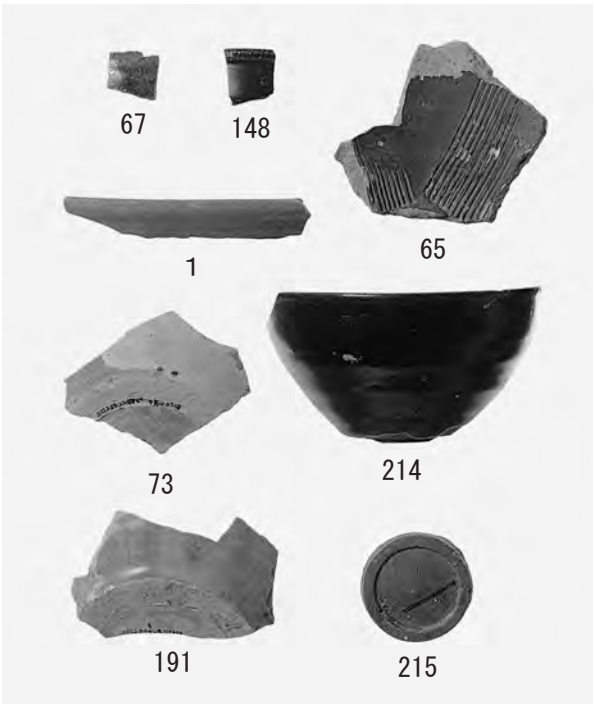
36

46

47

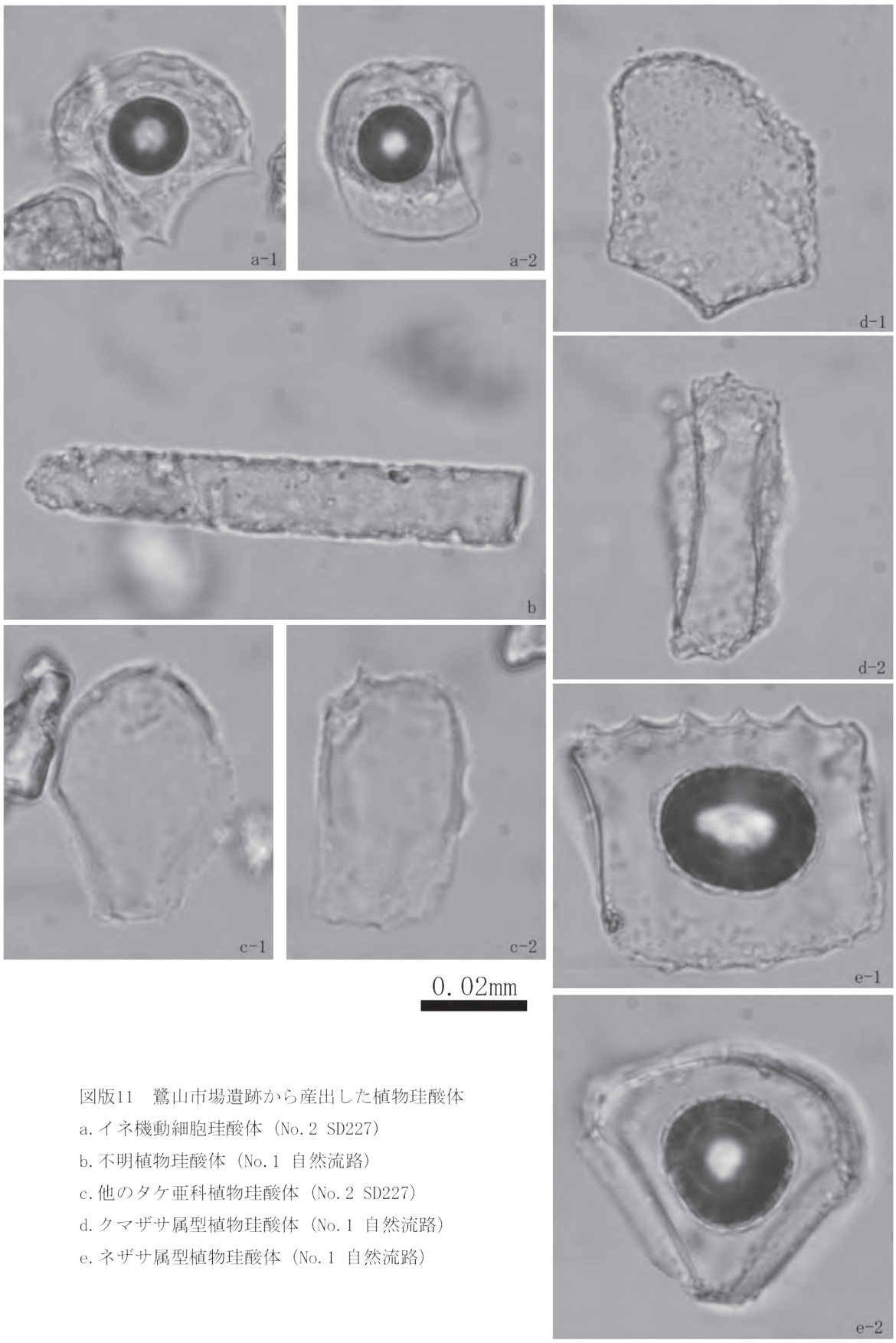
42

図版 9



ＳＤ 225 上層出土土師皿集積

図版 11



図版11　鷺山市場遺跡から産出した植物珪酸体

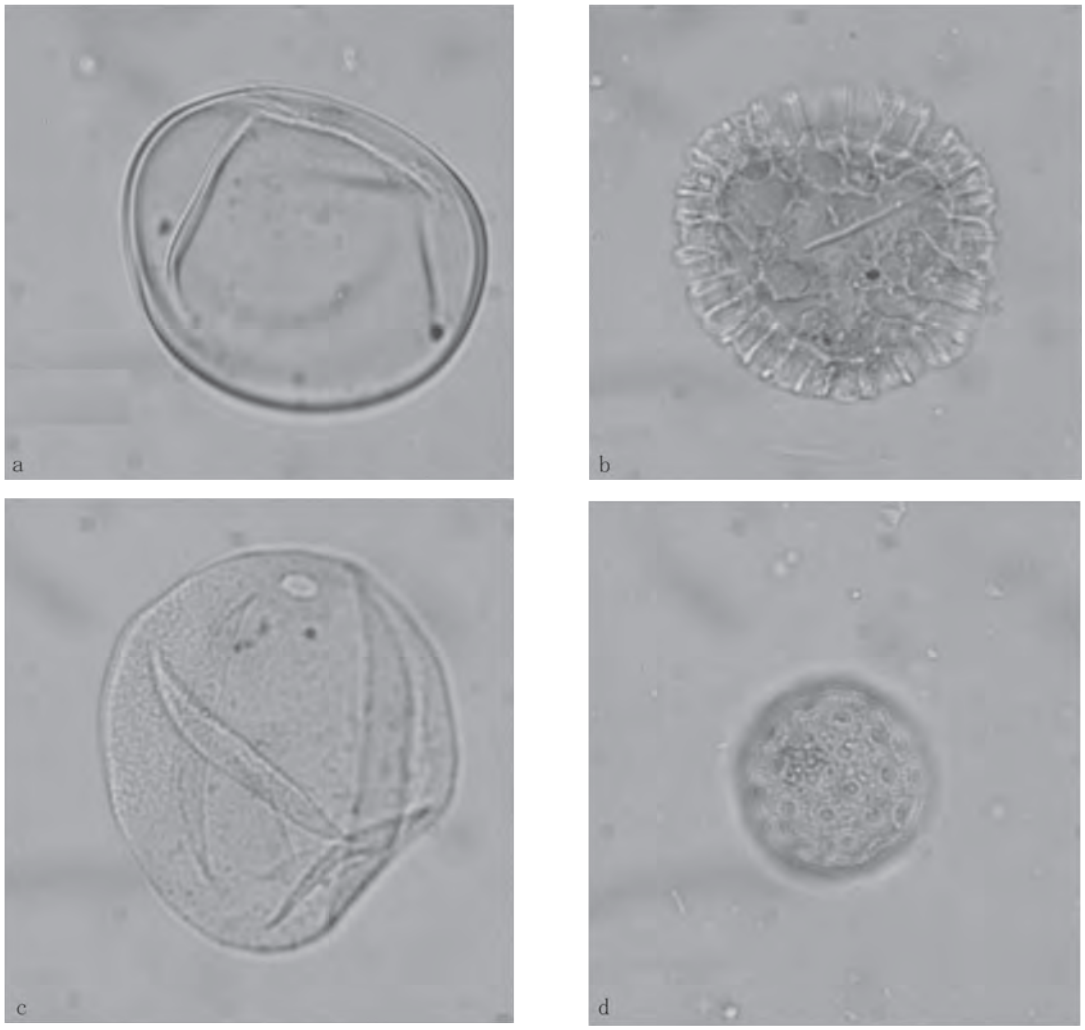
a. イネ機動細胞珪酸体（No. 2 SD227）

b. 不明植物珪酸体（No. 1 自然流路）

c. 他のタケ亜科植物珪酸体（No. 2 SD227）

d. クマザサ属型植物珪酸体（No. 1 自然流路）

e. ネザサ属型植物珪酸体（No. 1 自然流路）



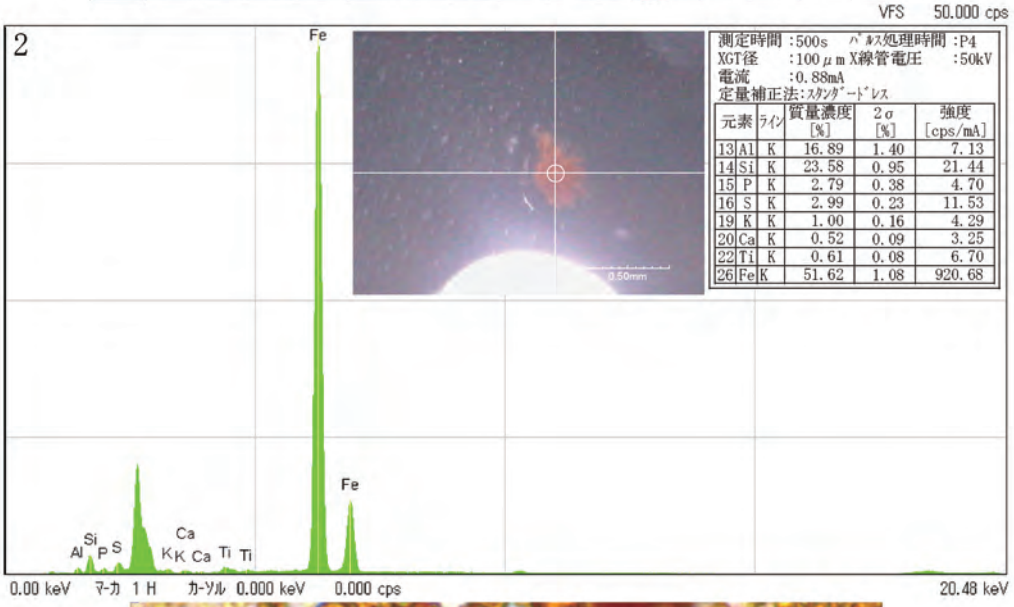
0.02mm

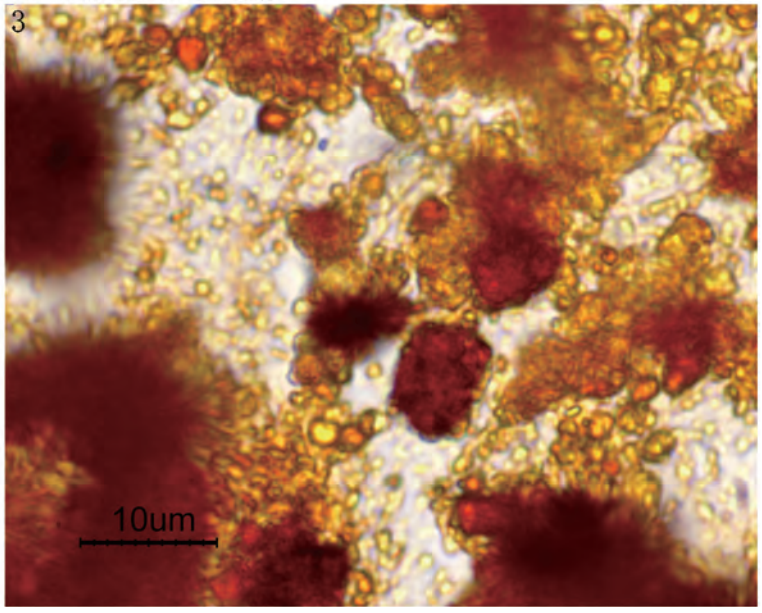
図版12　鷺山市場遺跡のSD224から産出した花粉・胞子

a. 単条型胞子（7層 No. 4 PLC. 426）　b. 三条型胞子（7層 No. 4 PLC. 427）

c. イネ科（8層 No. 3 PLC. 428）　d. アカザ科-ヒユ科（8層 No. 3 PLC. 429）

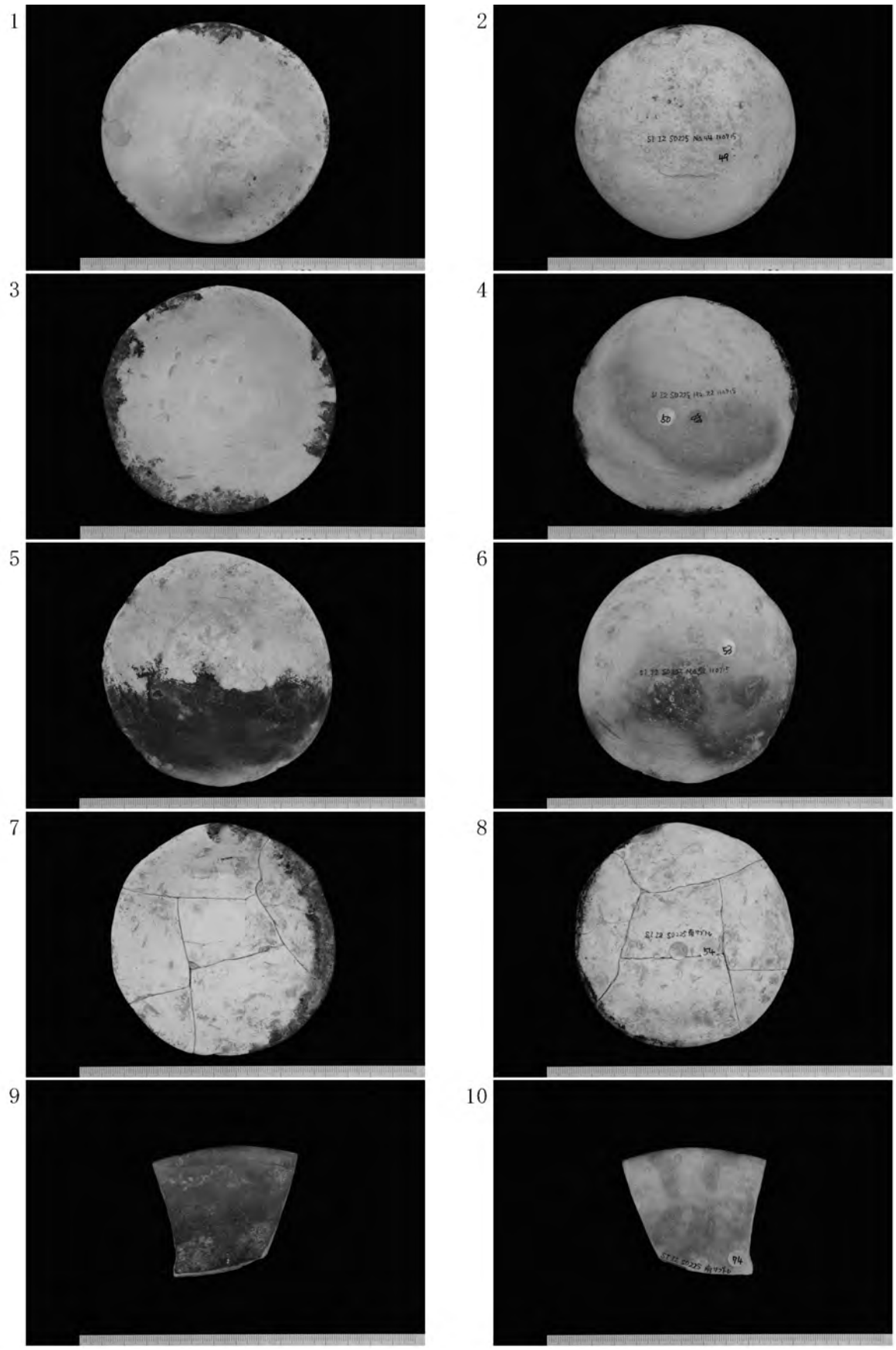
図版 13





図版 13

1．赤色顔料付着状況　2．蛍光X線スペクトル　3．生物顕微鏡写真



図版 14

1.109 内面　2.109 外面　3.110 内面　4.110 外面　5.113 内面　6.113 外面　7.112 内面　8.112 外面　9.　144 内面　10.144 外面

報告書抄録

ふりがな	さぎやまいちばいせき
書名	鷺山市場遺跡
副書名	岐阜市都市区画事業鷺山・下土居土地区画整理事業における区画道建設に伴う緊急発掘調査
巻次	
シリーズ名	(公財)岐阜市教育文化振興事業団報告書
シリーズ番号	第21集
編著編者	梅村　大輔(編)・高見　哲士・(株)パレオ・ラボ
編集機関	公益財団法人 岐阜市教育文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒501－3133　岐阜県岐阜市芥見南山3－10－1
発行年月日	平成24年12月27日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号					
鷺山市場遺跡	岐阜市鷺山・下土居土地区画整理地内	21201	07184	35°27′0″	136°45′19″	243.1㎡	2011.06.13～2012.08.12	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鷺山市場遺跡	集落縁辺	弥生時代後期～古墳時代初頭	自然流路あるいは落ち込み	弥生土器 土師器	
	集落	古墳時代後期～古代	竪穴住居 土坑 柱穴	須恵器 灰釉陶器 回転台土師器	
	城下町	中世	区画溝 土坑 柱穴	山茶碗 瀬戸美濃産陶器 土師器皿	計画的な区画溝が多数みられる。

要約

H2区では遺構検出面が2面確認された
(上面)
鎌倉～戦国時代にかけての遺構・遺物を確認した。近現代の撹乱により詳細な時期が検討できる遺構は少なかった。SD220・221は鷺山一帯にひろがる区画溝であった可能性が高く、詳細な時期は不明であるが戦国時代には機能していたと推測する。
(下面)
古墳時代を中心とした遺構・遺物が確認できた。SB214、215から良好な出土遺物は無かったが、古墳時代初頭頃と推定された。その他には柱穴列が確認でき、周辺に掘立柱建物があった可能性がある。

I2区
調査区西側では遺構の重複が多数みられ、古代～中世まで継続的に土地利用を行っている。SB216は古墳時代後～古代頃と推定した住居で、西側から続く居住域の東端となっている。
また、土坑および柱穴からは平安時代中頃の灰釉陶器が出土し、なんらかの埋納行為の存在を窺わせる。調査区の西から中央にかけて確認した3条の溝は中世～戦国期の区画溝である。多様な出土遺物があり、SD225からは多量の土師器皿が出土した。これらの区画溝は多時期に亘って機能していたと推測する。
調査区東端は基盤層が大きく下がっており、自然流路あるいは落ち込み状になっていたと考える。この自然地形の埋没以後に開溝したSD227からは、プラント・オパールが検出されており、鷺山市場遺跡の北東端に広がる低地利用について資料が提供できたと考える。

（公財）岐阜市教育文化振興事業団報告書第 21 集

鷺山市場遺跡

－岐阜市都市計画事業鷺山・下土居土地区画整理事業における区画道路建設に伴う緊急発掘調査－

平成 24 年 12 月

編集・発行　公益財団法人岐阜市教育文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所

岐阜県岐阜市芥見南山３－ 10 －１